
とある科学の火炎放射《ファイアスロアー》

山田太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアスロアー
とある科学の火炎放射

【Nコード】

N8201V

【作者名】

山田太郎

【あらすじ】

ヒーロー 上条当麻の真似事をして命を落とした俺はとあるの世界に転生していた。

御坂美琴の兄として。原作なんか最早当てにできない……だったら俺は俺の物語を綴るだけだ。この世界で本当に守りたいものができたのなら俺にとってこの世界は偽物ではなく本物なのだから。俺は御坂美弦として生きよう——自分の守りたいもののために。

これは俺のとある物語——

プロローグ（前書き）

趣味で書き始めた小説です。

駄文ですが、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ

失敗した――

そう思ったときには俺は空中を飛んでいた。

どうしてこうなったのか。それは今から15分前に遡る。

とある魔術の禁書目録の最新刊が出たので俺は駅前の本屋に足を運んでいた。

続きが気になってしょうがない。早く家に帰って読みたい。

そんな逸る気持ちを抑える。

まあ、誰にでもあることかもしれないが俺は待ち望んでいた物が手に入って若干テンションがいつもより高かったのだ。

「誰か！！その子を助けて！！」

突然、女性の叫ぶ声が聞こえた。

はい？と俺は声の聞こえてきた方向に目を向ける。

そこには横断歩道のど真ん中で倒れている6、7才ぐらいの子供。おそらく、躓いたのかして転んだのだろう。

それだけなら別に大したことはない。問題は横断歩道の信号が赤だということ、さらに、その子供に向かってトラックが突っ込んできているということだ。

「おいおい！！マジか！！？」

おそらく先ほどの声は母親のものだろう。必死に子供に向かって走っているがとても間に合いそうにない。

「くそ！！」

俺は駆け出す。

もう一度言うがこのとき俺はテンションが高かったのだ。

上条当麻——俺が愛読する『とある魔術の禁書目録』の主人公。苦しんでいる人間がいれば敵味方関係なく手を差し伸べる。

ヒーローのようなことを平然とやってのける男。

男なら誰もが一度は憧れるヒーロー。

もちろん俺も例外ではない。

もしかしたら俺はこのとき上条当麻のようになってみたいと思っていたのかもしれない（笑）。

普段の俺なら絶対にあり得ない行動。そもそも俺は自分の命が一番大切だと思っている人間だ。何よりも自分の命を優先する。別に珍しいことでもなんでもない。世の中そんなものだ。

それでも俺は子供のもとに向かい、体を引つ掴んで道路脇に投げ飛ばした。

自分でもどこにこれだけの力があつたのかと驚く。これが火事場の馬鹿力だと初めて理解した。

やべっ、俺も逃げないと——

そう思った瞬間、凄まじい衝撃に襲われ空中を飛んだ。

そして、今に至る。

失敗した——

ここは「俺は後悔なんてしていない」と言ったほうがカッコいいんだろう。

しかし俺はそこまで人間できていない。

つまり俺は思いつき後悔していた。

一時のテンションで行動した自分を呪う。

馬鹿か俺は……俺なんかヒーローになれるわけがなかったんだ。所詮そんなものになれるのは小説やアニメの中だけだ。

もし次の人生というものがあるのなら絶対に要領よく生きることが誓おう。

そして二度目の衝撃が俺の意識を刈り取った。

どこだここ？やけに明るい。眩しくて目が開けられない。

天国ってやつか？まあ、子共の命を助けたんだ来れて当然だろう。

しかし騒がしい。声が聞こえる。

タオルらしきものに包まれて誰かに抱かれている感じ。

不意に女性の声が聞こえる。とても優しい声で俺に話しかける。

「こんにちは。美弦^{みづる}」

誰だ、それ。

急に眠たくなって俺は再び意識を手放す。

ここから始まるのは俺のとある物語。

プロローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
次回も頑張りたいと思います。

第一話 転生者と原子崩し（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第一話 転生者と原子崩し

俺こと御坂美弦は転生者である。

お前何言ってるのと笑われることを覚悟で敢えて言わせてもらおう、転生者であると！！

いや、だって前の人生の記憶があるんだもん、どう説明すればいいんだ？

前の人生で俺はトラックに撥ねられて死んだ。そこまではいい……いや、ホントは全然よくないけど。

驚くのはここからだ。俺はなんと、とあるの世界に転生していたのだ。

しかも御坂美琴の兄として。兄として。

ここ重要だから二回言いました。

皆さん！！ここで問題です！！御坂美琴に兄はいましたか？

いませんよね！？

なんせ成長して意識がはつきりとしはじめて、親の顔と名前がわかったときは驚いた。だって母親が 御坂美鈴さんだぜ？吹いたよ。それでもかなり優しく、いい母親だと断言できる。作品の登場人物とか関係なく、間違いなく俺の母親だ。

ちなみに父親は原作通り海外に出張しっぱなしだが。

俺は御坂美弦。御坂美琴ではない。じゃあ、美琴はどうなの？と考えていると俺が4歳のときに無事生まれてきた。このとき俺はかなり安心したのを覚えている。

美琴はかなり可愛い。妹として。原作を読んでいたときはお気に入りのキャラとして好きだったが、ここでは家族として、妹として愛している。不思議なもんだね。

けど、俺は美琴が生まれてきたとき喜んだのと同時に、ほんの少し戸惑った。なぜなら原作では美琴に兄はいない。俺という人間は本来存在しないのだ。

正直、この世界に転生したことより戸惑った。だってさ、自分の存在に自信が持てないんだぜ？

俺はない頭をフル回転させて考えた。

そして俺が導き出した答えはここはとあるの世界の平行世界なのではないかということ。

無限に広がる平行世界。

おそらく俺はそんな平行世界の一つに転生したのだ。かなり無理やりな答えだということはわかっている。でもそう思い込まないと精神がもたなかったのだ。

俺はもはや ■ ■ ■ ■ ■ではなく、御坂美弦なのだ。

容姿も以前とまったく違う。生まれつきの茶髪、顔は……イケメンとは言えない平凡な顔。なぜに！？親父はあれだけダンディな顔してんのになんで！？おかしくねえ！？

けど、まあ、なんだかんだで俺にとってこの世界は創作なんかじゃない。守りたいと思う人達がいる真正正銘の本物の世界だ。前の俺からすれば信じられんこと言ってるな……

そして、物語が始まるのはもう少し先だ――

「お兄ちゃん！！」

「ここだ、ここー！おい！！」

聞きなれた妹の声に俺は叫び返す。今日は美琴の入学式だ。母さ

んは今日は大学でどうしても来れない講義があるとかで来れない。かなり残念がつていた。休んでも来ようとしたが単位が取れなくなるので俺が必死に止めた。

これでも元大学生だから後々苦勞することがわかるのですよ。そこで俺がカメラを持たされ、駆り出されたというわけだ。

ちなみに美琴が通うのは常盤台中学。レベル3以上でないと、どれだけの権力者の娘だろうが入学を拒否する超名門お嬢様学校。

もちろん美琴はレベル4の電撃使いだ。エレクトロマスターこのままいけば、原作通りレベル5の超電磁砲になるのだろう。でもひどくね？年頃の女の子に物騒な兵器の渾名つけるとか……以前はカッコいいとか思ってたけど。

それに比べたら俺はレベル3の発火能力者美琴には遙か及ばない。唯一の慰めは発火能力のうちでも上位に位置する火炎放射であるファイアスローアーことぐらいだろうか。

美琴は自慢の妹だ。しかし、たまにどうしようもない不安に襲われる。もし、美琴に何かあれば——いや、必ずある——俺は助けてやることができるのだろうか。上条当麻が何とかしてくれるからといって、美琴の兄である俺が何もしないわけにはいかない。いや、義務とかそんなんじゃないやなくて俺がそうしたいのだ。いくらレベル5といっても中学生だ。裏側にいるのならまだしも心はまだまだ弱い。我ながらとんだスコンだな。以前は妹なんていなかったから……妹がいるというにはこういうものなのか？うーん、わからん。

「ちょっと！！お兄ちゃん」

気づくと美琴が近くで俺のスーツの袖を引っ張っていた。

「ああ、すまん。どうだ？丁度いい時間だし昼飯でも食いに行くか？」

「どうせファミレスでしょ？」

「よくわかったな。俺は基本的にいつでも金欠だ。我慢してくれ」

「どうして金欠なんかになるのよ。飯にもレベル3でしょ？はあ、せつかくだからレストランにでも行かない？私が奢るわよ」

「おいおい、俺の兄としての威厳を叩き潰すつもりか！？大人しく俺に奢られる。たとえファミレスであっても！！」

「はいはい」

「な、なんだよ。その哀れなものを見る目は……」

そんなやり取りをしながら俺と美琴はファミレスに向かう。

「ちょっと、ねえちゃん。俺らと遊んでいかねえ？」

「やめろって、お前じゃ怖がっちまうだろ」

「じゃあさ、俺と遊ぼうよ」

ギヤハハハハと笑い声が聞こえる。

おいおい、どこの誰だよ。そんな縄文時代のナンパする奴は（笑）
美琴も顔を引きつらせて苦笑している。

近くの駐車場で数人の男が少女を囲っていた。うーん、あいつらスキルアウトかな？

しゃあない。上条さんの真似事でもしますか。

「なあ、美琴。少し先に行つててくれないか？」

「どうしてよ？私も……」

「いやいや！！お前がやるとあの連中がステーキのレアになつちまうだろ！！」

「ちよつと！！……どういう意味よ、それ——」

「はいはい、あとで入学祝いに好きな物なんでも買つてやるからさ」

そう言いながら俺は美琴の頭を撫でてやる。そもそも入学祝を買つてやるつもりで昼飯はファミレスにしたのだ。そこは昼飯も奮発しろと突っ込まれるかもしれないが……もう一度言おう、俺は金欠なのだ。

「う、うん。わかった／＼」

現金なやつ（笑）まあ、こういうところが可愛いんだけどね。

「さて、行きますか……」

俺はペシリと自分の頬を叩いて気合を入れる。

「ごめん！！待たせた？」

俺はそう言いながら不良集団の中に割って入って少女の手を取った。

「おい、ガキ！！今は俺らが話してんだ。邪魔すんじゃない！」

安の定、キレられた。

「はい？そう言われてもこの子は俺の連れなんで——」

相手はスキルアウト。いざとなったら能力使って脅せばいい。チキン野郎と言われてもしょうがない。

「は？あんた誰よ？」

こ、この女ここは口を合わせるところだろうが。俺は少女の姿をよく見る。

その瞬間、自分の顔が引きつったのがわかった。少しウェーブをかけて腰まで伸ばしている栗色の髪。身長が高くて、足も長い。

そして、顔の形は驚くほど整っている。

普通ならかなりの美少女だ。そう普通なら。

俺はこの顔をよく知っている。

麦野沈利——最悪だ。

「テメエ、ふざけんな！！やっちまえ！！」

そう言いながら不良共が手から炎や電気やらと能力を使いはじめた。スキルアウトじゃなかったのか？

まずい、実にまずい。俺はただのレベル3の発火能力者。この人数に勝てるわけがない。冷や汗が大量に出る。

「やれるもんならやってみろ！！お前ら全員消し炭にしてやんよ！！」

もうこうなればヤケクソだ。

バシュ！！

そう腹を括った瞬間、俺の顔の横を青白いビームが掠った。

そのビームは不良の一人にぶち当たり、そいつは数メートル吹っ飛ばされて白目を剥いて気を失っていた。良かったな、身体に穴が空かなくて……

啞然とする不良共。

「次は誰がいい？」

凶悪な笑みを浮かべる麦野。

「ひ！？ひひひひひひ！！」

不良共は我先にと逃げ出す。って、俺も逃げないとやばい！

走り出そうとするが腕を掴めれる。……ごめんな、美琴。お兄ちゃん死ぬかもしれない。入学祝い買ってやるって約束したのにな。

これから大変なことも沢山あると思うけど幸せにな。俺はもう助けてやれないけど上条さんがきつと助けてくれるさ。愛してたぜ！マイ シスター！！

遠くを見ながら涙を流す俺。

ずいつ、と麦野が自分の顔を俺の顔に近づける。

怖い、怖すぎる。ちびりそうだ。

普通にしてたら美人なのに……こういうのを残念美人というのだ

ろう。

「うーん、裏の人間には見えないか……あんた、名前は？」

おいおい、名前聞かれたよ。まずいんじゃないか、これ？
でも俺ってよっぽど平凡な顔してたんだろうな。マジ助かった。

「み、御坂美弦。君の名前は？」

ここはこう聞いたほうが無難だろう。できるだけ初対面のふりしないと変な疑い掛けられる。実際、初対面なんだけどね。
まだ死ぬわけにはいかない。

「え？私？私は麦野沈利。レベル5よ。ところであんたって能力者なの？」

これはマジでやばいかもしれん。興味を持たれた。
どうしよう……今さら嘘つけないし。名前を教えたから後で調べられれば一発ではれる。ミスった。

「……何の変哲もない、発火能力者だ。ちなみにレベル3。もういいか？人を待たせてるんだ」

「そ、悪かったわね。もういいわ」

どうやら俺の能力を聞いて興味は失せたらしい。よかった。マジでよかった。

今日ほど自分の能力とレベルに感謝した日はない。

「じゃ、俺はこれで。あと、今度から気をつけなよ？あんた美人だ

から」

まるで俺が助けたあとみたいなセリフを吐く。むなしくなってきた……

「うるさい。余計なお世話よ」

途端に不機嫌な顔になる麦野。

やべっ、変なフラグ立てないうちに退散しよう。フラグを立てるのは上条さんの仕事だ。がんばれ、一級フラグ建築士。女に溺れて死ね。

俺は麦野と別れ、急いで美琴が待っているファミレスに向かう。

思い返すと俺はこのとき相当やばいフラグを立ててしまっていたのだ。

第一話 転生者と原子崩し（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

麦野を登場させました。後々面白くなりそうなので……たぶん。

うーん、でもなんか麦野の口調が難しい。あまりセリフはないけど気を抜くと美琴っぽくなる。

あまりにも不自然だと感じましたら、ご指摘ください。けれども少々のキャラ崩壊はお見逃しください。

感想お待ちしております!!

第二話 転生者と一方通行（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

8月16日に少しでも改訂させていただきました。

第二話 転生者と一方通行

先ほど死にかけた俺は腰が抜けてしまい、やっとのことでファミレスに到着した。

かなり混んでいる。

「すみません、連れが先に来ていると思うんですけど……」

店員さんに事情を話して案内してもらう。

「申し訳ありません。お客様の席はただいま相席となっております
て」

「あー、全然いいですよ」

少し気まずくなるだろうが問題ない。今は昼時で混^めんでるし飯^{めし}が食えるだけましだろう。

「こちらでございます」

「どうも……美琴待たせたな。少し手間どっちまった。すまん」

ホントは俺何もしないんだけどね。わかるだろ？妹にはカッコつけないものなのさ。

まあ、九死に一生を体験したのは事実だし。

「……」

おかしい、普段の美琴なら「遅い！！どれだけ待たせてんのよ！

？今日は厄日ですか？

さつき死にかけた次はこれですか！？ふざけんな、マジふざけんな！！

なにが飯食えるだけましだよ！！こんなだったら飯なんざ食わねえほうがましだよ！！

見る！！美琴なんて気まずさのあまりすっかりしおらしくなっているじゃないか。やべ、超可愛い。鼻血が出そうだ。

俺はちらりと一方通行のほうを見る。この空気の中で平然とステークセットを食っている。もしかしたら、こいつ場の空気ですら反射しているんじゃないか？恐るべし反射能力。

学園都市最強——学園都市の頂点に君臨する超能力者。最強であることを超越するために絶対能力進化実験に参加して10031人の妹達シスターズを殺害する男。上条当麻に敗れた後に打ち止めに出会い、妹達シスターズを守ることを誓う男。

まだ実験は始まっていないのだろう。始めさせるつもりも毛頭ない。俺は妹達シスターズが生まれることに反対はしない。絶対しない。俺が許せないのは生まれた妹達シスターズをまるで実験動物のように扱う奴らだ。

それは一方通行も例外じゃない。どれだけ後悔しても、どれだけ償っても俺は許さない。俺の妹達シスターズを実験動物として扱い、殺した事実は消えない。あいつらの兄として、家族として俺は絶対許さない。もし仮に後々、一方通行が実験に参加し俺の妹達に手を出すというなら俺はこいつを殺す。そのつもりで戦う。レベル3の俺なんか手も足も出ないだろうがそれでも殺す。逆に殺されるかもしれないがそれでも殺す。

もう一度言おう。俺の家族に手を出す奴は絶対に許さない。

……まあ、まだどうなるのかどうかもわからないのに許す、許さないの話じゃないけどね。

「えーと、君ってレベル5の一方通行だよね？」

俺は勇気を振り絞って一方通行に話しかける。もしかしたら戦うことにもなるかもしれないのだ。それに比べたらなんでもない。

「あん？どおして俺の名前してんだア？書庫^{バンク}には登録なんてしてねエぞ」

ギロリと俺を睨み付ける。おー怖い怖い。

「え？アンタ、レベル5なの？」

驚きの声をあげる美琴。いつもの調子に戻ったな。さっきのしおらしいお前はどこにいった（苦笑）

「どんな能力なの？序列は？ちょっと！！教えな——ムグツ！？」

俺は美琴を黙らせるために手で口を塞いだ。

「いや、噂で聞いた容姿にそっくりだったからさ」

「はン、それでなんか用でもあンのか？人のメシの邪魔してんじやねエぞ」

「邪魔するなんてとんでもない。少し聞きたいことがあるんだ」

「なんだよ」

「君はさ。最強を超えるつもりか？」

俺はストレートに聞いた。変に誤魔化すつもりはない。一方通行はかなり驚いた顔をしていた。自分の心が読まれたのかとも思っただろうか。

美琴もいつもと違う俺の雰囲気黙っている。

「見ず知らずのお前に答える義理なんざねェんだがなア。その通りだ。最強じゃ全くつまんねェ。俺はその先にある絶対的な強さが欲しいんだよ」

「……そうか。変なこと聞いて悪かったな」

「チッ」

一方通行は舌打ちすると再び飯を食い始めた。

やっぱり一方通行は絶対能力進化実験に参加するんだろうな。

俺と美琴はそのあと無言で飯を食い続けファミレスを後にした。

こんなならレストランに行ったほうがよかったな……

さて、昼飯も食ったし美琴に約束していた入学祝いでも買いに行くか。

第二話 転生者と一方通行（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

少しでも改訂させていただきました。

麦野に次いで一方通行を登場させました。意外と一方通行の口調も難しい。

この話は後々の主人公の決意をあらわしたものです。なぜか一方通行には強気です。

次もがんばりますので読んでいただけたら幸いです。

感想お待ちしております!!

第三話 転生者と超電磁砲（仮）（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第三話 転生者と超電磁砲（仮）

俺と美琴は入学祝いを買うためにセブンズミストに来ていた。

さつきはしおらしくなっていた美琴だったが今ではいつもの調子に戻りはしゃいでいる。まあ、楽しんでいるならそれに越したことはない。楽しめるうちは目一杯楽しめ。楽しむことだけ考える。これはいつも俺が美琴に言っている言葉だ。人生は楽しいことだけじゃない。辛くて、苦しいことのほうが多いのだ。だったら楽しい時間を少しでも大切にしたいほうが良いに決まってる。

美琴には笑っていてほしいのだ。こいつにはそれが似合っている。そのためなら暗い部分を俺が全て背負ってもいい。

俺は本来存在するはずのない人間だから。

俺の美弦の「弦」は美琴の「琴」にかかっている。琴は弦がなければ弾くことができないのだ。弦あつての琴、琴あつての弦。そういうことだ。我らのお母様もなかなか考えていらっしやる。ならば俺はこいつのために生きよう。

ははっ、俺こんなんじゃ彼女できないな。どうしよう……

イケナイ、イケナイ。今日は柄にもなくシリアスになりっぱなしだ。

「おい、美琴。はしゃいでいるところ申し訳ないが、入学祝い何が欲しいかも考えろよ」

「べ、別にはしゃいでなんかいいわよ!!」

「そうか、そうか。わかったからバチバチ鳴らすのやめような?」

電撃だけは洒落にならん。何回か食らったことがあるが、あれは

やばい。食らう度に全身が軽いやけど状態になって寝ることすらできなくなるのだ。美琴は手加減しているつもりなのだろうが痛いものは痛い。俺も発火能力なんかじゃなくて、バイロキネシス幻想殺しが欲しいよ。イマジンブレイカー頻度じゃ絶対に上条さんを抜くことになるだろう。これがこいつの兄に生まれた宿命か。

「ふん！どうせ、そんなにお金持っていないんでしょ？無理しないでいいのよ？」

ふいに遠慮がちになる美琴。お前に遠慮するという心があつたことに驚きた。

確かに俺は万年金欠野郎だが妹から心配されるほどじゃないはず……一日カップ麺一個とか普通だろ？普通だよな！？

だが、舐めるな！！美琴よ、兄の偉大さ思い知るがいい！！

「ふ、ふはっ、ふははははははははっ！！」

突然の大笑いに驚いてビクリとする美琴。周りの客も訝しげな目で俺を見るが今の優越感に比べたら大したものじゃない。

「ちょ、ちょっと、どうしたのよ。お兄ちゃん！！」

あたふたとする美琴。うん、見ていて面白い。

「ふはははははは！！問題ない、問題ないのだよ！！……美琴、ちょっと耳かせ」

俺は耳元で美琴に今現在の貯金額を教えてやる。ギョツと目を見開いて俺を見る美琴。なんだよ、そこまで驚くことなんかなくね？そんなに驚いてばかりだと演算に支障が出るぞ。

「ちょっと、アンタ！！アンタがどうしてそんな大金持ってるのよ！！」

アンタって（苦笑）

「いやいや、そこまで驚くことじゃないだろ？普通に節約したり、アルバイトしたりとやりようなんていくらでもある。それにこれだけあればお前の好きなもの何でも買えるぞ？」

「9千万なんて普通にしてて貯められる額じゃないでしょ！？それにお兄ちゃん私の入学祝いにそのお金全部使うつもりだったの？」

「当たり前だろ？いつも言ってるじゃないか、楽しむときは目一杯楽しめと」

美琴は顔を引き攣らせてドン引きしている。

「まあ、入学祝いに全部使うというのは冗談として……何がいい？」

おい、なんで冗談って言った瞬間にそんなあからさまに残念そうな顔をするんだ。まさか、本気で全部使おうと考えてたのか？我が妹ながら恐ろしい。

しばらく俺たちはぶらぶらと見て回っていたがなかなかいいものが見つからない。

しかし、ある店に通りがかったとき美琴が立ち止った。

パジャマの専門店のようだ。美琴はショーウィンドウに張り付いて、とあるデザインのパジャマを食い入るように見ていた。……まあ、大体予想はつくよね？

やはり美琴が見ていたのはゲコ太デザインのパジャマだった。

おいおい、何もそこまで鼻息荒くして見なくても……

「それが欲しいのか？」

俺はできるだけ無表情で美琴に聞く。下手に笑ったりすると恥ずかしがるのだ。一番欲しいものじゃないと意味がないしね。

「え？これ？あ、えっと――」

「ちょっと見てこれ！！マジ子供っぽくない！？こんなの着る奴いの！？」

俺たちのそばにいたカップルがパジャマを指さして笑った。

「……なんでもない」

美琴は落ち込んでそこから離れてしまった。

「メエら余計なこと言いやがって！！消し炭にしてやる！！俺が手から炎をパチパチと出すとそいつらは小さく叫んで逃げて行った。」

「まったく。欲しかったら、欲しいってはっきり言えばいいんだよ。手間のかかる妹だよ」

俺は苦笑した。

結局、美琴が選んだのはネックレスと髪留めだった。あれ？この髪留めよく見たらアニメで美琴がつけてた奴じゃん。

「美琴、これはおまけだ。受け取れ」

俺は持っていた紙袋を美琴に渡す。

「これって――」

袋の中を見た美琴は驚いた顔をしていた。

「デザインは俺の趣味だ。気に食わなかったら着ずに放置してくれ
てもかまわない」

「えー、お兄ちゃんってこんなのが趣味だったの？ま、しょうがないからもらっとく」

美琴はしぶしぶ受け取るふりをしたが、俺は美琴の顔がニヤけているのを見逃さなかった。

俺たちが帰路についていると数人の男どもが前に現れた。

「おい、にいちゃん。昼間はよく俺らをコケにしてくれたな」

こいつら麦野に絡んでたやつらか？おいおい、どうして俺のところにくるんだよ。ただの八つ当たりじゃねえか――！！

「俺あなたたちに何もしてないじゃないですか――！！」

「うるせえ――！俺らの邪魔しただろうがよ」

ダメだ……どうする。こいつら能力者だし、この人数相手になんかできねえぞ。逃げるか？

「ほう、にいちちゃん、かわいい子つれてんじゃねえか。なんなら、その子おいて行くってんなら見逃してやってもいいぜ？」

その瞬間、俺の中でピシリと何かが音を立てた。

「ギャー！！なんだよこれ！！」

不良共が悲鳴をあげる。すでに不良共の服には火がついていた。それはどんとと燃えていく。

「おい、お前ら今なんつつた？答える」

俺は低い声で言う。

「早く消せ！！なんだよこれ！？なんで消えないんだよ！！」

転げまわる不良共。火を消すことに必死で俺の声は聞こえていないらしい。能力なんか使わせない。冷静さを欠いたら演算ができなくなるのだ。

そろそろ消さないと死ぬな。俺は火を消すために不良共を足蹴りする。美琴に手を出そうとした報いだ。火傷と足蹴りで済んだだけ感謝してほしい。

まあ、俺にできるのはこの程度のショボイ能力だ。能力の詳細は手の延長線上に炎をばら撒くもの。あとは能力によって生み出した炎を操ること。ちなみにさっきのは指先から小さな炎を高速で発射しただけ。レベル3なので威力もかなり低い。

「さて、帰るか。寮まで送るよ」

「まったく、もう少しでアイツら死んでたわよ？私だったら気を失わせるだけで済んだのに」

「いやいや、あいつらは少し反省が必要だろ」

まあ、実際に死ぬような火傷は負わせていない。水で冷やして、薬塗ったらすぐに治るだろう。気は失っているが。

今日はいろいろありすぎて疲れた。だってさ、6人しかいないレベル5に今日一日で2人も出会ったんだぜ？おまけに不良共に八つ当たりされたりと……早く家に帰って寝たい。そんなことを思いながら再び帰路についた。

今思えば俺の平穩といえる日常は今日までだったのかもしれない。

第三話 転生者と超電磁砲（仮）（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

美琴との会話が少ないと思い、この話を書きました。

主人公がやつと能力使いました。炎を生み出すことと操ることは別になるから、多重能力じゃね？と思いながら書いたのですがお見逃しください。それにしても能力がショボイ。まあ、これから派手にしていきたいと思います。

次もがんばりますので読んでいただけたら幸いです。

感想お待ちしております！！

第四話 転生者と幻想殺し（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第四話 転生者と幻想殺し

あの厄日から2日が経った。いや、久しぶりに美琴と歩き回れたから厄日とはいいい切れないか……

しかし、今日はどうやら俺にとって本当の厄日のようだ。

今、俺はある裏路地にいる。あたり一面が赤い。真っ赤だ。まるでトマトを大量に叩きつけたかのように何かの固形物らしきものも混じっている。

そして俺の足元にはかつて人だったものがいくつも転がっている。壁や道路にこびりついている固形物が内臓の欠片だということを理解するまでそう時間はかからなかった。俺は込み上げてくる吐き気を必死に耐える。何をどうすればいいのかという思考ができない。どうすればいい？どうすればいい？どうすればいい？どうすれば――

「結局まだ一人残ってたって訳よ」

「超面倒くさいです。まったく、麦野が超頑張らないからです」

「私一人の所為にしてんじゃねえぞ」

「大丈夫、そんなむぎのを私は応援してる」

今日は厄日なんかではなく俺の命日のようだ……神様、俺なんか悪いことしました？ただの妹思いの兄じゃないですか（泣）このクソッタレ！！俺の神はもう死んだ！！二度と賽銭箱に金入れてやらねえからな！！

こんな状況じゃなかったら飛び跳ねて喜ぶほどの美少女に囲まれている。

俺の意識は40分前に遡る――

俺は学校が終わったので、あるスーパーで夕食の材料を買っていた。先日、美琴の入学祝いを買ってやったので、もはや節約をする必要はなくなり、金欠でもなくなった。そもそも9千万の貯金があるって金欠と言うのかすら怪しいが……それでも俺はあまりお金を使いたくないのだ。それでも死なない程度の食生活をする決めている。よって今日は野菜の特売セールを狙う。晩飯は野菜炒めに決定！！

セールの時間が迫ってきている。周りの客の目の色が変わり始め、店内の空気が張り詰める。

いいぜ！！テーマエらが野菜を手に入れられると思っているのなら、まずはその幻想をぶち壊す！！

あ、やべ………つつつつ頭のネジがいい具合にはずれて調子に乗ってしまった。

「えゝ、ただいま5時30分となりましたので野菜特売セールを開始いたします」

よっしゃ！！いくぜ！！俺は商品棚の間を駆け抜ける。このルートは俺が見つけ出したあらゆるセールに対応できる万能ルートだ。しかし、突然俺の横を誰かが並走してきた。あ！この野郎邪魔すんじゃないねえ！！ここは俺の最短ルートだ！！この勝負は絶対に負けないんだよおおお！！

俺は相手の脇腹に手刀を叩き込む。俺の素人のような手刀なんて対して効かないと思ったのだが相手は小さく叫んで盛大に転倒した。よし！！道は切り開いた！！いっけええええええええええ！！！！！！

——10分後

「ふははははっ……大獵大獵。いや、買いきすぎだな、これは。つい熱くなっちゃった」

自分の才能が恐ろしい。最短ルートを攻略するものはセールを攻略するのだ。俺って主夫になれるんじゃないか？

そこで俺はものすごい負のオーラを出している少年に気が付いた。学生服を着ており、髪の毛を整髪料でツンツンに立たせている。これって俺が知っている人間で一人しか該当しないのだが……

「上条当麻キタアアアアア……！」

俺は興奮のあまり叫んでいた。いやだってさ……！我らの上条さんだよ……！今叫ばずにいつ叫べと言っのか……！

「な、なんだ……？」

いきなり名前を呼ばれて驚く上条さん。

「ファンです……！サインください……！」

やべ、これ、みんなに自慢できるよ。うわ、家宝にしよう。

「いつから俺は有名人になったんでせうか……？」

「いや、マジでサインください……！なんでもしますから……！」

上条さんのサインと釣り合うものなんてねえ……！……！美琴以外は。

「な、何でも？じゃあさ、少しその野菜分けてくれないか？もちろん金は払うから。実はさっきのセールで誰かに殴られてさ、全く野菜が取れなかったんだ……不幸だ」

なっ！？俺は上条さんになんということをしてしまったんだ……

「な、何ならタダであげます！！」

「いや、それはさすがに悪いって」

「いやいや、そんなことはありません！！」

そんなやり取りを続けて10分後――

俺は上条さんからサインをもらい（色紙に書いてもらった）、上条さんは俺があげた野菜の入った袋を持って街中を歩いていた。

「え！？御坂さんって高校生だったんでせうか！？」

「いやいや、今さら敬語だなんてやめてくれよ。1歳年上なだけだし、あまり変わらないだろ？」

俺はサインもらった後は普通にタメ口で話した。いや、疲れるし。人のこと現金だなんて言えないな（笑）

「いや、それでもやっぱり失礼ですよ」

「じゃあさ、俺と友達になってくれないか？それだったら敬語なんていらないだろ？」

「へ？ああ、そうですね！！……じゃなかった、そうだな！！改めて上条当麻だ。よろしく」

「御坂美弦だ。美弦でいい」

俺達は握手をした。上条いい奴すぎるだろ。見ず知らずの奴から友達になってくれって言われてOKするとか。まあ、それでこその上条当麻か。

「せっかくだから晩飯一緒に食わないか？俺の妹も呼ぶからさ。…なかなか美人だぞ」

俺は美琴と上条に仲良くしてもらいたい。いや、いずれはそうなるのか。兄としては複雑だけどね。

「ほ、本当でせうか！？わたくしめにそのような機会を与えてくださるとは！！！」

「そうとも、そうとも自慢の妹だぞ。感謝しろ。ふはははっ！！」

「ははゝ恐れ入ります」

そんなバカ丸出しの会話をしながら歩き続ける。

「ところで美弦は能力者なのか？」

突然、上条は聞いてきた。

「ああ、俺の能力は発火能力だ。バイロキネシスちなみにレベル3。お前は？」

「うん？俺は無能力者だよ。でも右手に幻想殺^{レベル0}っていう力が宿^{イマジンプレイヤー}てるんだ」

「どんな力なんだ？」

俺は敢えて質問した。

「異能の力ならどんなものだろうが消せるんだ」

「それって原石じゃね？本当に無能力者か？つか、チートすぎる」

「システムスキャンでもそう判定されてるから正真正銘の無能力者だつて！！それに、そんな便利な能力じゃねーぞ。能力を消せるのは手首から上だけだし。普通の喧嘩じゃ全然役に立たない」

知ってます（笑）まあ、でも……

「それでも、それは誰かを守れる力だ」

「な、なんだよ突然」

「だから自信持てってことだよ。いつか守りたいと思った人のために使ってやれ……ってミサカはミサカはくさいセリフを恥ずかしげもなく口にしてみる」

は俺のオリジナルだ。文句があるのなら言ってみろ。

「なんだ、それ。流行ってるのか？」

「うるせえ！！」

ふと上条が立ち止り、路地の間を見る。

「上条？どうした？」

「ああ、ほらアレ」

そういつて指をさす。

そこには黒いスーツを着た男共が白衣を着た女性を囲んでいる。

「なんか、アレやばくないか？」

「そうか？まあ、もう少し様子を見よう。今の状況だと何とも言えん」

「あつ——」

突然、黒服の男どもが女性からトランクを奪い取ったのだ。女性
は抵抗して道路に強く叩きつけられる。

「あいつら——！」

上条は飛び出していく。まったく、面倒事は御免なんだけどな。
まあヒーローだからしょうがないか。

「上条！！俺が追うから女性のほうを頼む！！」

「お、俺も！！」

「多分あいつら無能力だ。お前の力じゃ分が悪い。だったら能力者の俺が追うほうがいい」

そう言っただけ俺は全力で黒服の男共を追う。

いつぶりだ？これだけ全力で走るのは。明日は間違いなく筋肉痛だ。

そして角を曲がった瞬間、今までの景色が一変する。

赤、赤、赤。どこもかしこも赤。

わからない。一瞬、目がおかしくなったのかと思った。しかし、足元を見ると人が転がっている。いや、それはもはや人と呼べるのかすら怪しい。頭や四肢が消し飛んでいるものや、上半身と下半身が離れて内臓が飛び出しているものさえある。

その中でトランクだけが無事だった。

ああ、これはさっきの黒服の男共か。ようやく俺は理解した。それだけ死体の損壊が激しいのだ。

ナンダコレハ——こうして冒頭に戻る。

第四話 転生者と幻想殺し（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

上条さんの登場です！！一年前の話だから中学三年生ですね。気を抜くと口調が主人公とかぶってしまいます。どうしようorz

あとアイテムとの遭遇は次回にまわします。中途半端に終わってしまい申し訳ありません。そろそろ主人公をどん底まで突き落としていきたいと思います。どん底から這い上がらせて成長させるということです……多分。

次回もがんばりますので読んでいただけると幸いです。

感想お待ちしております！！

第五話 転生者とアイテム（前書き）

趣味で書いたような小説です。
どうぞよろしくお願いします。

第五話 転生者とアイテム

現れた4人の少女たちはさもこの状況が当然であるかのように会話を続ける。

「結局1人残ってたって訳よ」

「超面倒臭いです。麦野が超頑張らないからです」

「私1人の所為にしてんじゃねえぞ」

「大丈夫、そんなむぎのを私は応援してる」

アイテムのメンバーが勢揃いしていた。どうして……もしかして、上条の不幸体質が感染したのか？まさか、これほど感染力が高いとは。それよりもこの状況をどう切り抜けるか……

「さつさと終わらせてファミレスで鮭弁でも食うか——あれ？あんな、この前の発火能力者？あの時は裏の人間じゃないと思ったんだけど、やっぱり裏の人間だったか」

麦野の腕のあたりが白く輝き始める。

「ま、待て！！俺はこいつらの仲間じゃない。俺はこいつらを追いかけてただけだ」

俺は懇願するように必死に無関係であることを訴えた。

「そんな超見え透いた嘘なんか誰が信じるっていうんですか」

「ま、結局諦めるしかないって訳よ」

「本当だって！！嘘なんかじゃない！！」

クソツタレ！！まだ死ぬわけにはいかないんだよ！！俺は俺の持ち得る最高の演算式を組み立てていく。出し惜しみはしない。いや、しないと死ぬ。頭が割れるように痛い。初めてじゃないか？これだけの演算をするのは。

俺の手から火花がバチバチと散る……まだだ。もつといけるはずだ。

俺は演算を続ける。

「そういうことだから大人しく死ね」

麦野が冷酷に死刑判決を下す。

「そうか、死ぬしかないのか……だが断る！！」

こんなところで死ぬるか！！

先手必勝、俺は腕を前に突き出し、能力を開放する。

——放射！！

俺の手から爆発するかのように炎が生まれる。その爆発する炎は太い軌道を描きながらアイテムのほうへと突き進む。

——拡散！！

炎は麦野たちの一步手前で四方に分散し、そこで大きく爆発する。爆発による凄まじい衝撃派が生まれる。これで目くらましくらいにはなるだろう。

俺は過度の演算でふらふらになりながらそこから逃げようとする。
しかし――

「おい、どこに行くつもりだ？」

「――ッ」

おいおい、あれだけやって目くらましにもならないのか。もちろ
ん、メルトダウナー麦野の原子崩しは防御もできることは知ってるし、オフエンス絹旗の窒素
装甲に至っては自動防御だ。それでも何秒かぐらひは時間稼ぎがで
きると思っていた。自分の考えが甘かったってことが……

「この程度の方が私の原子崩しに通用するわけねえだろうが」

麦野が俺に近づいてくる。

「俺は本当に一般市民だ。信じてくれ」

今さら何を言ってもおそろく無駄だろうな。

「お前、何か勘違いしてないか？たとえ一般人だったとしても裏の
仕事見られたからには消えてもらう」

再び麦野の手が白く輝き始める。

死にたくねえな……まだやることが残ってるのに。俺はぼんやり
とそんなことを考える。

以前トラックに撥ねられて死んだときの記憶が蘇る。冷たくて、
暗くて、とても寂しくて、辛かった。もう二度とあんな感覚は嫌だ。
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

い死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
——死ニタクナイ!!!!

俺は突如自分の脳が内側から弾け飛ぶような激痛に襲われる。激痛なんてものじゃない。激痛を遙かに上回る感覚。

「ツ、
「あああああああああッ！！！！」

なんだよ！！何なんだよ、これ！！

痛い！！痛い！！誰かッ！！誰か助けてくれッ！！

「ちよつと！！何なのよこれ！！」

麦野の困惑する声が聞こえる。俺は激痛のなか目を開ける。そこはまるで地獄のような光景が広がっていた。

紅い炎があたり一面に燃え広がっているのだ。転がっている死体にも燃え移りまさしく地獄と形容するに相応しかった。おいおい……俺の能力じゃ、こんな色の炎なんか出せねえぞ。

「なんかこれ超やばくないですか!？」

絹旗の怯える声が聞こえる。

「こいつはレベル3なのよ!? こんな発火能力聞いたことないわよ! !」

「むぎの、あの人のAIM拡散力場が変化してる。それに力場の流れが何か変」

「そんなことあり得るの!？」

フレンダも相当焦ってるみたいだ。

「わからない……」

……やばい、意識が――

最後に聞こえたのは「とにかく、こいつ運んでここから離れるわよ……」という麦野の言葉だった。

そして、今後俺は本当の地獄を見ることになっていく……俺はいつたいてどこまで堕ちていくのだろう。

第五話 転生者とアイテム（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

今回いつもより少し短いです。申し訳ありません。

アイテムのメンバーの口調が難しい！！特に麦野！！おかしいところがあればご指摘お願いします。

ちなみに今回で第一章終わりです。駄文ですがこれからも読んでいただけたら幸いです。

あとアドバイス、感想等お待ちしております。少しでも駄文から脱却して良いものを皆さんに読んで頂きたいので。

では次回も駄文ながら頑張りたいと思います！！

第六話 暗部入門……（前書き）

趣味で書いたような小説です。

改訂しました。あまり変わっていないと思いますがよろしく願います！！

第六話 暗部入門……

匂いがする……これは消毒液か？

俺はゆつくりと目を開ける。

「知らない天井だ……」

俺はお決まりのセリフを吐く。とりあえず俺は生きているらしい。なんか全身に管が繋がれているし、体が全く動かない。

外は暗いけど今って何時だ？

上条と晩飯の約束してたんだけどな……悪いことをした。今度謝らないといけないな。

「おや？ やつと目覚めたかい？」

そこにはカエル顔の男が立っていた。

「ヘウンキャンセラ
冥土返し？」

「ほう、僕のことを知っているのかい？」

「……ええ、学園都市にはカエル顔の冥土返しっていう凄腕の医者がいるって噂がありますから」

俺は適当に誤魔化した。別にそんな噂なんて流れてないけど問題ないだろう。

「俺はどうしてこんな重症患者みたいになってるんですか？」

「実際に重症なんだよ。君はよっぽど無茶な演算をしたようだね？
脳にかなりのダメージがあったよ。まあ、僕が治療したから何の後
遺症も残らないけどね？」

「ちなみに俺ってどれぐらい眠ってました？」

「うーん、2日とちょっとかな？あと中学生くらいの女の子が来て
看病してくれてたよ？彼女かい？」

「違います。妹です」

たぶん美琴だな。他に中学生の知り合いなんて知らないし……

「それじゃあ、お大事にね？」

「先生、助けていただいてありがとうございます……」

「僕は医者だよ？これが僕の使命だ。礼なんかいらないよ」

そう言っただけで冥土返しは病室を出て行った。

カッコいいな……

「はあ、美琴にも心配かけただろうな。電撃ビリビリは確定か……」

俺は苦笑しながらつぶやく。まあ、生きているからこそ美琴の電
撃を食らえるのだ。文句は言えない。

言っておくが俺はMじゃねえぞ……

そんな風なことを考えているとガラツと扉が開く音が聞こえた。
俺は入ってきた人間の顔を見て背筋が凍りつく。タイミング良
すぎだろ、おい。

「やっと目が覚めたみたいね」

麦野はベッドで寝ている俺を見下ろしながらそう言った。

「……なんだよ、俺を殺すんじゃないかったのか？俺を病院に運んだのお前らだろ」

「そうしようと思ったんだけどね。気が変わったのよ」

嫌な予感がする……俺は冷や汗が流れるのを感じながら口を開く。
口の中がパサパサして喋りにくい。

「お前らが俺を生かす理由なんてないだろうが。いったい何考えてやがる……」

「あんた、私の組織、アイテムに入りなさい」

やっぱり……あの時フラグ立ってたんだな。どうして俺にはこんなフラグしか立たないんだよ……チクショウ！！

「もし、断ったら？」

「あんたの妹……この前、常盤台中学に入学したんだってね？おめでとぅ」

「——ッ、テメエ！！美琴に手エ出したらぶっ殺すぞ！！」

この野郎！！安っぽい脅迫してんじゃないぞ！！

「あんたの妹がどうなるかはあんたの答え次第よ。ま、そうなればあんたの答えは一つしかないと思うけど」

いや、待てよ。これから起こることを考えると裏側にいたほうが都合がいいんじゃないか？表側にいるよりよっぽど動きやすい。それに俺は決めていたじゃないか、美琴のためなら暗い部分全部背負ってもいいと。お前らが俺を利用しようとしてるなら、俺もお前らを利用してやるよ。

「そうかよ……………わかったよ。暗部に、アイテムに入ろう」

「そう。歓迎するわ……………ようこそ学園都市の闇へ」

麦野は綺麗な口元を歪ませ俺を歓迎した。

——あれからさらに三日が経った。

確かに俺は重症だったはずだが、なぜかこの三日で全快した。さすがは冥土返しの病院だ。

この三日間美琴はずっと看病をしに来てくれた。やはり持つべきは優しい妹だな。

ちなみに俺が目が覚めたあとに美琴が来たときは焦った。だってさ、半泣きになりながら飛びついてくるんだぜ？涙目になりながら上目づかいで見てきた時にはあまりの可愛さに鼻血が出た。

美琴はそれに驚いてナースコールを押し駆けつけてきた看護師さんに苦笑された。美琴は俺の病状が悪化したと思い込んで余計に目が赤くなっていたが……

「ごめん、ごめん。何も泣くことないだろう?」

「泣いてなんかいいわよ!!お兄ちゃんが鼻血なんか出すから悪いんでしょ!!」

いや、それお前の所為だからな?誰だって鼻血出ると思うぞ。来年は上条にもそれぐらいデレてやれよ。絶対落ちるから。

「いやゝ、悪かったって。今度なんか奢ってやるから許してくれよな?」

「そんなこと言ってるんじゃない!!どれだけ私が心配したかわかってんの!?……かと思った。」

「あ?ごめん、聞こえなかった」

「お兄ちゃんが死んじゃうかと思った……」

おいおい、もう完璧泣いてんじゃないか。

「こんな頼りない妹残して死ぬわけにはいかないだろ?安心しろ、俺は絶対死なねえよ」

我ながらこんな恥ずかしいセリフを妹に吐いているのかと考えたら鳥肌が立った。

「うん」

美琴は美琴で顔まで真っ赤にしてるし……だからそういうのは上

条にしてやれよ？

上条も二回ほどお見舞いに来てくれた。学校もあるのに申し訳ない。ちなみに美琴と鉢合わせにあることはなかった。残念……なのか？複雑な兄心だ。わかってくれ。

「本当にごめん!!」

上条は病室に入ってくるなり俺の横で土下座をした。

「な、なんだよ、いきなり」

「美弦一人で行かせた所為で……すまん!!」

「おいおい、あれは俺が勝手に一人で追いかけただけだろう？この怪我は自業自得というやつさ」

「そうは言っても……」

上条マジでいい奴だな。

「そーいや、飯の約束してたろ？いつか一緒に食おう。俺、退院したら忙しくなるからしばらく会えないと思うけど。それでも約束は約束だからな」

「忙しくなるってどういうことなんだよ。お前、なんか危ないことするつもりじゃあ……」

「大丈夫だって、別にそんなんじゃねえよ」

勘良すぎんだろ！！

「なんか困ったことがあったらすぐに言ってくれ。助けにいくから」

「まあ、期待はしないよ」

「な！？酷すぎる！！」

俺達はしばらくそんな風に話して笑い合っていた。

これが俺のまっとうな表側の人間として最後の会話となるのだろう。それにしても随分とお粗末だった気もするが、所詮そんなものだろう。

俺は俺の物語を綴る。それは暗部に入っても変わらないのだ。

……それにしても結局、あの紅い炎は何だったんだ？俺はあの時演算なんてしてない。あんなものは原作にも登場しなかったはずだ。やはり俺というイレギュラーの所為なのか？わからん。まあ、いずれわかるのだろう。それよりも心配なのは派手に動いてアレイスタ―に目を付けられることだ。今回もどうせばれているんだろう。原作読んでいても何考えてんのか全く謎だったからな。要注意人物だ。そして、いよいよ退院の時間がきた。ちなみに美琴や上条は学校があるから来れない。むしろ来ないほうがいい。

「久しぶりだな、むぎのん！！」

俺は嫌味たっぷり元気よく麦野に挨拶した。

「殺されたいの？あんた」

その笑顔がものすごく怖いです。トラウマになりそう。

「さ、行きましょ。こっちに迎えの車が来てるから」

なんだよ、この豹変ぶりは……俺は軽い鬱になりながらも車に乗る。

車は俺を闇へと運ぶ――

俺は今アイテムのアジトにいる。

豪華だけどころかなり殺風景だ。ソファアがあるだけ。

もっところ設備を充実させたほうが良いんじゃないのか？こんなのはアジトじゃない！！まったく浪漫が感じられないのだ。ならば俺が変えて見せようじゃないか。

「ちょっと、なに超ボーっとしてるんですか」

「あ？ああ、すまん」

「じゃあ、まず自己紹介でも始めましょうか」

麦野が無駄に仕切る。まあ、リーダーだから当然か。

「新しくアイテムに入ることになった御坂美弦だ。レベル3の発火能力者だ。よろしく頼む……」ってミサカはミサカは悪人っぽく話して少しでも牽制してみたり」

「……」

「……超キモイです」

「……結局そういう訳よ」

「……大丈夫、そんなみさかを私は応援してる」

「殺せええええ！！いつそ殺してくれええええ！！」

調子に乗るんじゃないかった。麦野！！お前はせめて何か言ってくれ！！そんな可哀相なものを見る目をするなあああ！！

そして、みんなそれぞれ自己紹介を始めていく。面倒だから割愛。

「じゃあ、みんな出かけるわよ！！」

麦野が張り切り切ります。なんだ！？いきなり仕事かよ……鬱だ。

「おい、どんな仕事なんだよ？俺何も聞いてないぞ」

「は？仕事？今日は仕事なんてしないわよ」

麦野はあっけらんと答える。

「じゃあ、どこ行くんだよ……」

「……ファミレス」「……」

くらりと眩暈に襲われた。

……俺って本当に暗部に入ってたんだよな？

第六話 暗部入門……（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

第二章の始まりです。

若干シリ阿斯気味になっていくと思います……多分。

まあ、この章は修行編だと思ってください。

次回もがんばりますので読んで頂ければ幸いです。

アドバイス、感想等お待ちしております！！

第七話 白閃……（前書き）

趣味で書いているような小説です。
駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第七話 白閃……

只今、午後9時30分。

俺と麦野はとある研究所に潜入していた。

「おい麦野、どうして破壊じゃなくて潜入なんだ？」

「人の話聞いてた？今回の私たちの仕事はこの研究所の中に保管されてるデータを持ち帰ること。研究所ごと破壊したらデータも消し飛ぶじゃない」

「つまりコソ泥か……まあ、メタル。アの。ネークみたいで燃えるからいいか」

「何よ、。ネークって」

「世の中の男が一度は憧れる最高の兵士だ」

みんな、そうだよな！？だって以前の俺はこのシリーズの4をやって最後に感動して泣いてしまったのを覚えている。

「へえ……どうでもいいけど」

心底どうでもよさそうに答える麦野。クソ！！この世界にもねえのかよ、メタル。アは！！

「どうしてもよくない！！絶対見れば惚れると断言できる！！」

「御坂ってそういう趣味だったの？キモいんだけど」

「違えよ！！男として憧れるっただけだ！！」

俺は真正銘のノーマルだ。そっちの趣味はない。まあ、メタル。アのネタはこのあたりにしておこう。

「ところで、どうしてフレンダや絹旗を連れて来なかったんだ？あいつらの方がよっぽど俺なんかより戦力的に役に立つと思うんだけど」

「この任務はあんたの場馴れみたいなもんよ。あいつらを使うほどじゃない。それとも何？人殺しをする仕事の方がよかった？」

麦野って優しいのか、怖いのかわからなくなってきた……そうか、これがヤンデレってやつか。

そこがむぎのんの必要なんだろう。

「むぎのん最高おおおお！！げばあ！？」

俺の腹に麦野の拳が突き刺さった。そういえば、こいつって素手でも十分強いんだっけ……

「次言ったら殺すから」

「ずみ、ません。麦野ざ、ん」

俺は這いつくばるように謝る。ガチで痛い。

でも……いづれは人を殺すような仕事も回って来るってことか。俺はそんな状況になったらどうなるのだろう。俺は人を殺せるか？正直、人を殺してる自分なんて想像できない。怖いとも違う、な

んだか妙な気持ちだ。はあ、わからん！！

「麦野、この任務終わったら薬局で胃薬買って」

「は？そんなの自分で買えばいいでしょ」

「財布忘れたんだよ……頼む！！胃に穴が空きそうだ」

「つたく、しょうがないわね」

溜息を吐く麦野。あれ？なんか麦野マジで優しくないか？原作と微妙に違うような気が……なんか逆に怖い。

「何企んでいやがる。俺のむぎのんがこんなに優しいわけがない！……ごめんなさい」

麦野さん目がマジ怖いです。でも、それでこそ僕らのむぎのん！！俺たちはいとも簡単にデータが保存されてるコンピューター室に辿り着くことができた。なんか簡単すぎないか？

「なあ、暗部の仕事ってこんなもんなの？」

原作では派手にやっていたが案外人殺しの仕事なんて少ないのかも。安心安心。

でもスクール戦の時はどうしよう……俺なんか一瞬でミンチにされそうだ。

「そんなわけないでしょ。ほら始めるわよ」

そう言っ て作業に取りかかる麦野。

「すげえな。俺には何が何だか……」

「おかしいわね……暗部から狙われるほどのデータなのにセキュリティが脆弱すぎる」

「あ？お前がレベル5だから簡単に感じるだけじゃねえの？」

「……」

麦野は眉をひそめて何か難しい顔をしている。
何だよ？黙るなって、怖いだろ。

「おい、麦n「黙れ」……はい」

何か考えてるみたいだし邪魔しないでおう。

「終わったから帰るわよ」

しばらくして麦野がUSBメモリを引き抜いてそう言った。

「え？いいのか？」

「私たちは指示された場所で指示された通りにデータを盗んだ。何も問題ないわ」

まあ、確かにそうだが。そんな適当でいいのか？ 紛いなりにもリ
ーダーだろ？

俺たちは盗んだデータを上の連中に転送しないといけないのでア
ジトに戻ることもなかった。

あ……胃薬忘れた。

「おかえり、むぎの、みさか」

「おう、ただいま淹壺」

脱力系美少女が無表情で出迎えてくれた……いい。

「超早かったですね。まさか超失敗したんじゃ……ププツ」

絹旗がC級映画のパンフレット見ながら俺を馬鹿にするように笑
う。

「はっ！！そんなわけないだろう。まさしく完璧とはああいいうこと
を言っただろう」

「あんたは何もしてなかったじゃない」

「お、お前の護衛をしていたんだ！！」

だって、しょうがないじゃん！！本当に何もすることなかったん
だからさ！！

「結局、役立たずって訳よ」

うるせえぞ、金髪！！わかってんだよ、んなことは！！

「どうして……どうしてなんだよおおおお！！」

叫ばずにはいらなかった。男には叫びたい時があるのさ。
いずれわかる。

俺は気分転換に窓から外を眺める。ここにいる生徒のどれほどが暗部に関わっているのだろうか……傍から見ればここは超能力を手に入れられる夢のような場所なのかもしれない。けど実際はとてつもなく歪んでいるのだ。どうしようもなく、どこまでも……腐っている。何度でも言おう、俺はそんな中で大切なものを守ると。

そんなシリアス風味にカッコつけていると――

「あ？」

なんか遠くのビルの屋上に何か見えるんだけど。まさかゴルゴか？あれ？なんかこっち向いてないか、アレ。今ピカッて光ったし……光った？光った、光った、光った。なんか、光点がどんどん大きくなってる。

「みんなああああああ！！伏せろおおおおおお！！」

俺は慌てて窓から離れる。その瞬間、白い閃光が窓をぶち破って俺のいた所を通過し、向こう側の壁に炸裂した。凄まじい衝撃波に吹っ飛ばされ床に叩きつけられた。かなり痛い。

白煙が視界を塞ぐ。

「おい！！みんな無事か！？」

「大丈夫」

「無事って訳よ」

「超痛いです」

「あんたは大丈夫なの！？」

よかった、みんな無事のようだ。お前ら運良すぎだろ、特に滝壺とフレンド。

あ？よかった？俺は何でこいつらの心配してんだ？

「なんとか……大丈夫」

ただし強くぶつけたせいで体がうまく動かせない。

部屋を見れば酷いことになっている。絹旗が座っていたソファーは溶けて燃えているし、壁にはでかい穴が空いていた。って絹旗はどこに行ったんだ！？声は聞こえてたけど……

見回すと部屋の端に転がっていた。どうやら室素装甲の自動防御で助かったらしいが、それでも衝撃で吹き飛ばされたようだ。

「ふざけやがって！！ブツ殺す！！」

麦野はぶち切れている。これはしょうがないな……怖いよ、むぎのん。

「どこの組織の襲撃なんだよ。みんな心当たりあるか？」

「そんなのわかるわけねえだろ!!」

「落ち着いて、むぎの」

おい、あぶねえぞ滝壺。今の麦野に下手に近づくな。消されるぞ!!

「そもそも、どうしてアイテムのアジトがわかったのよ」

フレンダは不思議そうに聞く。

「クソがあああああ!!!」

麦野マジうるさい。リーダーなんだからもう少し落ち着け。

ふと、俺はあの攻撃をどこかで見たような気がすることに気付く。

「なあ、麦野、さっきの攻撃ってお前の原子崩しと似てなかったか？」

「そう言われれば超似てましたね」

「ああ!?! 私以外に原子崩し使える能力者なんているわけないだろうが!!」

「いや、でもさ、アレどう見ても原子崩しだろ。粒機波形高速砲だろ」

「結局、原子崩しって訳よ」

ピピピピピピピッと誰かの携帯の着信音が鳴り響く。

「はい、もしもし。……ああ！？もうちょっと早く電話しろ、クソが！！もうその襲撃受けた後なんだよ！！」

電話に向かって激怒する麦野。本当にこいつは……黙っていれば相当の美人なだけだな。

おそらく電話相手はあの連絡係の女だろう。

「おい、どうしたんだよ」

「さつき、研究所から盗んだデータあったわよね？あれ、ウィルスだったらしいわ」

口調がもとに戻る麦野。やっと落ち着いたみたいだ。

「じゃあ、何か？俺たちはまんまと偽物掴まされた挙句、居場所を特定されて攻撃されたってことか？……お前レベル5だろ！！どうしてウィルスって気づかなかったんだよ！！」

「黙れ」

「……はい」

誰にだって間違えることってあるよね！？

「で、結局どうするって訳よ？」

フレンドが麦野に聞く。

「ああ、それで新しい仕事よ。本物のデータを手に入れて、研究所の破壊すること。地図は後で送られてくるわ」

「襲撃してきた能力者は？」

答えるまでもないだろう――

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

麦野は最凶の笑顔でそう言った。

俺がこのとき軽くちびってしまったのは秘密だ。

第七話 白閃……（後書き）

こんなの麦野じゃねえええええええ……ゴホン、失礼しました。

読んでくださってありがとうございます！！

本当にすみません。麦野ってこんな感じでしたっけ？全く自信がありません。変なところがあればご指摘ください。他のキャラも含めて。

さて、話は暗部編になりました。おそらく、美琴と上条等のキャラはしばらく出てこないと思います。この章はアイテムをメインにしていこうと考えてます。

まだ少しギャグの欠片が残っていますね。シリアスってなかなか書くの難しいです（泣）

それでは次回も頑張りますので読んで頂ければ幸いです！！

第八話 空素装甲……（前書き）

趣味で書いてるような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第八話 窒素装甲……

白い閃光が俺の真横を通過する。

演算のし過ぎで頭が痛い。しかしチャンスは一度だけ。

集中しろ。当たれば命をこの体ごと刈り取る閃光は俺にはまず当たらないのだから。

そうだ、集中しろ――

俺達アイテムは破壊するよう指示された研究所の前にいる。

「ここね、フフッ私たちに喧嘩売ったこと後悔させてあげるわ」

麦野は殺る気満々のようだ。だから怖いよ、その笑顔。

「とりあえず、別れて行動しましょう。絹旗と御坂はデータの回収、フレンドはここを爆破するための爆弾の設置、そして私と滝壺は能力者を殺る、いいわね？」

「超」「了解」「」

「なあ、絹旗。どうして俺とお前なんだ？俺また何もすること無いじゃん」

「そんなの超知るわけないです。超足引っ張らないでくださいね、この役立たず」

「このロリ野郎！！さっきから俺のこと馬鹿にしゃがって！！——げぼあ！？」

絹旗が俺の腹に窒素パンチを食らわしてきた。かなり痛いな、これ麦野より痛い（泣）アイテムにはまともな女はいないのか？

「今度、ロリって言ったら超潰しますから」

「何を！？」

ナニを潰すって言うんですか！？超怖いこと言わないでください！！

俺たちは監視カメラを切り抜けながら進んでいく。さっき麦野と行った研究所と比べたらかなり数が多い。まあ、当たり前か。こっちに本物のデータがあるんだし。

「そこ、超気を付けてください」

「はいはい」

やべ、絹旗のパンツが見えそうだ。しかし俺は紳士だ。黙ってチラ見など断じてしない！！

「おい、お前もう少しスカート長くしたら？パンツ見えそうだぞ」

「超大丈夫です。計算してギリギリ見えない長さにしてあるんです」

「……さいですか」

わかってたけどさあああ！！それは健全な男子諸君に喧嘩売ってるよね！？

しばらくすると大きなコンピュータがある部屋に辿り着いた。さっきの研究所より明らかすぎるくらいだ。いい、ここは何の研究してんだ？上の連中も連絡係の女も教えてくれないんだよな。「地図に書いてる通りならここじゃないか？」

「そうですね。御坂は超邪魔なんで大人しく見張っててください」

絹旗はそう言って作業に取りかかる。忘れがちになるがこいつもレベル4だから、かなり頭が良いんだよな……ロリっぽいけど。

「超潰しますよ」

「なぜだ！？」

なぜ俺の心の声が聞こえるんだ！？まさか、こいつ読心能力サイコメトリ使えるんじゃない？……多重能力者じゃね？

「顔見れば何を考えてるのかなんて超お見通しですよ」

さすが暗部の人間。体は子供、頭脳は大人ってわけですか。

「まだか？麦野はもっと早く済ましてたぞ」

「超しようがないじゃないですか。麦野はレベル5ですよ？」

俺は暇でしようがない！！ったく、これならフレンダと爆弾の設置してた方がまだマシだったかも。

「はあゝい。そこまで」

突然、スピーカーから間延びした男の声が聞こえてきた。

「——ッ、ばれてんじゃねえか、絹旗！！」

やっぱり体は子供、頭脳も子供だよ！！

「うゝん、君達はよくやっていたと思うよ？」

何こいつマジむかつくんですけど……馬鹿にしてんの？

「どうやら、こっちの声も相手に超まる聞こえのようですね……」

絹旗が腹立たしそうに呟く。珍しく気が合うな、俺もだ。

「じゃあ……とりあえず死のうか」

その瞬間、部屋が白い閃光に包まれる。恐ろしいまでの衝撃と熱

風。俺は発火能力者であるため熱にはそれなりの耐性があるが衝撃だけはどうしようもない。されるがままに爆風の餌食となる。

「あ……ぐああッ」

俺は壁に叩きつけられ肺の中の空気が全部持って行かれる。

意識が朦朧とする……顔を上げると壁が無くなっていた。外が丸見えだ。

「おいおい、マジかよ」

俺は目の前の存在に驚く。5メートルほどの大きな工業用ロボットのようなものが動いているのだ。ほらアレだ、アニメ版のとある科学の超電磁砲に出てきたテレスティーナが乗ってた黄色いやつ。あれが黒に塗装されてレールがついてるものを想像してくれ。

「これは学園都市第4位の原子崩しを再現した兵器なんだ。油断しているとあっという間にあの世行きです」

「わざわざ、とろい口調でご説明どうも」

俺は傷ついた体にムチ打って起き上がる。

「……絹旗ッ！！いけるか!？」

「超問題ないです。どうやらアレみたいですね、私達のアジトを襲撃したのは」

絹旗さんマジぱねえス！！衝撃は殺せなかったようだが窒素装甲のおかげで無傷だ。

「データは手に入れたから、とりあえず、アレをぶっ壊すぞ」

「私に命令しないでください。御坂こそ超足引っ張らないでくださいよ」

お願い！！ちょっとはカッコつけさせて（泣）男はそうしないと死んじゃうの！！

「なに泣いてるんですか、超キモイです」

「ちくしょおおおお！！テメエの所為だぞ！！」

俺はロボットに八つ当たりの如く火炎放射を浴びせかける。放射

！！放射！！放射！！放射――

炎がロボットを覆い隠す。燃え尽きるおおおお！！

「はッ！！ポンコツが――」

「うゝん、そんな攻撃じゃ全然気かないよゝ」

その瞬間、炎の中から極太の光線が放たれた。それは真っ直ぐ俺のほうへと向かって来る――やべッ！！

「なに突っ立ってんですか！！」

俺の前に絹旗が庇うように立ち塞がる。光線は絹旗の前で不自然に止まり、ビキビキと音を鳴らし軌道から外れて、外の闇へと進んでいった。

「やっぱり、麦野の原子崩しに比べたら超大したことありませんね」
カッコよすぎるだろ絹旗！！そしてカッコ悪すぎる俺！！なんか涙が出てきたよ……

俺は再び火炎放射を相手にぶつけるがまったく効いていない。所詮レベル3程度の通常攻撃だとこんなもんか。それにしても弱すぎんだろ、俺。

絹旗は絹旗で下手にロボットに近づけないでいる。いくら麦野より威力が弱いと言っても原子崩し、至近距離で食らうのはやばい。さっきも窒素が割れるような音してたし。

「あゝあ、何だこれ？なんか本当にマジでガチでイラついてきた……おい、絹旗今から少し時間稼いでくれないか？」

「それで何もできなかったら超潰します」

「だ、大丈夫だ、問題ない」

絹旗の言葉にビビりながら俺は演算を開始する。

「何をしてるのかな」

俺に向けて光線を放つロボット。それを絹旗が受け止め、軌道を外すの繰り返し。絹旗も少しずつ辛そうな顔になってきている。

「つままないな……いい加減に死ねや、コラ」

ガラリと男の口調が変わる。凄まじいスピードで絹旗に接近しその体をアームで薙ぎ払った。絹旗も突然のことでアームを受け止められず、そのまま吹き飛ぶ。おい、どんだけ機動性高いんだよ！！

「次はテメエの番だ。クソガキ」

俺に接近してくるロボット。

……馬鹿だろ、こいつ。遠距離のまま攻撃してくればいいものをわざわざ近づいて来るなんてさ。

演算はすでに終了している。頭が痛い。レベル4並みの演算してるんだもんな、脳細胞がどれほど死んでいることやら……

「それはこっちのセリフだ。あばよ、ポンコツ」

俺の手から生み出された炎はそのままロボットの足元へと向かい、そこで大きく爆発した。

足元をすくわれたロボットはバランスを崩しそのまま倒れる。

「今だッ!! 絹旗!!」

絹旗がロボットの元へ駆けていく——そして拳を叩き込んだ瞬間、俺の炎ではビクともしなかった装甲に大きな穴が開き、ロボットの動きが止まる。

さすが絹旗!! やっぱりただのロリじゃなかった。

「やった……」

俺は腰が抜けてへたり込む。

「いやゝ。今回は僕の負けだねゝ。じゃあ、また会える日を楽しみにしているよゝ」

声はそれきり聞こえなくなった。遠隔操作でもしてたのか？

それにしても誰だったんだよ……気味悪いだろ。

「御坂も超やればできるじゃないですか。超見直しました」

「そうだろ、そうだろ？だから今度パンツ見せ——げぼあ！？」

今度は窒素リアットを食らう俺。新技！？ちなみに俺はロリコンではない！！

「何やってんの？あんたら」

そこに麦野と滝壺、そしてフレンドが合流してきた。

「麦野遅い！！俺らを襲撃したやつならもうスクラップにしたぞ」

「能力者じゃなかったの？」

滝壺は無表情で首を傾げて聞く。

「ええ、なんか麦野の能力を再現した兵器でした。超弱かったですけどね」

おい、絹旗！！お前馬鹿か！？そんなこと言ったら麦野が——

「へえ……そんなに弱かったんだ」

ヤバイ、麦野が青筋立てて笑ってる！！

絹旗も自分の失言に気が付いたのか、顔を真っ青にする。

「む、麦野！！ち、違うんだ——」

俺が訂正しようとするが、麦野が原子崩しを打ち出したのだ。俺の真横をものすごい閃光が走る。ガガガッと何かとぶつかり合う音がする。

それはなんと俺たちが倒したはずのロボットが打ち出した原子崩しだった。

……まだ動けたのか、危ねえ！！死んだふりとか小学生か！！しかし麦野の原子崩しはあっけないほどそれを圧倒し、そのままロボットを飲み込む。

あとには破片すら残っていなかった。

「ま、弱いつてのは本当らしいわね。みんな帰るわよ」

そう言つて啞然とする俺たちを置いて出口に向かう麦野。

「絹旗、今日はお前がいて助かった。ありがとう」

「なんですか、突然。超気味が悪いです」

「いや、だから今度は俺がお前を守つてやるよ。つてミサ力はミサ力はくさいセリフを赤面しながら言ってみたり」

「な、なに言ってるんですか！！」

恥ずかしそうに赤面する絹旗は可愛いと感じた俺であつた。ちなみにロリコンじゃないよ？

第八話 空素装甲……（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

絹旗との共闘の話でした。それにしても戦闘シーンがショボイ……

何かアドバイスがあればお願いします!! 絹旗とフラグが立ったよ
うな…… あくまで候補です。どうなるか全く考えてません。

感想お願いします。アドバイス、批評等なんでも結構です。

次も頑張りますので読んでくだされば幸いです!!

第九話 恋慕……（前書き）

趣味で書いているような小説です。
駄文ですどうぞよろしくお願いします。

第九話 恋慕……

麦野に胃薬を買ってもらい（一番高いやつ、なんか効き目がすごいらしい）俺達は半壊したアジトへと戻ってきた。とてもじゃないがアジトとして使えそうにもない。

「で、どうすんだよ？これ」

「今日はひとまず解散にしましょ。すぐに新しい場所が用意されると思うから」

「超楽しみです。スクリーンでも付いてませんかね」

おいおい、まさかそこでC級映画でも見る気じゃないだろうな。

「私は武器庫がある部屋が欲しいって訳よ！！」

フレンドが興奮したように言う。わかってるじゃないか、フレンドー！やっぱアジトと言えばそんな感じだよな！！俺は全く使えないけど、まさしく浪漫だ！！

「俺は指令室みたいな部屋をつけてほしい！！これ以上は望まないから！！」

いや、闇の組織と言えば指令室でしょ。そうだなあ、できればエヴァン。リオンに出てくるみたいなやつ。眼鏡かけて顔の前で手を組んでみたい。

「あんたらが思ってるような部屋じゃないわよ」

麦野が呆れたように言う。お前がそんなだからソファーがポツンと置かれてるみたいな部屋になるんだよ！！レベル5だろ？金もってんだろ？だったら、もう少しマシな設備にしろよ！！

「むぎの、私はフカフカのソファーがあればいいよ」

滝壺おおおお！！何言ってるんのお前！？なんか微妙に期待した顔してるし！！

「まあ、それぐらいだったら何とかなるかもね」

それぐらいじゃねえ！！それだけだよ！！まさか、お前ってケチなのか！？

「やった」

あの滝壺がガッツポーズしてる！？どれだけ嬉しいんだよ！！

「つ、疲れた……もう帰っていいか？」

忘れていると思うが俺は過度の演算（最後のあの攻撃）で頭が痛いのだ。マジでふらふらする。

「そうね、とりあえず次の場所が決まり次第連絡するわ」

そついうわけで今日は解散となった。家に帰ったら寝よう。俺は酔っ払いの如く道を歩く。

どこか座る場所ないかな……なんか吐き気もする。

「大丈夫？」

ふと横から声が聞こえる。あれ？滝壺じゃないか。

「どうした？お前の家ってこつちだったか？」

「みさかが歩くの辛そうにしてたから」

良い子すぎるだろおおお！！浜面が惚れるのもわかる。現に俺が惚れそうになったよ！！っと、これは浜面に申し訳ないな。人の彼女を寝取ったらダメだもん……悔しいが。本当に悔しい！！

「そっか、ありがとう。じゃあさ、この辺で休めるところ知ってるか？」

「近くに公園があるよ」

いや、ダメだろ。こんな暗い中で男と公園行くとか……紳士の俺だからよかったものを、他の男だったら襲われるぞ。

「こつち」

いきなり滝壺は俺の手を掴んで引つ張る。ちょ、ちょ、ちよつと！？滝壺さん、な、何してんの！？手繋ぐとか恋人でもないのにし、しちゃダメなんだよ！？

言っておくが俺はこういった耐性が全くない。笑いたければ笑え！！俺はリア充じゃねえ！！

「あー、ここね。知ってる、知ってる」

よくここで美琴と遊んでたっけ……懐かしいな、うん。あの頃はアホ毛がピヨンピヨン動いて可愛かったなあ。
俺達は並んでベンチに腰掛ける。

「……」

「……」

気まずい。誰か、助けて。

滝壺の優しさは嬉しいが気まずいものは気まずい。

俺はチラリと滝壺の顔を見る。本当に何も考えてなさそうな顔だなあ。

こういう時は他人のA I M拡散力場に身を委ねてるらしい。！？
ってことは今こいつって俺のA I M拡散力場に……う、うわ、どう
どうすれば、い、いい？

「どうしたの？みさか顔赤いよ？」

だ、ダメだ！！浜面すまねえ、恋愛は早いもの勝ちだ！！そうだよ、世の中早いもの勝ちだって親父も言ってたじゃないか！！それで母さんを落としたとかなんとか——この際、親のことなんてどうでもいい！！

「な、なななな何でもない。ただ、ただ大丈夫だ」

しまった！！ラップ口調になっちまった。

俺は再び顔を見る。

そこにはやはりボーっとした顔ままの滝壺。

こいつの能力は能力追跡^{A I Mストーリーカー}。一度記憶したA I M拡散力場の持ち主を捕捉し、たとえ太陽系の外まで逃れても居場所を探知できる能力

らしい。それに、それだけじゃなく他人のAIM拡散力場に干渉して能力を奪ったり、強化できたりする可能性も秘めているらしい。レベル5になったら最強じゃね？って感じになるが能力の発動には体晶が必要なのだ。その結果、スクールとの抗争の時に取り返しのつかないことになる。

俺自身の考えとしてはあまり体晶を使ってほしくない……麦野が許さないだろうけど。やっぱり、優しい女の子には幸せそうに笑っていてほしいと思うのは間違っているのだろうか？

「みさか？」

「ああ、ごめん。ボーってしてた」

ついシリアスなことを考えてしまった。俺はギャグの方が好きなんだよ……！

「なあ、フカフカのソファアが欲しいって言ってたよな？自分の部屋にないのか？」

「うん、自分の部屋にあまり物を置いたりしないから」

マジか、年頃の女の子ってもつとパーってしてそんな気もするけど。そういえば、こいつっていつもピンクのジャージだしな。……よし……！しゃーない。

「買ってやるよ」

「え？」

「だから、ソファア買ってやる」

俺の貯金額覚えてるか？ソファーなんて、うまい棒みたいなもん
だ。うまい棒って知ってるよね？ちなみに俺は明太子味が好きだっ
た。

「本当にいいの？みさか」

「ああ」

俺がそう言っでやると滝壺は本当に嬉しそうに微笑んだ。そうそ
う、やっぱり女の子はそんな風に笑ってるほうがいい。

「じゃあ、明日にでも買いに行くか」

「うん。みさか本当にありがとう」

やばい、くらりと来た。頭痛とか関係無しで。

「じゃ、じゃあ明日、セブンスミストに10時30分に待合せでい
いか？」

「うん、いいよ」

それから、しばらく休んだら楽になったので俺は帰ることにした。
滝壺は最後まで送ると言ったが俺が断った。だって危ないもん。女
の子は夜遅く出歩いちゃダメ！！これ鉄則！！

というわけで俺と滝壺はデート……じゃない！！ただの買い物に
行くことになった。

デートってことでもいい？え？ダメ？

第九話 恋慕……（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

滝壺です。もう滝壺でいいかな……

次回は滝壺とのデート？です。どうなるのかはお楽しみ……あまり期待しないで待っていてください。

感想お待ちしております！！アドバイス、批評等なんでも結構です！！！！

では次回も頑張りますので読んでくだされば幸いです！！

第十話 逢引……（前書き）

趣味で書いてるような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第十話 逢引……

わたくし御坂美弦は人生初デートに緊張して胃を荒らしてしまいました。

しかし麦野に買ってもらった胃薬『止穴^{とけつ}』を服用し、なんとか朝までに回復することができました。

さすが10万円の胃薬。効き目は確かにあった！！ありがとう、むぎのん！！

俺はセブンスミストの玄関口に立って、滝壺を待っている。只今10時15分。

来なかったらどうしよう……つか、これ浜面に本当に申し訳ないな。ダメだダメだ。世の中早いもの勝ちなんだよ！！俺にもチャンスぐらいあってもいいだろ？人を好きになることがいけないことか？否、断じて否！！

だから気にしない、気にしない。

「おはよう、みさか」

俺の目の前にいつの間にか滝壺がいた。相変わらずのピンクのジャージか、まあ可愛いから全然問題ない。ジャージだろうと何だろうとこいつなら何でも似合うだろう。

「おはよう、滝壺」

「みさか、なんか顔色わるいよ？」

「そうか？気のせいだろ」

気のせいじゃありません。さっきまで胃を荒らして死にかけてま

した。

それでも滝壺は心配そうな顔をしている。俺の馬鹿！！

「今日はお前の気に入ったソファ―見つかるといいな！！どんな物でも買つてやるぜ！！ふははははははは！！」

「うん、ありがとう。みさか」

ふう、ようやく笑ってくれたか。俺がいる限りアイテムの連中は楽しく笑っててもらいたい。もちろん麦野も。暗部にいるからって人生を楽しんじやいけないなんて馬鹿げている。暗部にいるからこそ『楽しむ時は思い切り楽しめ』だ。

だから俺はアイテムの未来もできれば変えたい……神様になるつもりなんて全然ないけど変えてやるさ。

「じゃ、行くか。ソファ―だから家具が売ってるフロアか」

「そうだね。すごく楽しみ」

俺たちはエレベーターに乗って目的のフロアに向かう。

「すごいな……」

これはすごいぞ。所狭しといろいろな家具が売られているのだ。普段セブンスミストに来てても美琴が服とかアクセサリーばっか見て家具なんて見ないから俺も初めてなのだ。

「すごい」

滝壺も驚いている。さっそく、ソファ―があるところに向かって

行った。かなり興奮してるみたいだ。そもそも滝壺ってボーってしてるだけで感情はちゃんと表に出せるんだよな。

「おい、少し落ち着け。時間は腐るほどあるんだしさ、ゆっくり見ていこう」

「うん、ごめんね」

やばい、可愛いすぎる！！美琴も可愛いがあくまで家族として、妹としてだ。滝壺は一人の女の子として可愛いのだ。ちょっと、これはシャレにならない。

「あ、ああ謝ることなんてな、ないですよ！？こ、ここ、これなんてどうです！？」

「どうして敬語なの？」

首を傾げる滝壺。も、もうダメだ。精神が浸食されていく……母さん、美弦は初めて人を好きになったみたいです。どうすればいいのでしょうか？教えてください、ゴッドマザー。あの無駄に若く見られる母親の顔を思い浮かべる。え？グッジョブ？ふざけんな！！

「と、とりあえず、順番に見よう」

「うん」

俺達はいろいろなソファーを見て回った。マッサージソファーはもちろんのこと、夢操作ソファーというものもあった。電極を頭に貼って寝ると設定した夢を見れるとか何とか……別にソファーじゃなくてもよくね？

あと、とんでもないソファアがあつた。

名をSMソファアという、明らかに別のお店（18歳未満お断り）で売ってるようなものがあつたのだ。ロープが付いていて、それを座った人に括りつけて背もたれに付いている——おっと、これ以上は言えないな。

つか、ふざけんな！！責任者呼べ！！滝壺になんてもん見せてくれてんだよ！！顔真つ赤にしてんじゃねえか！！

まあ、そんな可愛い滝壺を見れてラッキーと思つた俺であつた。

で、ようやく滝壺のリクエストにピッタリなものが見つかった。昇天羽毛ソファアという真つ白な色をした、まさしく座つた者を昇天させてしまうようなフカフカのソファアだつた。

滝壺もかなり気に入つたようで、あまりの気持ち良さにいつも以上にボーっとしている。おい、生きてるよな？

俺は値段を見る。その瞬間、脳がフリーズした——いいか？よく聞け、一度しか言わない。1千万……1千万だ。一体どんな素材使つてんだ？俺は値札を急いで剥ぎ取る。

「みさか、これいくらなの？高かつたら違つのにするから」

「へあ？これか？かなり安い！！俺にとつてうまい棒と同じ値段だ。ふ、ふははははは！！も、問題ない！！」

「うまい棒って何？」

「子供の頃に一度は食べるお菓子。俺のおすすめは明太子味だ」

「私も食べてみたい」

「う、うゝん。難しいんじゃないかな？外に売ってるお菓子だし…」

…」

嘘は吐いてない。ある意味で外に売ってるし。

「そっか……」

おいおい！！そこまで残念がることねえだろ！？クソ、どうしてこの世界にはうまい棒がないんだああああ！！今度自分で作るか？

「これでいいか？」

「うん」

店員は俺がこれを買うというと驚いた顔して

「お客様、こちらのお値段はご確認なされましたか？こちらは「これ・く・だ・さ・い」ヒツ……かしこまりました」

うん、滝壺の嬉しそうな顔見れたのなら安いもんだ……そうだな？

「ありがとう、みさか」

「どれだけ、お礼言っただよ」

俺は苦笑しながら頭をわしわしと撫でてやる。
滝壺は無表情の顔を赤くして俯いていた。

丁度昼時になったので俺と滝壺はフードコートで食事をした。

「よかったな、お前のリクエストにピッタリのソファーが見つかった」

「うん、これでぐっすり寝れるよ」

「は？滝壺さん今なんて言いました？」

「寝るのは布団かベッドだろう？どうしてソファーなんだ？」

「私の部屋には布団もベッドもないよ？」

「じゃ、じゃあ、どこで寝てるんだ？」

「床」

俺は滝壺という女の子がわからなくなった――

「それならベッドを買えばよかったんじゃない……」

「ソファーがいいと思う」

キツパリと言う滝壺の言葉には何か信念を感じた。無表情だけど。

「そっか、お前が満足ならそれでいい」

俺は引き攣った笑みを浮かべていたに違いない。

さて、まだ俺達のデートは続く。だってまだお昼だもん！！
『楽しむ時は目一杯楽しめ』だ。

第十話 逢引……（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

何だコレ……本当に申し訳ありません。今回は次回に続く伏線？みたいなものです……見苦しい言い訳です。やっぱり恋愛要素は排除したほうが良いですかね？

やはり難しいものですね。

さて、おそらく次回あたりから暗部編の中枢へと向かって行きます。次回も読んで頂けたら幸いです！！

あ、感想お待ちしております！！アドバイス、批判等など何でも結構です！！

第十一話 不可視……（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第十一話 不可視……

俺と滝壺は無事にソファアを買ったので街中をぶらぶら歩いていた。

「なあ滝壺、他にどこか行きたいところないか？」

まだ午後2時だ。帰るのにはまだ早い、どこかで暇をつぶそうと考えた。

「うーん、ゲームセンターに行きたい」

「お前行ったことあるのか」

滝壺がゲーセンで遊んでるのとかあんまり想像できない。

「うん、むぎのたちとよく行く」

あー、なるほどね。

「じゃあ、そこに行こうか」

俺もゲーセンは久しぶりだ。最近いろいろあったからご無沙汰だった。みんな知ってるかと思うが学園都市のゲーセンはすごい一言に限る。なにしろ、外の技術より2、30年先を進んでるのだ、一度ハマると中毒みたいに抜け出せなくなったのを思い出す。

たしか、この近くだと地下街が一番近いか――

「あ？」

俺は後ろを振り向く。あれ？なんか視線を感じたんだが……気のせいかな？怖いじゃないか、ホラーじゃあるまいし。

「どうしたの？」

「……うん、何でもない」

……ま、まあ、まだ昼だし幽霊じゃないはずだ。

俺達はそのまま地下街へと向かった。

「本当に久しぶりだな。腕が鳴るぜ！！」

「みさか、これしない？」

滝壺が指したのは3Dメガネを使ってプレイするヴァーチャルリアリティ系のガンシューティングゲームだ。心拍数、脈拍を計測できるようになっていて腰^{チキン}抜け度が表示されるネタのようなゲームだ。

「おお！！わかってるじゃないか、滝壺！！この俺はかつてゲームの神童と呼ばれた男だぞ。この技とくと見るといい！！ふはははははは！！」

——15分後、俺はorzの姿勢で鬱状態に陥っていた。

ど、どうして……全く歯が立たないッ。たった2か月だぞ？ たったの2か月！！腰抜け度もハンパじゃなかった。以前の10倍って……暗部に入って、度胸もついたと思ったんだけどな。ふは、ふはははは……

「みさかつてチキンだったんだね」

やめろおおおお！！やめてくれええええええ！！そんな励ますような目で見ないでくれええええええ！！

「も、もう一回だけ……」

「いいよ」

——10分後。

「なぜだああああ！！」

「元気出して。チキンなみさかを私は応援してる」

滝壺……どうしてお前はそんなに強いんだ？いつもはボーっとしてるのに。ガン型のコントローラ持った瞬間、目の色変わるってお前……それはフレンドの領域だろ？せつかくのキャラを奪ったらフレンドが可哀相じゃないか。

「次はあれにしょ？」

そこにはプリクラがあった。え？これに入って写真撮るの？マ、マジで？二人で？

俺は女の子とこういうのを撮るのは初めてだ——ああ、そういうのは昔、美琴と撮ったことあるな。だが、あれはノーカウントだ。そうだろう？

俺は思考が停止して口をパクパクしてしまう。今の俺は魚みたいだと思う。

ハッと気づくとすでにプリクラの中に入っていた。何か滝壺がタッチパネルを弄っている。美琴と撮った時も全部任せっぱなしだったからな。

「ほら、みさか」

いきなり体を寄せてくる滝壺。柔らかいものが腕に当たってるんですけどッ……滝壺は意外と大きいということがわかった。ダメだ、邪念よ消えろ！！

「へあ！？はひー！！」

うまく喋れない。

なんとかうまく撮れたようだ。若干、俺の目が虚ろだが……しようがないじゃん！！

俺達はその後もさんざん遊びまわった。1万ぐらい使ってしまったんじゃないか？気が付けば午後5時になっていた。

俺達は公園でジュースを飲みながらベンチで休憩していた。

「今日は楽しかったか？」

「うん、楽しかった」

滝壺も無表情ながら目は楽しそうにしている。

俺はどちらかというと楽しそうにしている滝壺を見るのが楽しかった。ああ、本当にダメだな。完全にヤラれてしまった。

「いい感じのところ悪いが少し寝ててくれない？」

突然のチャラついた感じの男の声が聞こえた瞬間、俺の腹に何かが食い込む。そのまま俺は後ろに吹っ飛ばされてしまう。いったい何だ！？

「ゴフッ……」

俺の口から血があふれ出た。思わず俺はビビッてしまう。血とか吐いたの初めてだし……当たり前じゃん、数日前まで普通の高校生です！！

「みさか！！」

滝壺は慌てた様子で俺に駆け寄ってくる。

「あゝ、少し加減しすぎちゃったか」

相変わらず声だけが聞こえる。なんだ？光学操作系の能力者か？ザリっという地面が擦れる音が聞こえた瞬間、俺の横っ面に衝撃

が走る。また数メートル吹き飛ばされる。

「ッ——ハアハア、滝壺俺から離れんな」

クソどうする？位置が見えなきゃ攻撃もできねえぞ。

「デメエ、俺達に何の用だ！？」

「いや、僕はある人物からその娘を連れてくるように言われただけさ。君には用はないよ、だから君は大人しく消えてくれるだけでいい」

ホストみたいな喋り方しやがって。

「デメエ、滝壺をどうするつもりだ」

俺は見えない敵に警戒しながら滝壺を庇うように立ち上がる。

「そうだね、敢えて例えるのなら起爆剤になってもらう……かな」

「どういうことだ！！」

俺は手当たり次第に炎をぶちまける。

「どこ狙ってるのかな」

俺の真横から声が聞こえかと思うと激痛が走った。

脇腹に何か刺さっている感触がする。見ると血が溢れ出していた……感触は消えない。

おいおい、物の光学さえ変化させるとかレベル4の領域だぞ。

「——ッ。みさか、血が!!」

かなり痛い。激痛だ。でも倒れるわけにはいかない。

突然、滝壺は白い粉みたいなものを取り出した。まさか体晶か？

「待てッ!!それは使っな!!」

「で、でも」

「それ使ったらお前の体が……」

「どうして、そのこと知ってるの？」

やば、つい喋りすぎた。

「これでも倒れないか……そろそろ終わらそうか」

そんな声が聞こえた。

確かに滝壺の能力があれば相手の位置を特定できるが、俺はこいつに体晶なんて使ってほしくないのだ。

どうする？考える!!考える!!

ふと、砂場が目に入る。……えーいッ、もう賭けだ!!

俺は滝壺の手を引いて砂場に向かって走り出す。足音が後ろから迫ってくる。

砂場に着いた俺は思い切り砂を蹴り上げた。舞い上がる砂が俺達に降りかかる——もちろん相手にも。

砂が不自然に宙に浮いている。やっぱり、物の光学を変えるのは時間がかかるみたいだな。

「見iiiiつけたあああ!!」

「な!?!しまった!?!」

俺は手から炎を思い切り噴射させる。

「うああああああ!!!!」

男の絶叫が聞こえ、しばらくするとそれも止まった。
残ったのは虫の息のボロ布状態の優男。正直、顔も焦げてよくわからないけど何となく喋り方がホストっぽいから。

「焼き加減はレアだ。生きてるだけ感謝しろ」

やば、走ったから出血量が……視界が黒く染まり始める。まだこいつを拘束してないのに。

「に……げ……き壺」

俺の発したのは言葉とはほど遠いものだった。

ダメだ、意識が――

最後に聞こえたのは淹壺が必死に俺の名前を呼ぶ声だった。

第十一話 不可視……（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

さて滝壺の雲行きが怪しきなってきました。はたしてどうなるのか書いてる僕自身もまだ考えてません。それにしても美琴出てこないな……まあ、いつか。

感想お待ちしております！！アドバイス、批評等なんでも結構です！！

では、次回もよろしく願います！！

第十二話 自己犠牲……（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがよろしく願います。

今回は少し短いです。申し訳ありません。

第十二話 自己犠牲……

ピッピッピッという規則正しいリズムで目が覚めた。

「……知ってる天井だ」

どうやら俺は二度目の冥土^{ヘヴンキャンセル}歸りをしたようだ……

外を見るとすでに暗くなっている。

……何やらお腹の辺りが重い。

横を見ると滝壺が俺のお腹を枕にして寝ていた。スースーと気持ちよさそうに寝息を立てている。

ずっとそばにいてくれたのか？はあ、心配掛けちゃったな……まあ、こいつが体晶使うよりはマシというものだろう。アレは取り返しがないからなあ。

それよりも滝壺さん、気持ちは死ぬほど嬉しいですが怪我の上で寝られると痛いです（泣）

俺は痛い嬉しいのかで涙目になる。

でも、俺達を襲った男って一体……っていつかあの後あいつはどうなったんだ？動けるような火傷じゃなかったはずだけど。

あの男が言った言葉を思い出す。

『敢えて例えるのなら起爆剤になってもらう』

起爆剤って何だ？今って原作が始まる前だから知識が全然当てにならないんだよな。まあ、俺がいるって時点で原作なんか崩壊してるが……

どうせ口なことじゃないんだろう。

いづれにせよ俺が守って見せるよ。俺は滝壺の頭を撫でながら心の中で固く誓った。

でも麦野にも一応報告しておかないとな。ああ見えてもアイテムのリーダーだし。

……………眠たくなってきた。

俺は重くなってきた瞼を閉じて、再び深い眠りについた。

「まったく、心配かけてんじゃないわよ」

「そうですよ、超びっくりしました」

「ごめんね、みんな」

「でも結局、無事でよかったって訳よ」

声が聞こえる。麦野達か？わざわざ来てくれたのか…………絶対に見舞いなんかに来なさそうな連中なのに。

「うるせえぞ…………目が覚めちまったじゃねえか」

全員驚いたように俺の方に顔を向けた。怖いよ、動きがシンクロしてんじゃないか。

「みさか!!」

滝壺が飛び込んでくる。羨ましいか？残念、そんなラブラブした

感じではありません。

「く、苦しい！！し、死ぬ！！た、たた助けて！！」

俺は滝壺に胸倉を思い切り掴まれていた。おいおいっ！！まさかのヤンデレか！？麦野だけで十分だって！！同じ属性は二人もいない。特に普段大人しい滝壺だけに怖さが倍増することがわかった。

「む、むぎのん！！助けて！！」

「今度その呼び方したら殺すって言ったわよね？」

麦野は青筋を立てて笑う。

ああ、冥土^{ヘヴン}が見える――

「みさか、私本当に心配したんだよ」

ふっ、と胸倉を掴む力が無くなった。俺を見る滝壺の目は少し赤い。

「えーと、ごめん。心配かけた」

俺の自己満足のエゴの所為で滝壺を傷つけてしまった。

上条と同じパターンだな。以前は憧れてたりしてたけどダメだ、これは。こっちも辛くなってくる。

だって滝壺も助かったのに全然嬉しそうじゃないんだもん。

上条もこのことに気付けばいいんだけどな。いや、わかってはいるけどそれでも止まらないのか。

「もし、これからこんなことがあっても絶対一人で無理しないで」

「ああ、約束する。本当にごめん」

自己犠牲なんてのはカッコよくもなんでもないということがわかった俺であつた。

「ところであの男はどうなつたんだ？」

「知らない。みさかを運んだの私だから」

マジで？こいつって意外と力あるんだな。暗部にいれば自然とそうなるのか。麦野もそうだし、絹旗は……あれは論外だな。

「超いい雰囲気のところ申し訳ありませんがそろそろ回診の時間ですよ」

絹旗がムスツとした顔で言う。どうして、そんな不機嫌なんだ？……あつ、もしかしてあの時のセリフ勘違いしてんのか？あれは仲間として言つたつもりだったんだが。俺は借りを作るのが嫌いなんだ。

……すみません。男として最低ですね。でも、あの言葉は嘘なんかじゃない。

「じゃあ、とりあえず今日のところは帰るわ。滝壺も一度家に帰きなさい」

「……うん」

しぶしぶ了承する滝壺。

「あ、麦野、少し話があるんだ。なに5分ぐらいで済む」

「わかったわ」

おや、珍しいな。いつもなら面倒くさいとか言って悪態吐くの
に。麦野以外のみんなはジト目で俺を見る。特に滝壺は殺気レベルだ
……マジでヤンデレじゃないだろうな。おい、勘違いすんなよ。麦
野になんて怖くて手なんか出せないって！！体が消し飛ぶのは間違
いないだろう。俺はまだ死ぬわけにはいかないのだから。

俺と麦野だけが部屋に残された。

「おい、麦野。俺を襲った奴は滝壺を狙ってたんだ。何か企んでる
みたいだったけど」

「どういうこと？」

「誰かの指示で滝壺を攫うつもりだったらしい。起爆剤にするって
言ってたけど」

「まあ、滝壺の能力は珍しいからね。相手が何か企んでるのは確か
ね」

「そりゃ、そうだな。AIM拡散力場をコントロールするような可
能性を秘めてるんだし。」

「また、狙って来るんじゃないか？どうする麦野」

俺の答えはすでに決まってる。たとえ一人になっても守り通す。

「どうするって決まってるじゃない。私のものに手を出す奴はブチコロシ確定よ」

俺に笑顔を向ける麦野。

歪んだ独占欲まる出しの発言だが俺はその言葉を聞いて安心した。

第十二話 自己犠牲……（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

なかなか話が進まない…… 本当に申し訳ないです。

書いていて思ったのですがフレンドの影が薄すぎる！！というわけで次回はフレンドに活躍してもらうことにします！！フラグ立てたりはしないので安心を。…… まあ、今更フレンドにフラグ立てるのは厳しいというのが本音です。フレンドファンの皆様申し訳ありません。

では次回も読んでくだされば幸いです！！

感想もお待ちしておりますのでアドバイス、批評等ドンドン送ってください。お願いします（泣）

第十三話 異能……（前書き）

趣味で書いてるような小説です。
駄文ですがよろしくお願いします。

第十三話 異能……

俺が退院して二日経った。

今度は一日の入院で済んだのだ。もう驚きもしない……慣れって怖いね。

俺はアイテムの新しいアジトにいる。

「おい、麦野……これはふざけてるのか？」

「別にふざけてなんかないけど？」

「だったら何で前と全く同じ間取りなんだよ……！」

ふざけんな、マジふざけんな……！俺はソファーがぽつんと置かれてる部屋なんか期待してなかったんだよ……！指令室は……？武器庫は……！？

見れば、絹旗とフレンドもorz状態になっている。何か、ブツブツと呟いていて気味が悪い。

「……どう……で、スクリ……超あり得な……！」

「結局……麦野……って訳よ」

「麦野さんよあ……！ソファーだけでも滝壺のリクエスト通りにフカフカなんだろうなあ……！」

俺は麦野が怖いとかそんなん忘れて、つい乱暴な喋り方をしてしまっ

「あゝ忘れてたわ。まあ、前と同じやつだからいいでしょ」

「……よかったよ、1千万払って」

俺は滝壺の方を見る。やはりボーっとしている。どうやら今はA IM拡散力場浴中のようだ。

溜息を吐いて、冷蔵庫からカロリーソーダを取り出す。え？よくそんなもの飲めるなって？いやいや、飲めば絶対癖になるから！！まあ、俺が箱買いした後に生産中止になってしまい、あと20本ぐらいしか残ってないが……

ピピピピピピピピッと麦野の携帯の着信音が鳴り響く。

「はい、もしもし」

麦野は電話に出てしばらく何かを喋っていた。

「仕事が入った」

麦野がそう言った瞬間、部屋の空気が変わる……慣れないなあ。

「で、どんな仕事なんだ？」

「ある研究所の殲滅、ただそれだけよ」

「今回は超簡単ですね」

そうだと良いけどな。前みたいに死にかけるのは御免ですよ？

「何も考えずにブツ壊せばいいのか？」

「違うわよ、何も研究所自体を壊すわけじゃない。中にいる研究者共を消すのよ」

「研究所ごと吹き飛ばしたら超目立つじゃないですか」

絹旗が呆れたように俺の顔を見る。

けど俺はそんなこと気にもならなかった。麦野の言った「研究者共を消すのよ」という言葉が頭の中で響いている。消すって、つまり殺すってことだよな……俺にできるのか？人を殺すことが。暗部に入った以上覚悟はしていた。わからない——俺は恐れているのか？じゃあ、何を？わからない、わからないのだ。言葉ではどうしても説明できないのだ。この感覚だけは。

「みさか？」

目の前に滝壺の顔があった。

「あ……ああ、何でもない。ボーってしてただけだ」

俺は無理やり笑顔を取り繕う。

「じゃあ、ターゲットの地図が送られ次第出発よ。いいわね？」

「超」「了解」「」

滝壺が何やら俺の方を見てくる。なんだよ、照れるじゃないか。

「みさか、それ頂戴」

滝壺は俺が持っているカレーソーダを指さしてそう言った。

「おお！！そうかそうか、ちょっと待ってろ」

俺は冷蔵庫に向かいもう一本取り出す。

「ほれ、滝壺」

「ありがとう」

そう言って飲み始める滝壺。

「……どうだ？うまいか？」

「うん、とってもおいしい」

「ふははははは！！お前にもわかるか！！この味を理解できるのはここでは俺とお前だけのようだな」

麦野、絹旗、フレンドの三人にも勧めてみたのが気持ち悪いと一蹴されてしまったのだ。

現に今その三人は滝壺を変人を見るような目で見ている。

「滝壺、これから好きな時に冷蔵庫から取ってもいいぞ」

「みさかは優しいね」

自分でも顔が赤くなるのがわかる。

「そ、そうか？／＼／」

他の三人は呆れた目でこちらを見ていることに気づきながらもニヤニヤするのを止められない俺であった。

ありがとうな、滝壺。お前のおかげで少し楽になったよ。

二時間後――

時間というのは無常だ。こちらの都合を考えずにどんどん進んでいく。この学園都市でさえ、いまだ時間という概念を超越する能力者を生み出していないのだ。

「時間よ。私と滝壺、フレンダと御坂、そして絹旗、この三つに分かれてこの施設を襲撃する。いいわね？」

みんな、わかったと首を縦に振る。

――お前は人を殺せるのか？どうなんだ？答える、御坂美弦。
俺はまだ迷っていた。

「――っと！！ちょっと、御坂！！」

「――ッ、ごめん！！」

フレンダが眉をしかめて俺を見ていた。

「困るって訳よ。ボーっとすんな」

「あ、ああ」

フレンドの後に俺は続いて研究所に侵入する。
白い廊下を永遠と歩く。外から見るより中は広いようだ。
それよりも人がいない……というか人の気配がないのだ。俺は安心している自分に気づく。――殺さなくて済むと。

「フレンド、何かここおかしくないか？」

「……」

フレンドも変異に気付いたようだ。

「麦野に連絡したほうがいいわね」

そう言っただけ携帯を取り出そうとした時だった。フレンドの手から携帯が吹き飛んだのだ。

携帯は銀色をした矢に貫かれそのまま壁に串刺しにされていた。
それでもほとんど携帯は壁にめり込んでいく。そしてバキッという音と共に粉々に壊れてしまった。

俺とフレンドは慌てて壁の影に身を隠す。

廊下に二人の人間がいた。一人は白衣を着た40代くらいの眼鏡を掛けた男。もう一人は10歳くらいの少女だ。白い手術着のようなものを着ている。俺はその少女の目を見て背筋に悪寒が走った。
人間の目じゃない。いや、正確に言うとなんか人間の目を模しているが別の何かだ……何もない、そう何もないのだ。空っぽ、空虚、生きていない――人形だ。少女は人形なのだ。

「さて、君たちかな？ここを潰しに来たのは」

ねちっこい喋り方をする奴だな。マッドサイエンティストのオーラがプンプンする。

「誰だよ、おっさん」

「私かい？私は加賀というんだ。ここの責任者だよ」

「その子は何だ？まるで人形みたいだな。どんな風に育てたんだ、この下衆野郎」

研究所にいる子供たちは大抵置き去りだ。チャイルドエラーほとんどの研究所は彼らを実験動物のように扱う。原作を読んでも胸糞悪くなったのを今でも覚えている。

「まるで、じゃなくて実際にそうなんだよ。コレは私の最高傑作でね！！もはや自分というものすらない、このリモコン一つで能力を使う私の従順な人形だよ！！」

加賀という男は何やら複雑なりモコンのようなものを見せつけて自慢するように笑う。

「デメエエエエエエエエエエ！！！！！！」

俺はこれまでにないほど怒り狂う。俺は許せない、少女から自分というものを奪ったこの男を。自分というものがどれだけ大切か俺にはわかるから。

俺は飛び出して手から炎を吐き出す。それは真っ直ぐ加賀に向かう。

リモコンを操作する暇さえ与えない。殺す、俺は初めて殺意というものがわかった。1このドロドロとした感情。けどそれでもなぜか吹っ切れて清々しくなる。

わかったはずだった——炎は加賀を貫く寸前で消えたのだ。

なんで……なんでだよ!?

突然に演算ができなくなったのだ。こんなことは今までなかった。

「驚かせてくれたねッ!！」

加賀がそう言うとともに少女が銀色の矢を構え、ものすごい速さでそれを放つ。

俺は自分の能力が使えなくなったことに啞然とし反応が遅れた。

「御坂ッ!！」

フレンドが飛び出してきて俺を押し倒す。俺の頬を矢が掠り激痛が走る。

フレンドはそのまま起き上がり手榴弾を相手に投げつけた。

バゴンッという音と白い煙が舞い上がる。

その隙に俺とフレンドは再び影に隠れた。

「あぶないな。コレがいなかったら死んでたよ」

煙の中から現れたのは汚れ一つない加賀の姿だった。

しかし、少女の方は破片が体中に突き刺さり血で真っ赤に染まっていた。足が特に酷い。爆発をもろに受けたためか深く抉れており、まともに歩くことすらできないようだった。

そして、そのまま倒れ伏す。

——盾にしたのか!?

「おい！！起きろ！！お前は私の最高傑作だろう！！おい！！」

加賀は何度も少女の背中を蹴り付ける。

やめろ……やめろよ……

「やめろおおおおお！！！！」

頭が痛い、凄く痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い——

「なな、何だこれは！！」

「これってあの時の——」

加賀とフレンドは驚きの声を上げる。

またあの紅い炎が広がっている。血のように真っ赤な炎が——

加賀はひどく怯えた様子で逃げようと後ずさっていた。

逃がすものか——

燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える燃える——

「燃w f g g g おおお f h s おお！！！！」

その瞬間、加賀の体から紅炎が噴き出した。

「ギヤあああああああああ！！！！あづい！！あづい
いいいい！！あ……あがああああ……」

聞いてる者の背筋凍らせるような断末魔。
あまりの光景にフレンドも目を背けている。

俺はひどく冷めた目でその様子を眺めていた。

第十三話 異能……（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

ありきたりな展開になってしまった……初めて主人公が人を殺します。

ちなみに少女の能力は絶対速度^{イコールスピード}です。

一見進んでないように見えますが、進んでいます……申し訳ありません、そういうことにして頂きたいです。

あとフレンダを全然活躍させることができませんでした。すみません、うまく書けなかった（泣）

感想お待ちしています！！アドバイス批評等なんでも結構です。どうかお願いします！！

次回も読んでくだされば幸いです！！

第十四話 救済……（前書き）

趣味で書いているような小説です。
駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第十四話 救済……

痛い痛い痛い痛い——また、あの時の頭が内側から弾け飛ぶような激痛が走っている。

「ギャああああ——ザザッ——あああ！——あづい！——ザザッ——あづい——だづけてくれえええ！——あづい——いいい」

未だに死ぬことができずに燃え続ける加賀。紅炎は男の絶叫を愉しむかのようにその体を蹂躪するかにように焦がしていく。

それはまるでお前は苦しみながら死ねと物語っているかのようにだった。

「あ……あが——ザザッ——ああ………」

ようやく絶叫が聞こえなくなった。どうやら死んだようだ。もはや加賀の死体は直視できるようなものではないのだろうが、それでも俺は目を離すことができない。

正確に言つと体が言うことを聞かないのだ。視界は霞んでほとんど見えないし、耳に聞こえるのはザザザザというノイズが混じっている。頭痛は激しく意識を保っていること自体が奇跡だった。

ガタンツという音が聞こえる。何かが現れる。かなりの数だ。

「——ッ、まだ——ザザッ——って訳よ」

そんな焦ったようなフレンドの声が聞こえる。

突然、俺の体が意思に反し動き出す。どうなってる！？
俺の口が勝手に動き何かを話す。

「——y j k q 破 w g」

その瞬間、視界が紅色に染まった。
発火能力者の俺でも感じる凄まじい熱風。フレンダの悲鳴が聞こえる。

——紅炎の中で黒くなった何かが燃えていた。

突然クリアになる視界、ノイズも止む。頭痛も嘘のように引いていくのがわかる。

見えるようになるようになった俺の視界に映ったのは黒一色だった。
先ほどの真つ白な廊下の見る影もない。それは同じ場所と言われも信じることができないほどのものだった。

黒い床に同化して何かが転がっているのわかる。黒い炭状になったもの、それがいくつも転がっている。

それは人の形をしていた。それは小さかった。それは子供だった。

「う——うぐツ、げえええげふツ」

それを理解した瞬間、俺の胃の中の物が逆流する。
なんだこれ、俺がやったのか？俺が殺したのか？この子たちをこんな風にしたのは俺か？俺が俺が俺が俺が俺が——

「御……坂……」

フレンドの小さな声が聞こえた。

「フレンドッ！！」

フレンドは後ろの方に吹き飛ばされていた。酷い有様だった。服は焦げて、火傷だらけ。打ち身もひどい。

「おい！！しっかりしろ！！おいッフレンド！！」

俺は急いで駆け寄り、必死に呼びかける。

俺が傷つけた——大切な仲間さえも、この俺がッ！！

「頼む！！おい！！返事してくれ！！」

俺の叫びはもはや懇願のものとなっていた。死なないでくれよ、死なないでくれ。頼むから、何でもするからッ！！死なないでくれ！！

俺の所為で仲間が死ぬという恐怖という化け物が心を食い尽くしていく。

「あ、ああ、頼む……誰か来てくれ……誰か」

誰か……麦野でも滝壺でも絹旗でも誰でもいい、頼む……来てくれ。俺の所為だ、俺の俺の俺の俺の——

「みさか！！」

「ちょっと、あんたらどうしたのよ!!」

ああ——よかった、来てくれた……

俺はそこで意識を失った。

あれから二日後——

俺は病院のベッドの上にいる。あれから数時間後に俺は目を覚ましたのだ。

あの後気を失った俺はフレンドと共に病院に搬送された。看護師の話によればフレンドは命に別状はなかったらしい。それでも一週間の入院生活を余儀なくされているということだ。

らしい、と言うのは俺はあれから誰とも会ってない。アイテムの誰とも会っていない、冥土返しに頼んで面会を拒否してもらってる。

怖いのだ……仲間を傷つけた俺は一体どんな目で見られるのだろう。研究所にいた子供達を皆殺しにした俺は一体どんな目で見られるのだろう。

俺は怯えて寝ることもままならなかった。

夢を見るのだ。アイテムの全員が俺のことを蔑み、罵倒してくる夢を、焼き殺した子供達の聞こえることのなかった絶叫が炎の中から聞こえてくる夢を。

暗部には強制的に入れられた。彼女たちは俺を何かしらを利用するつもりだったのかもしれない、俺も彼女たちを利用するつもりだ

った。

けど俺は思ってしまった、アイテムの奴らを大切な仲間だと。滝壺は俺にとって守りたい大切な人になってしまった。

俺は夢での出来事が現実になることがどうしようもなく怖かった。

誰かがコンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「誰だ？」

「……みさか、私だよ」

——滝壺だ

「面会は断るって言ってなかったか？」

俺は突き放すように言う。頼むから帰ってくれ。

「……すこしだけでも……」

滝壺はこの二日間、何度も俺のところに来ようとした。俺はその度に追い返していたのだが——今日はしつこいな……

「じゃあ、5分だけだ」

「ありがとう」

滝壺はそう言ってドアを開く。相変わらずのピンクのジャージ、顔は無表情で何を考えているのかわからない。俺は責められると内心とても怯えていた。

滝壺は椅子を引いて俺の隣に座る。

「大丈夫？みさか、とても酷い顔してる」

「……別に何ともない」

「……」

「……」

「……どうしてみさかは私たちと会おうとしないの？」

いきなり直球を投げ込んでくる滝壺。

「会いたくないからだ」

我ながら幼稚な答えだと思う。

「答えになってないよ」

「……滝壺、お前は俺のこと責めないのか？俺の所為でフレンドは怪我したんだぞ」

「どうしてみさかを責めるの？みんな、みさかのこと怒ったりしてないよ？」

「——ッ、どうしてだよ！！お前等おかしいだろ！！俺がフレンドを——それだけじゃない！！俺は研究所にいた何の罪もない子供達を殺したんだッ！！誰かもわからなくなるくらいに燃やしたんだよ

「！！この俺がッ、俺がッ、俺がッ、なのはどうして——！？」

俺はまるで血を吐くかのように絶叫した。

しかし、突然視界が何かに覆われる。何も見えない。

「だってみさかはとても優しいってこと、みんな知ってるよ？」

俺は滝壺に優しく抱きしめられていた。とても暖かく、いい匂いがする。

その暖かさが俺の心を食い荒らしていた恐怖を溶かしていく。

「おかしいって、お前等……う、うう、う」

俺はそれから一時間も滝壺の胸で泣いた。

やべ、凄く恥ずかしい。

女の子の胸に抱かれて泣くとか……普通、逆じゃね？

「落ち着いた？」

「あ、ああ。みっともないところ見せちゃった。ごめん」

俺は恥ずかしさのあまり死にそうだが。

「そんなことないよ、みさかがまた話してくれるようになってよかった」

ああ、ダメだな俺。また滝壺に心配かけてしまった。

滝壺は俺のことをどう思ってるかわからないが、俺はこいつのことが好きだ。大切な人だ。笑っていてほしい。幸せでいてほしい。でも、俺がこんなじゃダメだな。

「本当にありがとう」

「ううん、私がそうしたかっただけだから」

滝壺が首を横に振りながらそう言った。けど俺は確かに滝壺に救われたのだ。

第十四話 救済……（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

厨二病丸出しです。しかし後悔はしていない！！男はいつでも厨二病のはず！！……申し訳ありません、調子に乗りました。

あと3話ぐらいで第二章を終える予定です。寄り道ばかりしていたので長くなってしまいました。

感想お待ちしております！！一言でも構いません。アドバイス、批評等何でも結構です！！

次回も読んで頂ければ幸いです。

第十五話 能力向上……（前書き）

趣味で書いたような小説です。
どうぞよろしくお願いします。

第十五話 能力向上……

「本当にすまない、フレンド。謝罪が随分と遅くなったけど、どうか許してくれ」

俺はフレンドの横で土下座をしていた。

「結局、御坂はキモイって訳よ。なに土下座してんの？」

「だって俺の所為で大怪我させて……」

俺は頭を下げままだったがガツンと衝撃が走った。リンゴが投げつけられたのだ。

「痛い！！何すんだよ！！」

「結局、アンタは私のこと馬鹿にしてるって訳よ！！このくらいの怪我で私がどうなるか思ってるの！？ウジウジすんな、ボケ！！」

「なあ！？なななな何だよ！！俺がどれだけ悩んだかわかってんのか！！」

……ごめんな、フレンド。お前、俺が遠慮しないようにしてくれただよな。ありがとな。

「落ち着いて、みさか、ふれんだ」

「御坂の彼女は黙っとけって訳よ！！死ね、リア充！！」

な、なんつーこと言いやがる！！恥ずかしいじゃん／／

「ち、違うよ。みさかはそんなんじゃない……」

——俺の心が凍った。

そっぴい、滝壺が俺のことをどう思ってるかなんてわからないんだよ……まさしく一方通行の恋（泣）

クソツタレがアアアアア！！……どう？中の人に似てた？

「フレンダ、調子は超どうですか？」

絹旗が映画のパンフレットを片手に持って入ってきた。あれ？麦野は一緒じゃないのか。

「おお、絹旗か。麦野はどうしたんだ？」

「麦野は何か調べるものがあるとかで超忙しいから来れないそうです。それよりも御坂は引きこもりが超治ったんですか？ププッ」

こいつはどうやら俺のことを相当馬鹿にしてるようだ……一回絞めとくか。

「お前にも心配掛けたな……ごめんな」

俺は絹旗を抱きしめる。

「ちょ、ちょっと超何してんですか！！؟؟」

絹旗が顔を真っ赤にする。すべては計画通りさ……。

「それでも思ったかあああああ！！！！！！」

俺はそのまま絹旗を持ち上げる。そしてそのまま――

「くらええええええ！ジャーマンスープレックスウゥウ！！！」

ガチイイイイン！！絹旗の頭が床にぶつかる——わけがない。

絹旗には窒素装甲の自動防御があるのだ。

しかし！！

「ふはははははは！―やけに可愛らしいロリパンツを履いてるじゃないか！―最愛ちゃ――ぐはあああ！？」

俺の体は凄まじい衝撃によりそのまま窓ガラスを突き破った。

おい！！こ、これはシャレにならないだろ……

フレンドの病室は5階だ。このまま落下したら、間違いなくスクラップになる。

「くそおおおおお！」

俺は自分の手の平を地面に向けた。奇跡的に道路には誰もいない。

——
噴射！！

手の平から炎が爆発的に生まれる。俺の手がバーナーみたいにな
ってるよ（笑）

「止まれえええええ！！」

要は人間ロケットだ。下向きの運動エネルギーを上向きの運動エネルギーで打ち消そうと考えた行き当たりばつたりの演算。一歩間違えれば腕が吹き飛ぶ。つーか、体ごと吹き飛ぶ。

「うあああああああ!!」

ドサツ!!と俺は尻餅をつく……し、死ぬ死ぬ死ぬ、死ぬかと思
った。

腰が抜けちまったよ……ふは、ふはははは。

「絹旗ああああ!! テメエ、殺す気か!!」

俺はふらふらの状態でフレンダの病室に戻った。

「超殺す気でした。男として超最低です」

「う……」

俺は助けを求めるように滝壺の方を見る。

「男として最低なみさかを私は応援できない」

ジト目でバツサリと切り捨てられた。つい俺は涙目になってしま
う。

「結局、御坂はそういう男って訳よ」

酷い、酷すぎる……え?俺が悪いつて?うるせえ!!

「ところで御坂、今の超どうやったんですか？」

突然、絹旗が怪訝そうに聞いてくる。

「え？炎をバーナーみたいに噴射させて衝撃殺したんだけど」

「それ超本気で言ってます？演算を一步間違えれば死んでますよ」

「それはそうだけど……うまくいったんだ。別にいいだろ？」

俺がそう言つと三人は顔を見合せた。
な、何だよ。

「みさか、レベル3じゃそんなことできないんだよ？」

滝壺がそんなことを言い出す。

「そうですよ。そんな超複雑な演算ができるのはレベル4ぐらいです」

「は？……はああああ！？」

え、マジで！？うそ！え、俺がレベル4？

「俺がレベル4……いやあたああああ！！」

俺はまるで子供みたいに喜んだ。

能力者はレベル3までなら努力次第でなれるのだ。レベル4、レベル5ともなるとそれは才能の領域になってしまう。美琴は努力でレベル5になったと言われていたが、それは間違いだ。

あいつはそれがわかってないんだよね。努力すればなんとかするって考えは結果が出た奴の戯言だ。その言葉は死ぬほど努力して結果が出なかった奴を深く傷つける。

忘れてくれ。ちよつとした妹への嫉妬だ。たまにこんなことを思っってしまう自分が嫌になる……

「結局、はしゃぎ過ぎて訳よ」

フレンダが呆れたように俺を見た。

別にいいだろ。だって嬉しいんだもん！！

俺は冥土返しの許可が出たので、滝壺と能力測定システムスキャンに向かった。絹旗は見たい映画があるとか……この愚か者め、この歴史的瞬間に立ち会わないとは！！え？大げさだって？俺にとっては歴史的瞬間なんだよ！！

「この時期に能力測定ですか？大して変わらないと思いますよ」

研究者は明らかに面倒だという顔をしている。黙れ、その眼鏡叩き割るぞ。

そついうわけで俺は季節外れの能力測定を開始した。

結果——最高温度 3545

最高放射速度 時速153キロ

・
・
・

面倒臭いから省略。結果は見事レベル4だった。
眼鏡の研究者も驚いていた。

「おめでとう、みさか」

滝壺はまるで自分のことのように喜んでくれた。

「あ、ありがとう。実際にレベル4って言われても実感湧かないな」

「みんなにも知らせないと」

「そうだな」

俺は麦野に電話をかける――

「む、麦野！？お、俺だ、御坂だ。俺レベル4になっちゃたよ！！」

「ふゝん、あんたがね。良かったんじゃない？今忙しいからまたね――ブチッ、ツーツー」

俺は気を取り直し絹旗に――

「今超いいところですから超邪魔しないでください――ブチッ、ツーツー」

俺は涙目になりながらフレ――

「結局、ここって病院な訳よ。かけてくんな――ブチッ、ツーツー」

……orz

「大丈夫、そんな可哀相なみさかを私は応援してる」

俺は滝壺に頭を撫でられながら病院へと向かった。

二日後、俺とフレンドは退院した。

俺は一度家に帰りアイテムのアジトに向かうことになっていた。
退院早々仕事かよ……鬱だ。

俺はガチャリとアジトの扉を開ける。

「……おめでとう!!」「……」

「はい?」

俺は呆然としてしまう。目の前に広がっていたのは装飾された部屋に豪華な食事。かなり美味そうだ。

「レベル4になったんでしょ?遅くなっただけとお祝いよ」

麦野が笑いながら言う。

アイテムってそんな組織だったか?

「なに超呆けた顔してるんですか。さっさと座ったらどうですか」

「結局、サバの缶詰はないけど我慢して」

「みさか、こつち」

「あ、ああ」

俺はソファ―に座る。何だこれ、マジで嬉しいんだけど……

「みさか？」

俺は嬉し泣きをしてしまっていた。

「超」「キモイ」「」

「うるせえ！！……まあ、なんだ、その……ありがとう」

そうして、俺たちは束の間の安息を楽しんだ。

俺の祝いは無事終わり俺と滝壺は帰路についていた。

「みさか、今日は楽しかった？」

「ああ、すごく。こんなに楽しかったのは久しぶりだ」

「よかった。本当はみさかあの時ずっと元気なかったからみんな心配してたんだよ？」

「ごめん。それに関しては謝ることしかできない」

「そんなことよりもね、私はみさかに笑ってほしい」

「……」

こいつ、俺と同じこと考えてんじゃない。

「俺だってお前に笑ってほしいよ。幸せでいてほしい」

「みさか……」

おい、なんかいい雰囲気じゃね？やべ、どうすればいい！？誰か
教え――

「――ッ。あぶねえ！！」

「え？」

俺は瞬時に滝壺を引き寄せる。今まで滝壺がいた所を拳が通過
ぎる。

「デメエ、あの時のスケルトン野郎じゃねえか」

「久しぶりだね。相変わらず、お熱いね。遅くなっただけど僕のこと
はウェルズとでも呼んで欲しいな」

優男が俺に笑いかける。数日であの火傷をどうやって直したんだ。
それよりも何で能力を使わない？

「また滝壺を狙ってきたのか？」

「そうだね……それと君を殺しにかな。前の借りも返したいしね。さすがにあれは痛かったなッ！！」

ウエルズの姿が消える。

「——がはッ」

「みさか！！」

腹に衝撃を感じた瞬間、俺の体は宙を浮いていた。そのさらに肉薄するウエルズは二度目の打撃を俺に食らわせた。

どうなってる！？人間の動きじゃねえぞ。

俺はそのまま壁に激突し、無様にズルズルと滑り落ちる。
くそ！！意識を保て。ここで気を失ったら滝壺が！！滝壺には笑
っていてほしいんだろ！？幸せになってほしいんだろ！？

「終わりだ」

ウエルズは冷たい目をして俺を見下ろしている。

その瞬間、頭に衝撃が襲い、俺の意識は刈り取られた。

第十五話 能力向上……（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

投稿した時間が時間だけに眠い。死にそうです。一つのことやり始めると止まらなくなる私っていったい……申し訳ない。寝ます！！では次回も読んでくだされば幸いです。

感想………お願いします………（眠）

第十六話 疑似天使……（前書き）

本当の駄文になってしまったorz
よろしければ読んでください。お願いします。

第十六話 疑似天使……

お前はなぜ止まっている？

お前は後悔するつもりか？

このまま何もせず、死人のように眠り続けるのか？

護りたいものがあるのだろうか？

それを護り通すと決めたんだろう？

——ああ、そうだ……そうだったな。

だったら進め。進み続けろ。

たとえその先が何も見えない暗闇であっても。

立ち上がって進み続けろ。

——わかってる。護り通してみせるよ、俺の大切な人を。

「——ッ、じっは……」

「やっと目が覚めましたか」

絹旗が俺のことを覗き込んでいた。

俺はアイテムのアジトのソファで寝かされていた。部屋は薄暗く外の明かりに頼っている状態だ。

俺、確か滝壺と家に帰る途中で――

「おいッ！！今何時だ！！滝壺が……滝壺が……」

「超わかってます。話は麦野から聞いてます。だから少し落ち着いてください。今、麦野とフレンドが全

力で行方を追ってますから」

「一体滝壺で何するつもりなんだよ……」

「それは……」

絹旗は突然口を閉ざす。

「おい、何か知ってんのか？」

「……………滝壺の能力は知ってますね？能力追跡——この能力はAIM拡散力場に干渉することができます。」

つまり相手の能力を奪うことも、強化することも」

「だから何だって言うんだよ！！」

「もしかしたら――」

そこで絹旗の携帯の電話が鳴る。

「もしもし――」

麦野からのようだ。

電話で話してる絹旗の顔が険しくなる。

「超わかりました。今からそっちに超急いで向かいます」

「何て言ってた!？」

「……話は後です!! 移動中に話しますから!!」

俺と絹旗はアジトから出てすぐに迎えに来た車に乗り込んだ。

「おい!! 滝壺はどこにいるんだ」

「……第十八学区の素粒子工学研究所だそうです」

「なんだってそんな場所に――起爆剤になる?」

俺はウェルズとかいう男が言った言葉を思い出す。

もしかして、粒子操作系の能力者に何かさせる気か?

「相手は滝壺が体晶使わないと能力が発動できないこと知ってると思うか?」

「わかりません。ただ知っていたのなら滝壺は超危険な状態です」

頼む無事でいてくれ、滝壺！！

俺は祈るような思いで研究所に向かった。

「じつちよ」

研究所の近くに着くと麦野が建物の陰から手招きをしている。

「本当にここなんだな？」

「ボコボコにやられて滝壺連れてかれたくせに偉そうね」

「……そうだな。ごめん」

「何よ。あんたらしくないわね」

「ただ、やられるのはここまでだ。今度は徹底的に潰す」

俺の手の先から火花が散る。

「いいわ。じゃ、私は正面から行こうかな——相手が何か企んでるならかく乱したほうがいいしね」

「じゃあ、俺は裏から回る。滝壺を見つけ次第、連絡するってことで」

俺達四人は別々の所から侵入を開始する。

「やっぱり見張りぐらいはいるよな……けど」

目の前には三人ほどの見張りが立ち銃を構えていた。明らかに裏の人間だ。

「俺はもう護りたいもののためなら人殺しだってする覚悟してんだよ……！」

俺の手から炎が放射される。それは三人の見張りの所まで進んで大きく拡散した。

悲鳴すら聞こえなかった。一瞬で体が炭化するため痛みもないのだろう。

「……行くか」

研究所に入ると俺は送られたきた地図を見たが実験室が多すぎるのだ。

「片っ端から探してる時間なんてないのに……クソ……！」

落ち着け、まずは広い場所から潰してい

俺は長い廊下を進み続ける。途中で何度も見張りの人間とぶつかったがすべて焼き払った。

「おい、滝壺はどこにいる？答えろ……」

「し、知らない……！本当だ……！」

何で知らないんだよ！！おかしいだろ、おい。

俺はそのまま男を焼き払って上の階に進むためにエレベータに乗る。

次の実験室が研究所で一番広いな。

ガタンと扉が開くとそこに男がいた。

「やあ、生きてたんだね。殺したと思ってたんだけど」

「他の男に好きな女を連れ去られて死んでなんかいられるか」

「クククツ、そうだね」

男は——ウェルズは本当に面白そうに笑う。

「なあ、滝壺はどこにいったよ」

「うん？この向こうさ。でも、諦めた方がいいんじゃないかな」

「馬鹿が。諦めたらそこで試合終了だよ……ある有名な先生のお言葉だ。覚えとけ！！」

——噴射！！

俺は手からゴオウと炎を後ろに噴射させ、ウェルズに肉薄し蹴りを叩き込んだ。

が——俺の足首は後数センチの所でウェルズによって掴まれていた。

「甘いね。こんな素人の蹴りなんか通用しない」

「——ッ!？」

足首に激痛が走り俺はとっさにウェルズに向かって炎を放射させた。

まともに炎を食らったウェルズは体に大きな風穴が空いて床に崩れ落ちる。

「あっけねえな、おい」

俺は死体を跨いで先に進もうとした瞬間――

「痛いな。これは痛かった」

死んだはずの人間の声が聞こえたと思った時には頭を踏みつけられ俺は床とキスをしていた。

「お前どうして!? 光学操作の能力者じゃなかったのか?」

「あれは手伝ってもらっただけさ。僕の本当の能力は肉体活性^{オートオフエンス}」

「何だそれ。聞いたこともない」

「自動的に肉体を活性化、再生することも強化することもできる…
…つまりらない能力だよ」

じゃあ、誰が光学操作の能力を?

「というわけで君には今度こそ死んでもらおう」

踏みつけられた頭がミシリと嫌な音を立てる。

「ぐあああああ!!」

進め、進み続ける。

後悔したくなければ。

「クソがあああああああ!!!!」

俺は能力を全開放する。

自分だけの現実、パーソナルリアリティを……思い浮かべる!!

次の瞬間ブワと風を切る音が聞こえた。

自分の背中を見ると炎の翼が出現していた。これが俺の自分^{パーソナル}だけの現実^{リアリティ}なのか？

炎の翼から凄まじい熱風が生まれ周りの物質を溶かし始める。まるで俺の周りだけが違う世界になっている……

「あはははは!!土壇場で能力を開放したのか!!でもいくら僕を燃やしたところで再生するんだよ!!」

ウェルズは俺の翼の出現と共に吹き飛ばされらしい。立ち上がりながらそんなことを言った。

「もし、細胞の一欠けらも残さなかったらどうなるんだろうなあ？」

俺はさぞ凶悪な笑みを浮かべているだろう。

「な!？」

「そういうわけで死ね」

俺の翼は１メートルから１０メートルほどの大きさになりそのま
まウエルズを包み込んだ。

3 5 4 5 の炎はDNAすら破壊する。

残ったのはただの灰だけだった。あまりにも生きている時とかけ
離れ過ぎて何も感じない。

俺は灰を踏みながら滝壺がいるであろう実験室に向かった。

第十六話 疑似天使……（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

あと一話ぐらいで第二章完結です……多分。

それにしても自分でもどこに行きたいのかわからなくなってきました。

やはり素人だとなってしまうのでしょうか（泣）

いつそのこと主人公殺して終わりにするか……

では次回も読んで頂ければ幸いです！！

第十七話 天使降臨……（前書き）

これからどうしましょうか……ノリと勢いで書いてしまいました。
という訳でどうぞ……！

第十七話 天使降臨……

滝壺……絶対助けてやるから。

俺は進む、たとえその先が暗闇だったとしても。

後悔だけはしたくないから――

俺は扉を勢いよく蹴り飛ばす。広い研究室の中心に1人の男が立っていた。30代半ばぐらいで髪が銀色に染まっている。色のついた眼鏡を掛けており、かなり厳つい。

「すみませーん。お姫様を迎えに上がりましたー……さっさと渡しやがれ、ゲス野郎が」

「や、久しぶりだね。しかしその感じだとウェルズは死んじやったのか？ 残念」

こいつ、あの時の原子崩しマルチタウナーの兵器を操ってた奴か？

滝壺の姿が見当たらない……どこだ？

「デメエも灰になりたいか？ ま、いずれにせよ、消し炭にしてやるから安心しな。こつから先は地獄への一方通行だからよおおお！！」

俺は再び炎の翼を出現させる。熱風の嵐が吹き荒れ周りの世界を溶かし始める。

「すごいね。自分パーソナルリアリティだけの現実を最適化させたのか……」

「消えろ」

俺は炎の翼を一気に男に向かって振り下ろした。

「!?!」

間違いなく俺の翼は男を一瞬で灰にするはずだった。なのに、どうして――

「どうして俺の能力が効かないんだ!!」

「な、簡単にことだよ。今の僕にはレベル5がいるんだから」

そう言った直後、俺の体から真つ赤な液体が噴出した。

「は?」

感覚が思考に追いつかない。激痛が後になって追いつく。

「ぐあああああ!! あ……あ、ああ、あぐ」

息がうまくできない。

翼が揺らぐのがわかる。

落ち着け……今無防備になるのは不味い。

「さあ、楽しむのはこれからだ。この力さえあれば学園都市を掌握できる、手始めにお前から潰してやるよあ!!」

俺の前に五人の子供達が現れる。

――白い手術着。

――人形のような空っぽの目。

まさか……まさか!!

「加賀から預かっておいて正解だった。残りはお前に皆殺しにされてたからなあ!!」

「!？お……前。加賀……知ってたの、か？」

「あ？あの男はああ見えて中々優秀だったんだ。まったく、余計なことしてくれたなあ!!」

「お前、は、一体……ゴフッ」

口から血の塊が吐き出た。そろそろヤバイな。

「俺の名前か……木原 宋馬って言えばわかるか？」

「なんだ、木原、一族の……人間か。やっぱり、ロクな家……系じゃないな」

俺は馬鹿にするように嘲笑った。

「殺す」

子供達が能力を使い始めた。

何やら不可視の力がこの空間を支配し始める。この重圧に押し潰されそうになる。いや、違う、本当に体が動かない!？

「くッ!!」

俺は何とか翼を拡張させて相手の攻撃を防ごうとする。

「あ……がああああ……！！！！」

俺は得体の知れない何かの力をもろに食らい弾き飛ばされた。

「ぐあ……」

「おいおい！！案外しぶといじゃねえか！！ぎやはははは……！！」

痛い、動かない。体が動かない。

「た……き壺、はど、こた……」

「ああ？あの嬢ちゃんか！？あのガキならさっきからいるじゃねえか……！！」

そう言つて上を指さす木原 宋馬。

俺は上を見る。

見なければよかった――

見たくなかつた――

滝壺は天井に設置されたカプセルの中にいた。

確かに滝壺は生きていた。生きているだけだった。

その顔には何の感情もない。

嫉妬したような怒った顔も――

心配したような困った顔も――

楽しそうに笑った顔も――

励ましてくれるような優しい顔も――

――すでに壊れてしまっていた。

「本当に役に立つてもらったぜ。こいつ等の能力をレベル5まで底

上げてもらったんだからなあ！！まあ、体晶を限界まで投与したせいで廃人になっちまったがなあ！！ぎやはははは！！」

廃……人？なんだ、俺は守れなかったのか……

滝壺の笑顔を、幸せを――

守れな……かつ……たあ？

「……あ”あ”あ”あ”……あ”あ”」

「とうとう翼も消えちまったなあ、おい！！」

――！？」

ああ、うるさい雑音が聞こえる。

滝壺をこんなにした――

こんな世界なんか、こんな現実なんか、こんな俺なんか――キエ
テシマエ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」
――！！」

この瞬間、俺は人間であることを止めた。

転生者の少年は生まれて初めてこの世界を否定した。こんな世界など壊れてしまえと願った。だが少年は気付かない、自分のいる世

「——！？おい、お前……そ、それは何、だ」

驚愕に大きく見開く瞳に映るもの、それは蒼。真紅の炎の中でそれは一際に象徴された。

一对の翼の如く空よりも蒼い光が少年の背中から噴射するかの如く流れている。それは明らかに以前の炎の翼とは別物だった。

その光は炎などと言うこの世界の現象を超越したものだ。

今の少年の姿はまるで——堕ちた天使のようだった。

蒼い翼に当たった見えない粒子の壁は真紅の炎に燃え上がる。

つまり、今までの少年の真紅の炎は全てこの蒼い翼による副産物だったのだ。

少年の目が木原 宋馬達を捉える。その目はこの世界の全てを否定しているようだったが——それでも……それでもその目から一筋の涙が流れていた。

「ヒッ——」

木原 宋馬は生まれて初めて喉が干上がるという感覚を経験した。

「——w z f t 愛 s q」

ノイズの走った声が少年から紡がれる。

「——俺 n s f 愛 w m ている」

それは人間の言葉と混じり始める。

「——俺は淹壺を愛している」

その声はまるで自分が人間であったことを証明しているようだった。

その瞬間、蒼い翼が一気に数百メートルになり、研究所を内側から覆い隠した。

音が聞こえなくなる。蒼い光が十八学区を照らす。

研究所は消し飛んだ。文字通り崩壊などではなく消し飛んだのだ。残ったものはないかのように思われた。

しかし、そんな中で四人の少女達が倒れていた。何の怪我もなく――むしろこの戦いで負った怪我が全て治っている状態で。

ただし少年の姿はどこにもなかった。

この世界に最初からいなかったかのように消えていた。

第十七話 天使降臨……（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

あと一話、あと一話だけください！！

次で第二章終わりです。これは本当ですので安心を！！

次の章はどうしましょうか……原作通りに進めるか、それともオリジナルで行くか。

アンケートでもとりましょうかね……気が向いたら結構ですのでお送りください。

では次回、第二章終幕！！

読んで頂ければ幸いです！！

あ！あと新しい小説も書き始めたのでそちらの方も読んで頂ければ嬉しいです！！

第十八話 転換……（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第十八話 転換……

ある少女は病院で目を覚ます。

カエル顔の医者が何か言っていたが全く耳に入らない。

彼女が想っていた少年はもういない。

どこかに消えてしまったと仲間達から聞いた。

「どうして……」

少女は廃人になっているはずだった。だが彼女は今、身体上何の問題もないと診断された。脳には確かに深刻なダメージの跡があったのだがそれは完治していたのだ。

それでも少女にとってそんなことは問題ではなかった。

「どうして……みさか」

彼女は研究所で意識を取り戻した時のことを思い出す——
体晶を無理やり投与され、意識を失い、体が崩壊し始めたはずだった——そこに紅い炎が体に燃え移ったのだ。

その瞬間、彼女の意識が覚醒した。そして炎が燃え移った自身の体を見た。

炎が燃え移ったのなら普通は熱いはずだ。けれどもそれは暖かいと感じた。優しいと感じた。

それは間違いなく彼の暖かさ、優しさだった。間違えるはずがない、彼女は何度も彼のそれに救われたのだ。

暗部に、どうしようもなく闇に染まっている彼女の心に暖かさを感じさせてくれた。

嬉しかった。

とても嬉しかった。

「俺は滝壺を愛している」

彼は彼女を見てそう言った。

涙を流し、微笑みながら。彼はまるで彼女に別れを告げるかのよう
うに――

「み、さ……みさ、か!」

行かないで!!なぜか彼女はそう思った。もう彼に会えないような気がしたのだ。

その瞬間、視界が蒼い光に覆われ――何も見えなくなった。

どうして、どうして、どうして、どうして――

「どうしてなの、みさか」

約束したのに――

少女の声は震えていた。

シンとした病室で嗚咽が永遠と聞こえていた。

あるファミレスにて――

「ねえ、絹旗。御坂はどこに行っただろうね……」

「さあ、でも彼のことですから超へらへらして私達の前に出てきそうですけど」

「結局、あの蒼い光が謎って訳よ」

「……」

滝壺は今でも彼の話になると黙ってしまふ。

（チツ、この私に何も連絡しないなんていい度胸じゃない）

アイテムのリーダーである麦野 沈利は内心イライラとしながらそんなことを思う。

いつでもふざけているような男だったが嫌いではなかったのだ。

最初はあの興味深い発火能力に惹かれて暗部に引き入れたが、彼は闇の中でも自分というものを見失わず歩き続けようとしていた。

それは自分達には出来なかったことだ。

自分のことだけで精一杯のだったはずだ。それでも彼はアイテム全員のことも見ていた。仲間だと認めてくれていた。

正直、馬鹿じゃないかと思うこともあった。

けど嫌じゃなかった。嫌じゃなかったのだ。

彼といると、たまに自分達は暗部の人間だということを忘れられた気がした。

それは滝壺、絹旗、フレンダも一緒だったに違いない。

（あれから一年経つけど、私はあいつが戻ってくるまでアイテムを守って見せる。だから早く戻ってきなさい、あんたは私の道具^{もの}なん

だから)

柄にもなくそんなことを思う麦野であった。

ああ？どこだよ、ここ。

俺は薄暗い何かのケーブルやコード、チューブだらけの部屋にいた。何だかすごく嫌な予感がするが。

「目を覚ましたか」

声が聞こえた。

それは男にも女にも聞こえ、大人にも子供にも聞こえ、聖人にも囚人にも聞こえた。

俺は恐る恐る顔を声の聞こえてきた方に向ける。

赤い液体が満たされたビーカーの中に緑色の手術着のようなものを着た『人間』が逆さまに浮いていた。

俺が一度捨てたもの。

「アレイスター」クロウリー？」

「どうして君が私の名前を知ったのかということは聞かないでおう。今は意味のないことだ」

「で、俺はどうしてこんな場所にいるんだ？」

俺は失敗したはずだったのに……どうして。

「うむ。君にはある仕事をしてもらう」

はっ、どうせロクなことじゃないんだろう。

「君がそう思うのならそうなのだろうな」

.....。

「その前に一つ聞きたいことがある」

「何かね」

「滝壺は、アイテムの連中は無事か？」

「それに関しては何の問題もない。小事はもういいかね？」

「.....ああ」

なんか、腹立つ言い方だな。ビーカー叩き割ってやろうか。

「君にはアイテムを抜けてもらい、グループと言う所属してもらおう。とは言ってもグループはまだ完全な組織の形になってはいない。君で二人目だ。」

「もし、断ったら？」

まあ、どうせ――

「君の大切な人達の平穏な生活を壊したくないだろう？」

ハッ！！ワンパターンな奴（笑）

「ふははははは！！了解した」

一体何を考えているんだ……アレイスター！！クロウリー。

まあ、今だけはお前の手の中で踊っというてやるよ、道化のようにな。

「そうか。話はこれだけだ、追って連絡する」

俺の横に女——櫻井……じゃなかった。結標 淡希が現れ、気が付けば俺は外にいた。

「どうもー」

「貴方、アレイスターによくあんな口聞けるわね。早死にしたいの？」

呆れたような目で俺を見てくる結標。こいつも、もうちょっとしたらグループの一員になるんだよね……

「いやいや、早死なんてしたくない。ただあいつにとって俺達なんて道具以下の存在だ。あれぐらいじゃ、大した問題じゃないよ、そうだろ？」

「……そうね。その通りだわ」

彼女は納得したようにうなづく。

「まあ、また会うことになるから忠告しとくよ。……男女平等パン

チに気を付ける」

「は？」

あのパンチはかなり痛そうだったからな（笑）

一応忠告しておこう。

俺はポカンとする結標に手を振りながら窓のないビルを後にした。

久しぶりに美琴と上条にでも会いに行くか。滝壺達には……会う資格なんてねえな。

俺はもう滝壺には会ってはいけない。

会いたいという気持ちはある。けど俺は失敗したのだ。

俺では彼女を幸せにしてやることなんて、もう出来ない……

——『人間』を捨てた俺が人を愛するなんてしてはいけないのだから。

第十八話 転換……（後書き）

読んで頂きありがとうございます！！

これで第二章終わりです！！……やっとなです。

どうなるかはお楽しみということ！！

では次回も頑張りますので読んで頂けたら幸いです！！

第十九話 やっぱり似てるね、つか全く同じ（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがよろしく願います。

第十九話 やっぱり似てるね、つか全く同じ

「なんでだあああああ!!」

俺は自分の寮の部屋で絶叫していた。叫ばずにはいられるか!!
こんなことって……。

少し時間を遡って説明しようか。

「ただいまー」

歩くのがなぜかとてつもなく辛く、帰ってきた時には夕方六時を回っていた。

あれ？

俺は自分の部屋に違和感を覚える。これは洗練されているっていうのか？

最後に部屋を出た時は急いでいたので散らかしたままだったのだが……誰か、片づけた？

真っ先に思いつくのが美琴。あいつには鍵を渡してある。
だとしたらヤバイかも……俺のコレクションが危機的状況だ。

ピピツと電子音が鳴り響く。

部屋に置いてあるデジタル時計だ――

それを見て俺は心臓が止まるかと思った。

このデジタル時計はカレンダーが搭載してある。そのカレンダーは
今現在 20××年 8月 20日。

俺が最後に記憶している日付から約1年とちよつとが経っていた。

「——嘘だろ、おい」

確か、この時期だと、もうあの実験が——。

俺は震える手でズボンのポケットに入っている携帯を取り出した。
何も反応しない——つまり解約されていた。

慌てて近くのコンビニに行き、新聞の日付を見る。20××年
8月 20日という同じ日付が目に入る。

気付けば俺は自分の寮に戻っていた。

——ことは何か？俺は一年以上眠ってたってことか？

そして冒頭の絶叫。

アレイスタアアアアア！あの野郎黙ってやがったな！！だからあの時、笑ってやがったのか！！

「クソッ！！妹達シスターズはもう……」

彼女たちは美琴のクローン以前に俺の妹だ。半身をもがれるような思いがする。

「今日も実験が行われてんだよな……だったら」

相手アクセラレータが一方通行だろうと関係ない。

——叩き潰す。

直後、ガチャンと扉が開いた。俺は慌てて振り向く。

「——お兄ちゃん？」

美琴が立っていた。制服姿ということは学校の帰りなのだろう。大丈夫か？顔色かなり悪いし、化粧で隠しているようだが目の下にクマもできている。それにかなり痩せた。

「美琴か？——！？」

ついそう確認してしまうほどに今の美琴はやつれていた。だがそう言い終わった瞬間、体に衝撃が襲う。

美琴が抱きついてきたのだ。一年も寝ていたせい、それだけで俺の体は後ろに倒れそうになった。

「おい、美琴——」

「どこに——どこに行ってたのよ。ずっと——ずっと、うう、うう、うわあああああああああ！！！！」

大声で泣きじゃくる美琴。

俺は困惑しながらも泣きやむまですっと背中を撫でていた。

「はあ」

俺は大きな溜息を吐く。

泣き止んだ美琴は今寝ている。妹達シスターズのことによっぽど神経が張

り詰めていたのだろう。

こいつの寮の門限って何時だ？うーん、俺って家族だし別にいいか。

しばらく寝かしといてやりたいのだが……

「ごめんなあ、美琴。お兄ちゃん、肝心な時にお前の力になれなくて……」

俺は美琴の頭を撫でてやる。よく見ると本当にやつれたな……

「明日だな、最後の日は」

俺は立ち上がる。

何が明日だ。今日も俺の妹は殺されてんだ、待てるかボケ。そう
だろ？

”少し出かけてます。消えないから安心してチョ”とメモを残して俺は外に出た。

そう言えば、上条はもうこの時には美琴と出会ってたよな。兄
心としては複雑だね。

「あ、……インデックス 禁書目録のこと忘れてた」

ってことは上条記憶喪失じゃね？俺のこと忘れてんじゃないか！ど
うしようorz

俺は別にインデックスのことは嫌いじゃないが、あまり関わるつもりはない。俺は美琴のことで精一杯だ。まあ、上条が助けを求めてきたら喜んで手伝うが……絶対、そんなことにはならないだろう。あいつはそう言う奴さ。

「俺、実験がある場所知らないんだよな……クソ!!」

どうすればいい？明日まで待つなんて論外だ。

それでも俺は走り回った。どうして上条はあんなだけ妹達シスターズと出会えてんの俺は全然会えないんだ!？あいつ等の兄貴だぞ、おい!!
一時間ほど走り回って――

「いた――よっしゃ、ビンゴ!!」

美琴とまったく同じ姿の少女が街中をブラブラとしていた。しかし、本当に無表情だな。まあ、悪くない!!むしろ、そういうのもありだ!!

小さな頭に不釣り合いな軍用ゴーグルを装着している。

……あれ、カッコいいな、欲しい。

俺はとりあえず妹の跡を追う。そして後ろから――抱きついた。
結果――死ぬかと思った。服が焦げたぞ、おい。
反省はしている。だが後悔はしていない。

「お兄様シスコンですか、と驚きながらミサカは内心、キモいんだよチツと舌打ちをします」

心の中がダダ漏れた。それに軽く傷ついた（泣）

「おい、こんな夜遅くに出歩いてちゃ危ないだろ妹よ」

とりあえず時間稼ぎだ。つか、今日はこいつでいいのか？

「お兄様は勘違いをしてい――!!?」

その瞬間、俺は吹き飛ばされた。死ぬかと思った、これは本当に。
弾は俺のすぐ真横の壁を大きく抉っていた。

「み、みみ美琴さん？」

俺はガクガクと震えながら美琴の様子を窺った。

「……………ぶす」

「え？」

「潰す！……！」

バチバチと凄まじい電撃を纏う美琴。これ、麦野より怖いんじゃない？
ね！？

何か、音がバチバチってレベルじゃなくなってきたんですけど！？

「す、すすすみません！！すみませんすみませんすみませんすみません！！マジですみませんでしたあ！！」

電撃を纏いながらどんどん近づいてくる美琴。俺にはその姿が鬼神に見えた。

ダメだ……死ぬ……。

俺は恐怖のあまり目をつぶっていた。

トンと体に小さな衝撃が走った。

「ねえ、お兄ちゃん。今までどこに行ってたの？」

静かで……泣きそうな声だった。

「……ごめん、ちょっといろいろあつて」

本当は隠し事なんてしたくない。でもこいつに暗部のことを話すわけにはいかないのだ、絶対に。

「何度も連絡したのに……」

「ごめんな、本当にごめん」

だから俺には謝ることしかできない。

「おいおい、兄妹の会話じゃねえぞ、とミサカは若干ドン引きしつつ内心を吐露します」

美琴は妹を見るなり目を見開いて驚いた。

「ちょっと！！何でアンタが！！」

「落ち着け、美琴」

俺は何とか美琴をなだめる。

「どうして、アンタが。どうしてどうして」

美琴が目虚ろにしてブツブツと呟いている。

——美琴の奴これは相当ヤバイな。

「取り敢えず部屋に入ろう」

俺は二人の背中を押しながら言った。

「ミサカはこれから——」

「黙れ、お前にはこれから説教だと言ったはずだ

——が、そうだな、その前に飯でも食うか。美琴は寮の方は大丈夫か？」

「黒子が何とかしてくれてると思うから……多分」

確か、こいつの寮の寮監はとんでもない人だったな。うまくいってるといいが……

そんなことを思いながら俺は料理の準備の始めたのだった。

第十九話 やっぱり似てるね、つか全く同じ（後書き）

読んで頂いてありがとうございます!!

やっ和美琴の再登場!!

出来れば滝壺もちよこちよこ出していききたいと思いますのでご安心を!!

という訳で妹達編スタート!!

第二十話 家族との食事は良いものだ（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしく願います。

第二十話 家族との食事は良いものだ

という訳で今夜の御坂家の食卓は――

「豚肉の生姜焼き定食だー!!」

ご飯、味噌汁、キャベツの千切りを添えた豚肉の生姜焼き。
うん、完璧だ。

「……」

「……」

「おい、何だよ？文句でもあるのか？」

美味いんだぞ？豚肉の生姜焼き……

「文句はありません。ただお兄様があまりにも庶民な料理をするの
とにミサ力はかなり驚いています」

「そ、そうね。お兄ちゃんってこんな料理も作れたんだ」

「俺はただの庶民、おかしいのはお前等の方だ。特に美琴、お前は
どうせ学校で高級料理ばっか食ってんだろ？ったく、男はなあ、こ
ういう庶民的な料理の方が好きなんだよ。お前等も彼氏ができたら
作れるようにしとけよ？」

事実、高級料理は俺の腹に合わない。一回食った見たけど量が少
ないのだ、それならチェーン店の牛丼の大盛り食ってるほうが良い。

「余計なお世話よ!!」

美琴は顔を真っ赤にして叫ぶ。妹の方は……相変わらずの無表情だ。

「まあ、味は保障するから食おうぜ」

早く食わないと冷める。メシは暖かいうちに食べる、これ鉄則。

「じゃ、手を合わせて――」

「いただきます」

妹も俺たちの真似をして手を合わせる。こいつはこういう食事をした事なんてないんだろうな……

「うん、我ながら主夫になれる腕だ」

一年も寝てたけど腕は衰えてなかった。記憶が止まってただけだからか？

久しぶりの家族での食事……滝壺ともこうしてメシを食べたかったな。けどそれはもう叶わない。俺が失敗してしまったから、もう叶わないのだ。

「お兄ちゃん？」

「泣いているのですか？とミサカは心配した顔でお兄様に問いかけます」

二人が箸を止めて俺の顔を見ていた。

「あ？」

俺は自分の顔に触れて、涙を流していることに初めて気付いた

「……ふははははは！……つい自分の腕に感動してしまった。どうだ、美味しいか？」

「うん、寮のご飯とは違った美味しさよね」

いや、高級料理と比べないでくれ。向こうの料理人に失礼だぞ、それ。

「こういった料理は初めてですがとても暖かい味がします、とミサカは感嘆した面持ちを素直に表現します」

お前は無駄に文章が多いな（笑）

「そうかそうか！……これからは毎日食えるからな」

俺はワシワシと妹の頭を撫でてやる。

「……そう、ですね」

少し、妹の顔が寂しそうになったのを俺は見逃さなかった。やっぱり、こいつは実験の犠牲になるつもりか。

でも、安心しろ。本当に毎日食わせてやれるようにしてやるからさ。

「おかわりはいるか？」

俺がそう聞くと、二人とも顔を少しだけ赤くして、おずおずと皿を出してきた。

やはり恥ずかしいのだろうか？男の俺にはわからんが。

そして、俺達はいろんな事を話しながら食事続けた。

特に美琴が超電磁砲レールガンになった時のことはかなり面白かった。世界で俺だけじゃね？レールガン誕生の秘話とか知ってるのって。

妹の話には味噌汁を吹いてしまった。いきなり自分のパンツのこ
と話し始めるんだぜ？美琴は慌てて止めていたが、俺は兄妹のパン
ツに欲情する変態ではない。

そんな楽しい時間はあつという間に終わる。

「じゃあ、私は帰るわ。寮の見回りもまだあるから」

美琴は玄関で靴を履きながらそう言う。

「ああ、気を付けてな」

レベル5でも心配なものは心配だ。

ふと、美琴は妹の方を見た。今にも泣きだしそうな、何かを堪えているかのような顔で。

「アンタも気を付けて帰りなさい」

それだけ言うと美琴は出て行った。

結局、俺には何も話してくれなかったな……兄貴として頼ってほ
しかったんだが、あいつは俺に心配掛けないようにしてんのか？っ

たく、もう心配で心配で胃に穴が開きそうだったの。

「まあ、それはお互い様か……」

そして、俺は妹の方を見て問いかける。

「で、どうする？泊まってくか？」

「お兄様は私をどうするつもりですか？とミサカは身の危険を感じつつ問いかけます」

「何もしねえよ！！バカか！！」

「つたく、つまらねえ事言いやがって。」

「今から研究所？に帰るのも遅いだろ……それに洗い物も手伝ってくれ。女の子でも洗い物ぐらい出来ないダメだぞ」

「そう言って、俺と妹で皿を洗い始める。」

妹は泡を面白そうに眺めていた。

「取り敢えず、時間を稼げ。実験が開始されなければこっちのものだ。」

「なあ、妹よ」

「なんですか？とミサカは問いかけます」

「今日さ、みんなでメシ食ってて楽しかったか？」

俺は静かに問う。

「楽しいという感覚は理解しかねますが……この時間がずっと続けばいいのにとミサカは思いました」

「そうか……そうだよな」

こいつには確かに感情が、心がある。

俺は確信する。

実験動物なんかじゃない、こいつは俺の妹だ、家族だ。

そして洗い物が終わった俺達は順番に風呂に入り、寝る準備をする。

「じゃあ、俺はソファで寝るから。お前はベッドを使え」

「一緒に寝ましょうとミサカは潤んだ瞳でお兄様を見つめます」

思いつきり無表情なんですけど。

「いや、兄妹でもダメだろ」

俺がそう言うとなぜか悲しそうな顔をする妹。

「はあ、しょうがねえな」

そして、俺と妹は一緒に寝た。

妹ですからね？何も感じませんでしたよ、悲しくなるくらいに。前世の俺なら悶え死んでいただろうな。

そんな事を思いながら俺は夢に中に沈んでいく。

真っ赤だ——血の海。

何体もの妹達が積み重なるように倒れている。

全員が俺を見ている。

突然、一人が口を開く。

「どうして、助けてくれなかったのですか？とミサカは問いかけます」

——違う。俺は……

「何が違うのですか？とミサカは問いかけます」

別の妹が問いかけてきた。

「助けるつもりなんてなかったくせに——！」

美琴か？

「お兄ちゃんになんか助けることなんてできない——！」

——助ける、助けてみせる。

「『失敗したくせに』——」

——ッ。

[illegible]

「うわッ!」

何だよ、夢か。
最悪だ……。

「あれ、妹は？」

隣にいたはずの妹が消えていた。

一言「ありがとうございました」と。

「……クソがあああああ！！！！！」

俺は着替えて外に飛び出した。

「ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな!」

何で……何だよ。みんなでメシ食って楽しかったんだろ！？ず
っとそうしていたかったんだろ！？

なのに何で自分から捨てようとするんだよ！！
一年寝ていたせいですぐに息が上がってしまう。

「ハア、ハア、ハア。——ツ、どこに、どこにいたんだ」

俺は裏路地に入る。

こっちの方が実験場に最適だろう。

奥の方でガシャンと何かが倒れる音がした。

俺は走る。息をするのを忘れる。

「間に合え！！俺は失敗したくないんだよ！！」

そして俺は突きつけられる。

——現実には残酷だということを。

願うだけじゃ、どうしようもできない。

血の海の中に妹だったものが沈んでいた。

「どうして…… どうしてなんだよッ！！！！うわああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ！！！」

俺は服が血で汚れるとも気にしないで妹を抱き起した。もはや体中傷だらけだった。

傷口から血がとどめなく溢れている。

「……ツ」

普通なら聞き取れないような本当に小さな声。

俺にはそれが奇跡のように思えた。

涙が出た。まだ終わってない！！まだだ！！

「助けてやる……絶対助ける！」

俺は妹を抱えて走り出した。

「まったく、こんな患者は初めてだよ？」

「お願いします！！何でも、何でもしますから妹を助けてください！！だから！！」

俺はここが病院だということも忘れて叫んでいた。

「誰に向って言っているんだい？ここからは僕の戦場だよ？そして僕は必ず戦場から帰還してみせるね」

そう言っ戦場て冥土返しは手術室に入っていた。

第二十話 家族との食事は良いものだ（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

冥土返しがカッコいい回でした（笑）

あとお気に入り登録が100件を突破しました！！ありがとうございます！！

感想お待ちしております。批評等どんどん受け付けますのでよろしくお願いします！！

第二十一話 お兄ちゃんも悩むことくらいあるんだよ。(前書き)

趣味で書いていたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第二十一話 お兄ちゃんも悩むことぐらいあるんだよ？

薄暗い病院の廊下。

静としていて神聖な空間のようにも思えてくる。

しかし、目の前の扉の向こうでは凄まじい戦場が繰り広げられているのだろう。

俺は待ち続ける。

今は妹が生きて戻って来るのをただ座って祈ることしかできない。俺は結局何がしたかったんだろうか。

守りたい——ただその思いだけが先走っていたのかもしれない。失敗してばかりだ。

愛した女性を救うことが出来ず、今度は家族ですら……

俺はやはりどの主人公にもなれない。

まさしく道化。

馬鹿みたいに踊り続ける事しか出来ない道化。

なぜ道化は踊るのか？

踊り続けた先に答えはあるのだろうか？

俺はそこまで辿り着けるのだろうか。

——わからない。俺は何をするべきなのかわからない。

「俺は何をすればいい……誰か教えてくれ」

俺は誰も救えなかった。

俺は踊ることしか出来ない。だが、どうして踊るんだ？

永遠に続く問答。

空しい理想を抱えたまま、アレイスターの手の上で踊ることしか出来ないのだろうか。

確かにそれは俺の選んだ道だ。

しかし、その時は俺の思いはまだ消えていなかった。
ひび割れていたがまだ崩れていなかったのだ。
今では、それが見事に崩れてしまった。

あるのはただの残骸——ただ守りたいという概念のみ。

「教えてくれよ……」

”ならば踊ればいいじゃないか”

突然、声が聞こえた。

それは男とも女とも判別がつかない声。

「誰だ!!」

俺は周りを見回すが誰もいない。

薄暗い廊下が永遠と伸びているだけだ。

”踊り続けろ、踊らない道化はただの愚者だ。そうだろう？
それにどうやらお前は勘違いしているようだ……。お前は難しく考
えすぎているんだ。物事はもっと単純だ”

声は俺の頭に直接響いてくる。

どうやら、俺の精神はイクところまでイってるらしい。

”だから私が先導してやろう。お前にはb n f vが必要だろう？な
らば与えてやる。あの時のように、あのg w q jを”

声は響き続ける。ノイズが混じって聞こえづらい。

普通は精神系の能力者を疑うが、この声は違つと断言できる。

超能力とは別の次元のものだ——神聖な、俺達が絶対に辿り着けないような何かそんな存在。

俺の直感がそう告げている。

”お前は——j n s aなのだから”

それはまるで俺を試すような——そんな口調だった。

「ちよつと、待て！！お前は誰だ！！」

”私か？私はq k d uだ。……うむ、おそらく君にはまだ理解できない。だがいずれわかる時が来る”

それきり声は聞こえなくなった。

「何だよ……一体、何だつてんだよ」

俺は頭を抱え、呻く。

自分の体に何か異物が混じっているような感覚。

それは目が覚めた時から感じていた。ただ疲れている所為だと思つていたがどんどん違和感が強くなっている。

何かが俺の中にいる——

それから、しばらくしてガシャンと音がして妹が手術室から出て

きた。

全身に包帯を巻かれており、顔の部分だけが空いていて酸素マスクが添えられていた。

まるでミイラみたいで妹の面影の欠片もない。痛かっただろう、苦しかっただろう。

もしかしたら、あのまま死なせてあげた方が良かったのかもしれない。

俺はもはや自分の行動が正しいのかすらわからなくなっていた。ほとんどの人間は正しいと言うのだろう。しかし、妹にとってはどうなのだろうか……

「なんとか連れ戻すことが出来たよ。とても大変だったけどね？」

冥土返しがマスクを外しながら手術室から出てくる。しかし、言葉とは裏腹にその姿は全く疲れを感じさせなかった。

「先生、妹はどうなるんですか？」

あの怪我だ。たとえ完治したとしても、これからまともに生活できるとは思えない。

「そうだね……おそらく何らかの障害が残るだろう。なにしろ全身の血管がズタズタだったんだ。ここまでもったことが奇跡だよ？」

俺にはどうしたら全身の血管がズタズタの状態で助けることが出来たのかがわからないんだが。

「だが、そのケアも僕の仕事だよ？だから任しておきなさい」

「先生、ありがとうございます……」

俺はただの義務としてその言葉を口にする。

これで良かったのか？もしかしたら、妹はこれから死ぬよりも辛い人生が待っているかもしれない。その道を歩かせるようにしたのはこの俺だ。

——これで本当に良かったのか？

「どうして君は妹が助かったのにそんな辛そうな顔をしているんだい？」

冥土返しが僅かに口調を鋭くして聞いてきた。

言えるわけがない。

けど答えが欲しい。

「——いえ、何でもありません。本当にありがとうございます」

結局俺はそう言っただけで頭を下げた。

そんな事を聞けるわけないだろ？

「今君に出来ることは彼女にそばに居てあげることだ。いいね？」

冥土返しはそう言って去って行った。

俺はすぐに妹の居る病室に向かった。廊下を歩いていると、すでに窓から朝日が射していた。

今日で終わる。

本物の主人公が全て解決してくれる。こんな偽物の道化なんかじゃなく、本物の主人公が何もかも解決してくれる。

俺が関わると、ろくなことにならない。だったら俺は大人しくしているだけだ。

みんなが幸せになれるなら踊ることも止めてただの愚者になろう。

俺は妹が居る部屋まで辿り着き扉に手を掛けた。

部屋に入って妹を見ると、彼女は大量の汗を浮かべて苦しそうに顔を歪めていた。

俺の所為でこんな目にあわせてしまった。

この苦しみは何時まで続くのだろうか……しかも、それは傷が治ってからも続く。

もういつその事、今ここで楽にしてあげた方がいいんじゃないのか？

俺は手を妹に近づける。

「ごめんな」

そのまま俺は――

「お、兄様……ありがとうございます、とミサカは、感謝の気持ちで……いっぱいです」

突然の声に俺の手が止まる。

妹は俺を見て微笑んでいた。あの無表情な顔ではなく、本当に嬉しそうな笑顔で。

こんなダメな兄貴を、家族ですら救えないダメな人間を見て微笑んでいた。

どうして苦しいはずなのに、痛いはずなのにそんな風に笑ってくれる？

「違う、俺は――」

俺は最低の兄貴だ。本当に最低の……。

「ミサカは……嬉しかった、のです。ミサカのよ、うなクローンを家族として見てく、たことが」

さらに妹は続ける。

喋ることですら辛いはずなのに、どうして……。

「ミサ、力は単価18万円で……生産できるクローンです。それでも……お兄様は探し、に来て助けてくれ、ました。

——だから、お兄様、ありがとうございました」

最後に力強くそう言うのと再び妹は眠りについた。

しかし、なぜかその顔は苦しそうではなく安らかだった。

こいつは生きていることを喜んでいる？

「——は、はははははは……！……そうだよな、そうだったよな」

ああ——やつとわかった。

ああ——やつと目が覚めた。

くだらねえ、本当にくだらねえよ。

そつだよ、俺は何を勘違いしてたんだ。

何時から俺は主人公ヒーローになりたがってたんだ？

そんな肩書きなんざいらねえんだよ、馬鹿か俺は。

俺はこいつ等の兄貴だから——

それだけで十分。

俺はただの御坂 美弦だ。

世界で一番多く妹がいるただの兄馬鹿シスコンだ。

だったら兄馬鹿シスコンがやるべきことは一つしかないだろ？

——俺の可愛い妹をこんな風にしたゴミ野郎をブチ殺してやる。
それonlyだ。

そして俺は眠っている妹の頭を軽く撫で病室を出る。

「待つてろよ？^{アクセラレータ}ゴミ野郎。完全にキレたシスコン舐めんじゃねえぞ
——ははははははは！！」

道化が兄馬鹿^{シスコン}にクラスチェンジした瞬間だった。

第二十一話 お兄ちゃんも悩むことぐらいあるんだよ？（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

自分で書いててもよくわからなくなりました、そんな回です。

次回ついに一方通行と激突か？という感じですが、まだあまり考えていません（汗）

でも、絶対また入院するんだろうな……

という訳で次回も頑張りますのでよろしく願います！！

感想お待ちしております！！アドバイス、批評等何でも結構ですのでよろしく願います！！

第二十二話　すぐに氣を失う男はダメですか？（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第二十二話　すぐに気を失う男はダメですか？

真っ赤な夕焼け。

俺は子供の頃から夕焼けが大嫌いだった。転生する前も、した後も大嫌いだった。

それはいつもの世界を一変させる。

それだけだ。笑われるかもしれないが俺にはそれがとても怖かったのだ。

そんな夕焼けの中――

「ッ??ハアハア」

「オイオイ、あれだけの大口叩いてこんなモンですか?」

「??ゴフッ」

言葉の代わりに口から出てきたのは鉄の味がする液体だった。

真っ赤な目をした死神が両手を広げながらゆっくりと近づいてくる。しかし、裏路地の塀を頼りに立っている俺はそこから動くことすらできない。

「妹……逃げろ、ここから出来る限り離れろ」

アクセラレータ

一方通行の後ろで倒れている妹に俺は気力を振り絞って言う。少なくとも、今の俺よりは動ける筈だ。逃げることぐらいなら出来るだろう。

「!??お兄様、どうしてですか……」

「いいからさっさと行けええええ！」

非難するかのうに首を振る妹を俺は無言を言わずに怒鳴る。

「兄妹愛つーやつですかア？バカみてエーな茶番に付き合わされるこっちの身も考えてほしいもんだなア」

アクセラレータ

一方通行はコツンと足元の石を蹴った。

ただそれだけ。

それだけの動作で小さな石ころは凄まじい威力の弾丸となって俺の肩を打ち抜いた。

メキメキツゴリツという、異物が肉を押しつけて骨に当たる音が響き渡る。

数秒遅れて痛みが脳を支配する。

「ぐあああああああ！」

「チツ、ギャーギャーうるせェンだよ。このオレの邪魔をしたんだア、タダじゃおかねェ」

そう言って、トンと足を踏む。

「!?——やべえ!!」

アクセラレータ

俺は転がるようにして一方通行と距離を取った。

—
が。

「テムエはどこを向いてンのかなア!!」

すぐ真横でそんな声が聞こえたと思った瞬間、腹に激痛が襲い、俺はビルの壁に叩きつけられる。ベクトル変換を用いた瞬間移動か？速過ぎて対応できねえ！！

あと壁にぶつかつたが痛いなんてもんじゃない。つか逆にここまできると、もう何も感じないのだ。

「つまんねエ。つまんねエよ、オマエ。さっきみたいにもう少し楽しませてくれよオ！！」

そんな笑い声と共に次々と小石という弾丸が俺に突き刺さる。それは俺の命を奪い取る攻撃ではなく、俺を痛ぶるための攻撃だ。皮膚を破り、肉に食い込む程度の威力——このドS野郎が。更に後々ロリコンが入ってくるんだから性質が悪い。

「うぐ……クソが……」

ボロ雑巾みたいにアスファルトに転がる俺。まったく、情け無いにも程がある。

「まったくよオ、無能力者だと思つたら訳の分からねエ能力を使いだすしよオ……かと思つたら、その能力を使いもしねエ。なんなんだよ、テメエは」

知るか！！自分の能力について聞きたいのは俺の方だよ！！

「まア、この俺がテメエみてエな三下の能力に負ける訳がないんだけどなア。ギャハハハハハハハ！！」

凶悪な笑みを浮かべ近づいてくるが、突然バチチチチイイイイと一方通行と俺の間に電撃が走る。それはそのまま近くに積んで

あつたセメント袋に当たり、あたり一面に粉塵が舞い上がる。

「アア！？なんだア！？」

「ッ——今だ！！」

俺は妹のいる方に駆け寄り、そのまま引つ摺んで路地の角を曲がる。

その直前、俺は手に持っていたライターに火をつけて粉塵が舞っている所に投げつけた。

『粉塵爆発』

大気などの気体中にある一定の濃度の可燃性の粉塵が浮遊した状態で、火花などにより引火して大爆破を起こす現象。

凄まじい威力となった炎は裏路地一面に広がり、そのまま一方通行^{イタ}を飲み込んだ。
アクセラレ

「走り続けるぞ……できるだけ遠くに」

「はい、お兄様……」

爆発の衝撃で妹も俺もフラフラになりながら、それでも走り続けた。しかし、裏路地から抜けようとした瞬間、ガッンと人にぶつかる。

「うわッ！！」

俺は盛大に尻餅をつく。

相手を見るとそれは久しぶりの顔だった。

ツンツン頭が特徴の学生服を着た少年、手にはしっかりと黒い子猫が抱えられている。

そして呆けた顔で俺のことを見ている。

そりゃ驚くだろう、爆発音の後に突然血まみれの男と女が出てきたんだ。普通の学生なら一目散に叫んで逃げ出すだろう。

だが相手はあの上条当麻だ

「!?!?!—御坂妹か?」

「いえ、正確には——」

律儀に説明してる暇なんてないだろうが!!

「妹!! いいから逃げるぞ」

そう言っただけで立ち上がるようにするが。

あれ? 立ねえぞ、おい。

「——ッ」

「おい!! 大丈夫か?」

上条は俺が血塗れなのを見ても冷静に対応している。魔術関連の事件で慣れたのだろうか?

「上条——」

上条は驚いた顔をしていたが、困惑した顔に変わる。やはり俺の事もすっかり忘れてしまっているらしい。ちょっとショックだぜ、このヤロー。

「何驚いた顔してんだよ……御坂美弦だ。一年会わなかっただけで忘れちまうとか、この薄情者め」

「ああ！！御坂か！！いや、血塗れだから一瞬わからなかったんだよ。——つか、おい！！お前がどうして血塗れになってんだ！？」

「話は後で。それよりここから逃げないと——」

視界が霞み始める。

血を出しすぎたかな……

俺は目だけを横に動かして妹を見るがどうやら問題ないらしい。よかった、本当によかった。今度はちゃんと守ってみせたぜ……。

「取り敢えず、ここから離れるぞ」

そう言って上条は突然、俺の腕を掴んで肩を貸しはじめた。

「本当にすまん——」

それだけ言つと俺の意識はプツンとシャットダウンした。

「？——おい！！御坂！！」

「お兄様！！お兄様！！」

意識を失う直前、聞こえてきたのは二人が必死に呼びかける声だった。

俺っていつもこんな感じじゃね？でもさ、一方通行と戦って生き延びたんだ、取り敢えずは勲章ものだと思う。だろ？
アクセラレータ

第二十二話　すぐに氣を失う男はダメですか？（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

久々の投稿の割に文章が短くて申し訳ありません（汗）

次はこの話に至るまでの経緯を三人称で書こうかなと考えてます。

若干、一方通行の視点になるかもしれませんが……

次回もよろしく願います！！

感想お待ちしております！！アドバイス、批評等なんでも結構です！！

第二十三話 風邪ひいたから語り部休むわ（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがよろしく願います。

第二十三話 風邪ひいたから語り部休むわ

とあるコンビニの店内にてガシヤンガシヤンという音が響く。

音を発しているのは真つ白な髪に赤い目をしたアルビノ少年こと
アクセラレータ
一方通行。

ガシヤンガシヤンと不機嫌そうな顔で?? それだけで店

員の女性は失神しそうになっている?? カゴに同じ銘柄の缶コーヒ
ーを入れ続けている。

この少年、基本的に飽きるまで同じ種類のものを大量に買い込
む癖がある。それはもう何十本と買い込んで冷蔵庫がそれ一色に染
まるくらいに……ここまでくればそれはもう頭の病気である。

ガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガシヤンガ
シヤンガシヤンガシヤンガシヤン

周りの客も完全にドン引きしている。

だが彼は気にしない。彼には最強のベクトル操作があるのだ。そ
の常人には決して耐えられないような空気ですえ反射する。

(つまんねエなア、毎日毎日同じ顔の実験動物をブチ殺すのも好い
モルモット
加減飽きてきたしよオ)

彼は今ある実験に参加している。実験の名は絶対能力進化実験―
レベル6ソフト
―学園都市レベル5第三位超電磁砲の二万体のクローンを殺し続け
ることでレベル6に引き上げるという鬼畜外道な実験である。

しかし彼は気にしない。自分が最強から無敵になれるのなら、そ
れはもう単なる作業へと変わる。

まさしく某ゲームで永遠とスライムだけでレベルを上げるようなも
のである。

（アアアアアア！！つまんねつまんねつまんねこのヤロウー！！）

カフェインの不足による禁断症状が出始めている。

「ぜ、全部で9850円になりますう」

（この女はなんでオレの顔見て泣いてんだア？）

レジにて店員が涙目になりながら会計をしているが彼は気にしない。適当に金を払いパンパンに膨らんだ袋を片手にコンビニから出る。

余談ではあるが彼には荷物の重さは感じていない。重力のベクトルを操作をしているのだがそのせいで後に白モヤシと呼ばれることになるのは今の彼は思いもしない。

おもむろに袋から缶コーヒーを一本取り出してグビグビと飲み始める一方通行。飲み終わるまでの時間は約30秒。そして2本目の手を出そうとしてふと思う。

自分は今、実験のためにクローンを殺している。それはレベル6になるためであり、殺すことを愉しんではいけないはずだ。彼女たちも実験に対して否定していない。むしろ、胸糞悪いことだが？？そのために存在しているとさえ言っている。

しかし——しかし、もし逆に彼女たちから生きたい、死にたくない、殺されたくない、助けて、と言われれば自分はどう行動するのだろうか……

そこまで考えて一方通行は自嘲気味に笑う。
アクセラレータ
自分はすでに一万以上ものクローンを殺している。今更こんなバ
カなことを考えても、全て遅すぎる。

（めんどくせエな、そろそろ時間かア？）

空が夕暮れに染まり始める？

とある公園にて二人の男女が何やら言い争っている。

「お兄様に危険な目に合わせる訳にはいきません、とミサカは若干
苛立ちを露わにします」

苛立ちを露わにしていると言っている割には無表情な妹達シスターズ検体番
号10031号である。

「だからー、わざわざ殺されに行こうとする妹を黙って見てる兄貴
がどこにいんだよ」

対して妹達の兄と名乗る少年ー御坂 美弦は苛立ちを隠そうと
もしていない。目には酷いクマができており、また顔はかなりやつ
れている。

「別にさ、実験なんてバツクレればいいじゃねえか。少なくとも10030番目の妹は生きようとしてたぞ」

「10030号の思考は理解しかねます、とミサカはバツサリと切り捨てます。そもそも実験を中断した場合は即研究所に回収され処分されてしまうでしょう、とミサカは残酷な現実をお兄様に突き付けてみます」

事実、この妹？？10031号を含めて妹達はミサカネットワークによって情報の伝達を行っているが10030号の『生きたい』という気持ち——感情が他の妹達に伝わっても彼女たちはその感情を理解することが難しいのだ。

「だああああ！！だから俺が行って何とかするって言うてんだろ！！」

「お兄様を危険な目に合わせる訳には——」

この不毛のやり取りが実に数十分に渡って行われている。

それにしてもこの少年、学園都市最強を相手に何とかすると言っている時点で相当の命知らずである。

しかも彼が止めようとしているのは統括理事会ですら黙認するといった裏に相当ヤバイものがついていると想像できる実験だ。

それに美弦自身は何もなくてもあと数時間で別の主人公が一方通行を倒してこの実験を中止に追いやり妹達を救うことを知っている。
ラレクタ

それでも彼は止まらない。止まってしまうえば、もうそれは自分自身を否定してしまうことに繋がる。

彼は主人公などといった大それた人間ではない。ただ単に妹が大

好きな兄馬鹿^{シスコ}なのだ。

ただそれだけ。それだけで彼は進むことができる。

「お前は生きたいと思わないのかよ……」

「私の存在価値はこの実験の為にありますよ、とミサカは答えます……」

そもそも私たちはお姉様のクローンにすぎません。単価18万円……ボタン一つで生産できるので、とミサカも負けじと反論します」

「ふざけるなっ!!」

ここにきて初めて美弦は語気を荒げて怒りを露わにした。周りの人間が何事かと二人に目を向ける。10031号もビクリと肩を震わせる。

「ふざけるなよ……何がクローンだ、何が単価18万だ!!そんなもん関係ねえ!!お前らはお前らがだろうが!!誰が何と言おいがお前は、お前らは俺の大切な妹なんだよ!!だから……だから二度と俺の前でそんなことを言わないでくれよ!!」

最後の言葉はもはや懇願のものとなっていた。かつて??いや、美弦にとってはほんの少し前だが、彼には妹という家族とは違った大切な人が、仲間がいた。

そんな人々と過ごした場所は決して暖かな場所ではなかった。利用し利用され、殺し殺される、そんな場所。

だが、そんな場所で彼は初めてこの世界で家族以外の強い繋がりを見つけた。それ故に彼はそれを大切にし、守ると誓った。

??だが現実は残酷だ。必死になって守ろうとしたものがある時

一瞬で彼の目の前で砕かれたのだ。

彼は激昂し、人間を捨てた。

もはや彼には家族しかない。今の彼を再び人間に繋ぎ留めているのは家族という存在だ。しかし現にその家族は残酷な実験の犠牲になっている。

だから??

「だから、たとえお前らが何と言おうが俺は兄として、御坂 美弦として妹達を見殺しにはできない」

「どうして……どうしてですか、とミサカは、ミサカは……」

無表情だった彼女の目に初めて困惑の色が浮かぶ。

兄、御坂 美弦の言葉はミサカネットワークを通じて他の妹達の
無いとされていた心というものを揺さぶる。

この感覚は何なのか。妹達には理解できない。だが、それは確かに感じるのだ。

「……そうですか、なら仕方ありません、とミサカは諦めます」

落ち付きを取り戻した10031号が美弦の首に手を伸ばす。

「?????つが!!??」

バチンという明らかに危ない音がすでに人氣がなくなった公園に響いた。

「時刻は7時10分つてとこかア。次の実験動物はテメエでいいんだよなア？」
モルモット

「はい、検体番号10031番です、と確認をとります」

空がオレンジ色に染まる中、人一人いない薄暗い裏路地。
一方通行と10031号は互いに向かい合っている。

彼女にとって、これはただの実験に過ぎない。10030回繰り返してきた実験——今回は10031回目というだけだ。

だが——彼女の心はなぜ揺れていた。先ほどの兄の言葉が頭から離れないのだ。

当の美弦は気絶させ、公園のベンチに寝かしてきた。

レベル3の欠陥電気レディオノイズと言っても人を気絶させることは容易い。美弦本人もまさかいきなり電流を流されるとは思わなかっただろう。

あのままだと美弦は断固としてついてきただろう。

だが10031号は彼に傷ついてほしくなかった。様々な研究者たちに出来損ない、実験動物と呼ばれてきた自分たちを家族だと言ってくれた兄がこんなことで死ぬ必要なんてない。なにより彼が傷つけば御坂オリジナル 美琴が悲しむ。

しかし、本人は気が付かない。この思いこそが自分たちに心があるという証拠だということに——

「ンじゃ、そろそろ始めますかア」

アクセラレータ

一方通行は気だるげに言う。

10031号はライフルF2000Rを構える。このライフルまたの名を『おもちゃの兵隊』といい、赤外線で敵を捕捉し電子制御により最も効率よく対象に弾が当たるように弾道を調節するといった機能が搭載されている。

アクセラレータ

しかし、そんな銃も一方通行の前では二つ名の通りただのおもちゃではない。

「では、時刻19時15分、第10031次絶対能力進化実験を開始します。所定の位置についてください、とミサカは伝令します」

レベル6ソフト

そして、最強による圧倒的な蹂躪が始まる。

イレギュラー

だが、それはたった一人の少年——御坂 美弦によっておかしな方向へと転がっていく。

「もしもーし、なに人の妹をこんな裏路地に誘い込んでくれてんだ、このモヤシ野郎」

（なんだア、コイツ……どっかで……妹？）

突然現れた自分とそう年の変わらなさそうな少年に驚きながらも、記憶を探っていく。

そして思い出した。一年前、ファミレスで食事をしていた時に出会った兄妹のことを。後に超電磁砲と呼ばれることになる少女の兄

のことを。

「オイオイ、こういうときはどオすればイイんだア？見られたから消すなんてベタなことすんじゃないやねエだろうな？」

そして10031号に目を向けた瞬間、一方通行の目は驚きによつて見開かれる。

あれだけ殺してきた妹達シスターズが、あれだけ殺してきても何の表情も浮かべなかった実験動物モルモットが――涙を流していた。

（はア！？コイツらに感情なんてなかったんじゃないやねエのかよ）

一方通行は珍しく焦燥を覚える。

それはそうだ、今までただの彼女たちを人形だと思って殺し、自分の心を守ってきたのだ。それが今にも崩れようとしていた。だが彼も止まらない、そうしないと今までのことが全て無駄になってしまう。

ただ無敵を目指す、誰も傷つかないために。

一方、10031号も今までにないほど混乱していた。

自分自身の目から流れるもの、ここに来ればただじゃすまないとわかっているのに再び立ち上がり来てくれた兄へのこの感情。これらが彼女の心を乱す。

「どうしてですか……どうして……来たのですか。気絶するほどの電撃を受けてまで」

「ああ、美琴からあれ以上の電撃何発も食らってるから慣れた……」

それによ、俺の妹達をこんなにしたこのモヤシ君をぶん殴りたいからさ」

「アア！？誰がモヤシだア！！」

「うるせえ、さんざん俺の妹達をいたぶって殺してきたんだ。死ぬ覚悟できてんだろっな」

「ギャハハハハハハ！こんな人形のどこがオマエの妹だっただア！？」

アクセラレータ

一方通行は狂ったように笑う。

10031号が涙を流した時点でもうただの人形じゃないことは誰が見ても明らかである。

だが彼は認めない、認めてしまえば自分の何かが崩れてしまう。それがどうしようもなく怖いのだ。

「てめえにはわからねえよ。あいつらが俺を兄と呼び、俺があいつらを妹と呼ぶ限りな——俺達は兄妹なんだよ！！」

「お兄様……」

「つまねエことガタガタ抜かしてんじゃねエぞ。そんなことはオレには関係ねエ、ちょうどイイ加減退屈してたんだア」

狂った笑いが突然止まり、静かな殺気が充満する。

「……殺す」

そう、殺さなければいけない。自分の存在を脅かしたきつかけを作ったこの男はこの場で殺す。

ダンッアクセラレータと一方通行の足元のアスファルトが爆ぜた。

「つとー!!」

美弦が真横に飛び退った瞬間、今まで美弦がいた所を何かが高速で通り過ぎていく。

「触れたらゲームオーバーってか」

「ギャハ!!よくわかってンじゃねエか!!」

そう触れれば体が内側から爆発して即死亡。どう考えても美弦の分が悪い。

いきなり美弦は両手を前に突き出した。

「ちょうど、狭いところでよかったよ」

.....。

「ア？」

「は？」

御坂 美弦から発火能力が消えていた―― ??????

「はあああああああああああ！？」

愕然とする美弦。演算をしようとする途中で蠟燭の火が消えるかのように積み上げた方式が頭の中から消えるのだ。

「何でだよ！！クソッ！！」

再度、演算を開始しようとするが何度やっても結果は同じだった。

「オマエさア、無能力者の分際でこのオレ様にアレだけの大口叩いたンですかア？」

そう呆れたように言って一方通行は近くに積み上げられていたコンクリートのブロックに手を添えた。
アクセラレータ

ズガガガガガガガガガッガガガガガガガッ！！

コンクリートの塊が凄まじいスピードで美弦を襲う。
破片が飛び交い、ビルの壁や道路を抉り粉塵を上げ美弦の姿を覆い隠す。

「お兄様！！……………ッ」

10031号が一方通行アクセラレータを睨み付ける。彼女のその瞳はもはや無感情なものではなく、激しい怒りを灯していた。

「はン！！人形が一丁前に人間のマネしてンじゃ——」

バチイイイイイイ！！

言葉が言い終らないうちに青白い電撃アクセラレータが一方通行に向かっていく。それは明らかな殺意が込められた攻撃であった。

彼女にとってこのドロドロとした感情は初めてのものだった。頭がチカチカとしてまともに思考ができない。ただわかることは目の前の存在が許せない。

だがそんな感情を込めた一撃であっても——やはり最強の前では脅威にすらならない。

電撃アクセラレータが一方通行に触れると同時にそれは倍の速さで10031号に牙を剥いた。

「くッ…… あッ！！ああああああ！！」

その小さな体が弾き飛ばされ固い道路に叩きつけられる。

彼女が電撃エレクトロマスター使用で電撃に抵抗がなければ死んでいただろう。それぐらいの攻撃だったのだ。

「オマエらもイイ加減学習したらどうですかア！！」
アクセラレータ

一方通行が笑いながら10031号に近づき、その体を蹴り上げようとした瞬間——

ゾワリ

彼の背中に寒気が走った。それは生物としての本能が避けると訴えかける。そして彼は無意識のうちに生まれて初めて回避行動というものをとった。

ドガンツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「ッ!？」

その攻撃は見えなかった。ただ彼が0・000001秒前にいたところが消えていた。

文字通り物質も空間も消えたのだ。残っているのはポツカリとした漆黒の穴。それは時間が経つにつれて塞がっていく。

（何がどオなつてンだよオ!!こんな能力聞いたことねエぞ!!）

ゾワリ

今まで粉塵が上がっていた場所を見る。未だに寒気が収まらない。

そこには蒼い光を背中から噴射させた美弦がゆらりと立ち上がる姿だった。

光が当たった場所から紅い炎が上がり、その熱によって層気楼ができる。その姿はとても幻想的であった。

「h s d 止 f s」

美弦の口から言葉が漏れたがそれは言葉と言えるものではない。

「ッ! !」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

壁が、道路が、何もかもが消えていく。一方通行はそれを避けていくことしかできない。アクセラレータ

「クソがアアアアア! ! 舐めんじゃねエエエエエ! !」

自分は学園都市最強の一方通行だ。それなのにどうして自分が押されなければいけない? この現状が彼をひどく苛立たせる。

しかし??

「f b s f j v n v f s b v b v j b s b v f j s b b v f s b v
f b s f k n m s n f j s b f——あああああああ! ! 止ま
れええええええッ! !」

突然の絶叫と同時にボンッという何かが爆ぜる音がすると同時に蒼い光が霧散していく。

(コイツ何考えてンだア?)

アクセラレータ

いきなりのことですら暫く呆然としてしまう。正体不明の能力だが、なぜ自らその力を潰したのか理解できなかった。

だが??

「ヒヤハハ!! 舐めたマネしてくれたなア!!」

だが——殺すことには変わらない。

そして、前話の冒頭へと続く。

第二十三話 風邪ひいたから語り部休むわ（後書き）

久々の投稿……やはり学校が始まるとなかなか連続で投稿するのは難しいですね。

それに久々の投稿なのに長い駄文がタラタラと……申し訳ありません（汗）

次回からまた主人公視点に戻ります。すみません、私の気分で行きなり三人称視点にしてしまいました。よろしければ感想をお願いします。ダメなものはダメとアドバイスしてもらえると嬉しいです。では、次回も頑張りますのでよろしくお願いします！！

第二十四話 そろそろチート能力になってもいいだろ？（前書き）

趣味で書いたような小説です。

駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

第二十四話 そろそろチート能力になってもいいだろ？

俺は身体を引きずるようにして街中をあるいていた。学生の街と言つても、まだ夜の八時だ。いくらでも外をぶらつく輩はいる。そんな中で顔じゅう傷だらけ、肌が見えるはずの部分が包帯で覆われている俺はさぞ目立つことだろう。

一度倒れたらまた起き上がればいい。

例えどれほど無様でも起き上がれば先に進めるだろ？

もう顔も思い出せない遥か昔の友人が言った言葉だ。どうして、そんな厨二病くさい台詞が言えるのかとドン引きしていた覚えがあるが、今この瞬間ではその言葉が胸にグツとくる。

「この世界に生まれた者の宿命だな」

俺は苦笑しつつ少しずつ先に進む。

発火能力が消えていたことは誤算だった。仮説はいくつか考えられるが今話すことではない。

しかし、それと同時に一つの可能性が俺の中で生まれたのだ。ほんの僅かだが、その可能性に俺は賭けてみたい。

「それよりも上条はともかく、二人の妹達には帰ったら半殺しにされるかもな。美琴は……」

考えただけで背筋が凍る。

俺は解約された携帯電話の時計を見る。少し急がないといけないみたいだ。

シスターズ

もう妹達は実験には参加しない。これは彼女達の意味だ。

これからは彼女達は自分達の為だけに生きていく。

時間になっても現れない妹達に対して一方通行や科学者達はどんな反応をするだろうか。

俺は書類の登録上はレベル3の発火能力者のままだ。あの時、能シス

テムスキャン

力測定は受けてレベル4と言う結果が出たが、その後の正式な手続きをし損なった。

パイロキネシス

メジャーすぎる発火能力者のレベル3にレベル5、しかも序列一位が殴り飛ばされたとしたら実験は凍結するだろうか……

上条には申し訳ないがこの事件だけはこの俺に解決させてほしい。

俺はさっきまでの病院でのやり取りを思い出す。

「な、なんだよ、それ……。冗談だろ？」

上条は顔を青ざめさせさせて俺達から学園都市の深い闇を聞いていた。

「残念ながら全て本当です、とミサカは答えます」

やはり妹は俺より幾分、怪我が軽かったらしく簡単な治療で済んでいた。

一方、俺は見事にベッドの上だ。

「そんなことが許される訳ないだろ！何なんだよ、それ！-」

上条はようやく怒りが湧き出てきたらしいが顔色は悪く、引き攣ったままだ。やはり相当ショックが大きかったらしい。

「……ビリビリは……ビリビリはそのことを知ってるのか？」

「ああ、知ってる」

「っ！？じゃあ、アイツはこんなものをずっと抱えてきたっていうのかよ……」

しばらく黙り込んだ上条は突然、立ち上がり病室のドアへと向った。その足取りには迷いはなかった。

「何処に行くつもりだ？」

俺は決まりきったことを聞く。

「ビリビリの所に決まってるんだろ」

やはり決まりきった答えが返ってきた。だからこそ？？

「行ってどうするつもりだ？美琴に会って何て言っつもりなんだ？お前は」

俺は静かな声で上条に問いかける。

「それは……」

上条は俺の目を見た瞬間、言葉を嚥んで顔を下へと向ける。

俺は確かめる必要がある。俺自身の言葉で上条の覚悟を確かめる必要がある。それは俺にとって重要なことなのだ。

「ここから先は真っ暗な闇だ。

下手に進むな。

少しでも躊躇するなら引き返せ。

進めば最後だ。

戻ってこれない。」

—— お前にその覚悟はあるのか？上条当麻」

長い沈黙が病室を支配する。ピッピッピッという心電図の音がやけに大きく響いていた。

「……わからない。」

けどさ、もし目の前の女の子が泣いてるんだったら手を差し伸べないわけにはいかないだろ？」

「下手をすれば消されるんだぞ」

俺の上条に対しての最後通知にして最終確認。
だが、それに上条は笑って答えた。

「確かに消されるのは怖いさ……それでも見て見ぬふりなんて俺にはそんな器用な真似できないし、何より後悔したくないんだ」

うわぁ……何というか……。

「お前やつば主人公ヒロだわ……………第〇〇学区の鉄橋。そこに美琴はいる。俺の代わりに行ってくれ」

俺の雰囲気が緩くなったせいか上条はボカンとしていたが、力強く頷いて病室から出て行った。

「良かったのですか？とミサカは台詞の少なさに若干の苛立ちを覚えつつ質問します」

今まで黙っていた妹が僅かだがムスツとした感じで聞いてきた。なんか可愛くて抱きしめたいのだが、ダメですか？

「ああ、あれでいい」

今の俺じゃ美琴の電撃に耐えられそうにないし、俺にはまだやり残したことがある。

何より美琴も俺なんかより上条に来てもらった方が嬉しいだろう。俺は壁にかかっていた時計に目を移し、時間を確認する。

「そろそろ俺も行かないと……服とつてくれ」

「もう、止めても無駄なんでしょうね、とミサカは呆れながらも、とても心配しています」

妹は不安そうにしながら俺の手を握ってきた。あの短時間で本当に感情が豊かになったなあと思いつつ俺は答える。

「まあ、何回も死にかけてきたけどさ。やっぱ……………可愛い妹達
が家で待っていてくれたら俺は絶対に死なないってミサ力はミサ力は
シスコンを極めてみたり」

「……………さすがに最後の台詞はなかったかなあ」

苦笑いしながら俺が立つは小麦粉が詰まったコンテナが山積み
にされた操車場。

人気がないため漆黒に染まった空に浮かぶ白いソレ。

まあ大げさな描写をしたが白モヤシがコンテナの上に立っ
ているだけだ。

「それで……………なんでデメエがここに来てんだア？アレだけ痛
めつけたのによオ」

赤い瞳を輝かし、嫌な笑みを浮かべながら一方通行はコンテナ
から飛び降りてきた。

「いやさ、二つ良いこと教えてやるために来たんだ」

対して俺自身も（おそらく）温和な笑みを浮かべながら一方通行

に答える。

「アア？」

「じゃあ、さっそく一つ目……お前さ——もう絶
対能力者になれないから」

その瞬間、空気が凍ったのがわかった。
カッと赤い目を見開く一方通行。見る見るうちに怒りに顔を歪ま
せていく。

「はア？何いってンのオマエ。くだらねエこと言っ
てンじゃねエぞ
！！」

妹が実験に参加しなければ必然的に絶対能力には辿り着けない。
まあ、アレイスターはこの実験では一方通行は絶対能力者にはなれ
ないことを知っていたようだったが。

「問題はお前にはねえよ。あるとしたら妹達の方だ。あいつらはも
う人形なんかじゃない歴とした人間だ。もう実験動物みたいに殺さ
れるのはごめんなんだとさ」

俺は一方通行に追い討ちをかけるように言葉を続ける。

人形ではなく人間。

それは一方通行の支えを壊す言葉。

「……うるせエ」

一方通行がぼそりと呟く。

「お前はただの大量殺人者だったってわけだ」

だが次の瞬間、空気が爆発した。

「うるせエエエエ！……！関係ねエエエんだよオオオオオ！！！！
！殺すぞオオオ三下がアアアアア！！！！！」

びりびりと鼓膜が振動する。

「ンなことわかってンだよオオオオオ！！！！クソがアアアアア！！！！！」

その声には激しい怒りと共にどうしようもない悲しみ、憤りが滲み出ていた。

微かだが泣いているように聞こえる。

「そうだな……お前はわかっていた。けどそれを認めるのが怖かったんだろ？」

そもそも、こいつも誰も傷つけないから絶対能力者^{レベル6}を目指したのだ。だが選んだ道がまずかった。そして気付くのも遅過ぎたのだ。しかし、俺は一方通行のことを可哀想だと思うことは出来ない。思ってはならない。それは妹達への裏切りにあたるし、事実、何度も言うが俺は一方通行^{アクセラレータ}を絶対に許さない。

俺は片手を掲げて、意識を集中させる。

——既存の法則で考えるな。

——全てを白紙に戻せ。

——アレがこの世界に存在するものとして仮定し、一から法則を作り直せ。

俺は激しい頭痛に襲われながらも今までとは全く異なる新しい演算を続ける。

——アレは俺だけの能力だ。

——そうアレこそが俺の自分バーソナルリアリティだけの現実。

次の瞬間、ゴウツという音と共に掲げた手の平に懐かしい感覚が走る。

「そこで二つ目だ、最強。妹達の復讐ついでにお前の目をしっかり覚まさせてやる」

手の平の炎はこれが当たり前だとも言うように紅色に激しく燃え盛っていた。

第二十四話 そろそろチート能力になってもいいだろ？（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

皆様には本当に申し訳ないほど投稿が遅くなってしまいました。

リアルが馬鹿みたいに忙しいです。レポートの嵐で死にそう……すみません、言い訳です、はい。

妹編、今は原作に沿ってますが、まだ中盤あたりです。後半はオ리지ナルの展開にしていこうかと思ってます。

あ……二十二話で美弦が投げたライター、あれについても次の章（番外編になる予定）で書こうかと思ってます。その他もろもろの日常とかもまた書きたいですね。冬休みも言ってますぐですし連投できるぞ……多分。

あと主人公がチートっぽくなってきた気がします……何とかしなければ（汗）

では次回も頑張りますのでよろしく願います！！

感想等もお持ちしておりますのでドンドン書いていただければ嬉しいです！！

第二十五話 (前書き)

趣味で書いたような小説です。
駄文ですがよろしく願います。

第二十五話

とある街の中心部から離れた操車場。

そんな中で高速でぶつかり合う二人の人間。いや、二人はもはや人間が可能にする範中を逸脱している。むしろ、人間なのか？と疑問視したくなるだろう。

一人は真っ白な髪にそれと同じくらい白い肌を持ち、その両目は赤く輝いている。男と女とも見える中性的な顔を怒りで醜く歪ませ、地面を抉りながら高速で移動し、触れれば一撃必殺となる自分の両の手を相手にぶつけようとしている。

もう一人の方は一言で言えば地味。唯一のトレンドマークはその綺麗な茶髪である。家に籠ってゲームでもやっている方が似合っているといった感じた。だが、それはあくまで見た目の話であり、異質なのは彼の手から激しく噴射している紅炎である。

別にこの学園都市において手から炎を出すことは何も珍しいことではない。問題はその炎の色だ。通常、パイロキネシス発火能力者の炎の色は普段よく見るのと同じ色をしている。空気中の酸素濃度を変えれば温度と共に色も変化するだろうが、デュアルスキルそれでは実現不可能な多重能力者になっってしまう。勿論、彼は多重能力者などではない。デュアルスキル

そもそも、彼は昔はともかく、今現在では発火能力者とも言えるかどうかすら怪しい。パイロキネシス

そんな不可思議な炎をブースターのように扱い、迫りくる死の両手を紙一重で避け続けている。

「イイ加減に死にやがれエエエエッ！！」

そんな怒声と共に赤い瞳に白い髪と肌を持つ少年、アクセラレータ一方通行が地面を蹴り上げる。それによって巻き上げられた砂利が不自然な動きを見せた後、殺人的な威力を持った弾丸となり茶髪の少年、御坂美

弦を襲う。

「ちッ！！ワンパターンなんだよッ！！」

瞬間、美弦の背中からゴウッという音と共に三対の炎の渦が出現し、そのうちの一对で前方から襲ってくる弾丸を全て焼き払った。だが、それで終わらないのが学園都市最強の一方通行である。

美弦が自身の前方を炎の渦で塞いだ一瞬の隙に背後に回り込み、その手を背中に突き立てようとした。

が??――

アクセラレータ
一方通行の視界が紅く染まった。それと同時に聞こえるは凄まじい爆発音。

アクセラレータ
美弦は一方通行の攻撃の先の先を読み、背中の残った炎の渦を一気に膨張し爆発させたのだ。

「ッ！！??」

驚愕する一方通行。それは反撃を受けたことに対してではない。身を襲うであろう高温の熱と衝撃は全て目の前の敵に跳ね返る筈のだったのだが、それらはまったく違う方向へと向かったのだ。

反射が通常に作用しなかったのだ??。

「どうなってやがるッ！！」

アクセラレータ
距離を取ろうとする一方通行に美弦は両手の炎を放射した。それは常人ならば一瞬で灰にする程の威力を持つ。

それが一方通行を襲う。^{アクセラレータ}

だか、やはり結果は同じ。炎は一方通行に触れると同時に全く関係のない方向へと屈折した。^{アクセラレータ}

美弦はそれを見て思案する。

（やつぱり……新しい法則の中に少しでも既存の法則を残すところなるか……。でも、今の俺の頭だとこれが限界なんだよな。反射されないだけましだし）

再び背中から炎を出現させる美弦。

「テメエ……それ、ただの炎じゃねエだろ。何か法則を弄ってやがるな？どこかのメルヘン野郎みてエなマネしやがって」

流星は世界一の頭脳を持つと言ったところだろうか。その言葉に僅かに表情を歪ませる美弦。

（マジかよ……幾らなんでもネタバレするの早くねえ？でも、垣根の時も直ぐに解析してたしな。どうする？）

そんな事を考えていた美弦にまさに隙ありと言った感じで一方通行は地面に設置してあったレールに触れる。^{アクセラレ}すると、それはまるで生き物のような動きを見せて、美弦を襲った。

流星の美弦の紅炎も鉄骨を一瞬で溶かすのは不可能だ。

「なッ！？しまったッ！！」

スガガガガガガガガガという地面にレールが突き刺さる音が響く。

「余所見してンじゃねエぞオオオオツ！！！！三下アアアアツ
！！！！ギヤハハハハハハハハハハ？？？？」

アクセラレータ

一方通行は狂ったように笑い続ける。

土煙が舞い、美弦の様子はどうなったかわからない。だが次の瞬間、ドンツという爆発と共にルールが吹き飛んだ。

アクセラレータ

それと同時に八本の炎の渦が一方通行に伸びる。

「何度やつても同じだア！！」

そう何度やつても同じ……それは一方通行に傷を負わせることができない。

「はあはあはあ？？」

息を荒くさせて煙の中から現れた美弦。

服はあちこちが破れ、身体に巻かれた包帯のあちこちに血が滲み出していた。

「オイオイ、どオした三下ア。テメエの力はそんなモンだったかア
！？悔いのねエようにしとけ、テメエはもうすぐ死ぬんだからなア
！！！」

第〇〇学区とある鉄橋

「助けて……誰か助けてよお……」

どこかで闘っている少年と同じような綺麗な茶髪を持つ少女が橋の上で泣いていた。

彼女の名は御坂美琴。常盤台中学に在籍する学園都市序列第三位だ。

またの名を超電磁砲。レベルガン 電撃使いの頂点に立つ少女だ。
そんな彼女が決して人前では見せない涙を流していた。

レベル6シフト
絶対能力進化実験。

それが彼女をここまで追い詰めたもの。

何年も前に筋ジストロフィーの治療法開発のため自身が提供したDNAマップにより産み出されたクローン。今では本来の目的から大きく外れて使い捨ての実験動物モルモットのような扱いを受け、殺されている。自分の分身が、だ。

並の中学生の少女なら発狂していてもおかしくない。彼女の心がここまで持っていること自体が奇跡だった。

「……は、あはははは、あははっあはははははは——」

しかし、それももう限界だった。その笑い声は聞いている者の心すら悲しくさせる。

彼女には兄がいた。少し頭は残念だが、それでも優しい兄がいたのだ。幼いころから学園都市で生活していた彼女にとって唯一頼れる存在だった。

彼女がまだ能力開発を受けたばかりの頃、スキルアウトに目を付けられ抵抗もできずに連れて行かれそうになったことがあり、その時、美弦はレベル1の発火能力者バイロキネシスだったのに関わらずスキルアウト全員を病院送りにしたことがあった。

美弦は全身傷だらけになりながら、泣いている事しかできなかった美琴の頭を優しく撫で続けていた。

それからだろうか、美琴が死に物狂いで時間割りカリキュラムをこなしていたのは。

そして念願だったレベル5になったその日に美弦との連絡は途絶えた。

『こんな頼りない妹を残して死ぬわけないだろう？』

美琴の頭に何故かその言葉が浮かんできた。

必死に捜して回った。放課後の時間はすべてそれに費やし、アンチスキルにも連絡し、時にはコンピュータにハッキングを仕掛けてまで情報を引き出したがすべてが無駄だった。

そう、まるで美弦の存在がこの世界から消えてしまったかのようにだった。

そして、更なる不幸が少女の心を押し潰す。

第三位の軍用クローンが秘密裏に作られている。

そんな、ただの噂。

その筈だった。

だが、美琴は出会ってしまった。彼女自身に……。

そこから語られる顛末は悲惨なものだ。

一人の少女を『死ぬしかない』とまで思わせるほどに……。

助けを求めればよかったのだ。

どんな能力を打ち消す右手を持つ少年でも、ツインテールのテレポート少女でも、学園都市随一のハッカーでも、突然ふらりと帰っ

てきたバカな兄でも、誰にでも助けを求めればよかったのだ。

それでも……

大切な人を巻き込みたくない。

その優しい思いが美琴の強さであり、最大の弱点なのだ。

「そろそろ……行かなきゃね。ごめんね、お兄ちゃん」

美琴の覚悟は決まっていた。だからこそ――

「何やってんだよ、お前……」

彼女を救う主人公ヒーローが必要なのだ。

「うおおおおオオオオおおオオオオオッッッ！！！！」

もはや、どちらの雄叫びなのかわからない。

ただ言えることはお互い自分の感情を相手に叩きつけているということだ。

殺意と殺意。憎しみと憎しみ。悲しみと悲しみ。

様々な感情がぶつかり合う。

ガガガガガガガガガッと地面との摩擦で火花を散らせながら鉄骨が美弦に迫る。それを器用に両手の紅炎をブーストさせ、避けていく。

「ああ f s g ああ j g c s ああああッ！！！！」

美弦は自分を奮い立たせるような雄叫びを上げ、背中の炎を渦状の形態から両手と同じブースターのように変化させた。それは爆発的な加速を生み、一気に一方通行に肉薄する。

「何度やつても同じだアッ！！」

ダンと一方通行が地面を踏みつける。すると足元の砂利が地雷でも爆発したかのように爆ぜた。

「うるせええ d s f ええッ！！」

美弦は両手を突出す。

ズバアアアアアアアアアッ！！

両手から放たれたのはこれまでにないほど強力な火炎放射。いや、それはもう紅い光線と言ってもおかしくない代物だった。

それは砂利を溶かし、一方通行を飲み込んだ。

「ッ！！??」

その攻撃が今までとは違うことに一方通行は気付く。
僅かに熱を感じるのだ。

それに慌てて身を包む火炎放射の中から飛び出す。

一方通行は余分な刺激をすべて反射するように設定してある。それなのに……

（どういうことだア！？オレの反射が効かなくなって？？）

瞬間、ジクリとした痛みが一方通行アクセラレータの左腕に走った。

「——アア？」

味わったことのない感覚につい声を上げつつも腕を見る。

（なんで腕がこんなに赤くなってんだ？）

それが火傷だということを理解するまで時間がかかった。それと同時にそれは痛覚神経を侵し始める。

「ツぐ、アアアアアアツ——」

まだ反射が僅かに生きていたおかげで火傷自体はそこまで重いものではない。だがその反射のせいで、『痛覚』というものをまともに感じたことのない一方通行アクセラレータにとって、それは火のついたタバコを押し付けられることと等しい痛みだった。

「テメエ……三下の分際でやってくれんじゃねエかアアアアアアアアアツ——」

一方通行が地面に拳を叩きつける。

美弦はやられる前にやろうと更に加速し、一方通行アクセラレータに向かっていく。

だが——その判断は美弦にとって致命的なミスとなる。

美弦は凄まじい勢いで一方通行との距離を縮める中、アクセラレータトドトドツという地響きのような音を聞く。

まさにソレは一瞬の出来事だった。

そして、その一瞬で今二人がいる操車場は地図から消えることになる。

第二十五話 …………… (後書き)

読んでくださりありがとうございます!!

約二名、メツチャ叫んでいる回でした。

なんか一方通行のキャラがおかしいな、と感じたら申し訳ないです。

今回も美弦は語り部から外されました(笑)

もうクビでいいか……

まだまだ続く妹編、何卒よろしく願います!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8201v/>

とある科学の火炎放射《ファイアスロアー》

2011年11月10日01時19分発行